
第 1 9 期
日 本 イ ン ド 学 生 会 議
活 動 報 告 書

2 0 1 5

THE 19th JAPAN-INDIA STUDENT CONFERENCE
OFFICIAL BULLETIN



2015 年度

第 19 期 日本インド学生会議

活動報告書

開催地

インド(デリー、チェンナイ、コルカタ)

開催期間

2015 年 8 月 12 日～9 月 4 日



デリーの日本語学校 IJES にて



在インド日本大使館にて



チェンナイ開会式にて



チェンナイ閉会式にて



コルカタから望むガンジス川



コルカタ閉会式にて

-目次-

実行委員長挨拶	6
お世話になった方々からのお言葉	7
参加者名簿	18
第一部 日本インド学生会議とは	
基本理念	20
概要	21
沿革	22
第二部 活動報告	
年間活動報告	37
各局活動報告および反省	38
第三部 本会議報告	
実施要項	42
本会議日録	45
分科会レポート	72
訪問プログラム報告	98
ホームステイ	113
開会式・閉会式	118
参加証	123
第四部 個人語録	
実行委員個人エッセイ	126
第五部 おわりに	
謝辞	137
規約	139
編集後記	143

《実行委員長挨拶》

第 19 期日本インド学生会議実行委員長 仲村 祐一

日本に帰国してしばらく時間が経ち、元の生活に戻り新しい目標に向かい頭と体を動かそうとするのですが、何をやるにしても身が入りません。人間誰しも特別な体験をした後は日々の生活において喪失感のような感情を抱くように、僕も刺激の強いインドという国で 25 日間生活し帰ってきてからは淡々と過ぎる毎日にどこか満足できていないのかもしれないかもしれません。しばらくはこのような状態から脱せそうにないですが、早く生活を元の状態に戻し滞在中に見聞き感じたことをまとめて情報発信をしていきたいと思っています。

僕たちは、インド滞在 25 日間でデリー、チェンナイ、コルカタに訪問をしました。各都市気候が異なるため数名体調を崩しましたが、全体としては大きな問題はなく本会議を無事に終えることができました。19 期の活動を振り返ってみると充実感や達成感というよりももう少しできたなという物足りなさのほうが大きいと感じています。実行委員が一新され引き継ぎも上手くいかなかったことからほとんど全てが手探りという状態で始めの時期は毎日頭を悩ませていました。しかし、全体的な見直しと個々の役割を明確化したことで完成させることができました。ここが今後改善していく所になりそうです。本会議についても限られた時間の中で文化や言語、宗教、人種の異なる学生の交流する大変良い機会であったので勉強会をもっと開き、相手を理解した上で望むべきだったと感じています。

日本とインドは相違点が多くあるため様々な事柄について考えていましたが、アショク・チャウラ先生からの「インドは宗教も言語をはじめとする多くの事柄が地域によって大きく異なります。しかし、国全体としてはまとまり成長しています。ではそのまとめていることは何でしょうか？」という問いについては特に時間を費やしました。しかしまだわかりません。もっとインドについて知り、隅々まで訪れてみない限りは解は見出せない、そう感じました。

最後になりましたが、当団体を創設し 19 年間活動を支えてくださった長浜浩子様、またインド滞在時において活動が円滑に進むよう取り計らっていただいたチャウラ様、ランガナタン様、スリラム様、ヴェーダ様、ニガム和子様を含む先生方や学生達。そして第 19 期本会議の開催にあたりご支援いただいた助成団体、後援団体の皆様。また、サポートしてくださった顧問の近藤正規様、OGOB の皆様に深く御礼申し上げます。

《お世話になった方々からのお言葉》

在日インド大使 H.E. Ambassador Mrs. Deepa Gopalan Wadhwa

AMBASSADOR OF INDIA

भारत का राजदूत



Message

I note with great pleasure the successful completion of the 19th Japan-India Student Conference (JISC), organized in India from 12 August to 04 September, 2015 and that the participants are bringing out a report about the valuable experience of their interaction. Last year, I had the pleasure of meeting the Indian students who enjoyed their visit to Japan. I do hope that the Japanese students likewise had a memorable trip to India.

JISC has been making an important contribution towards promoting mutual understanding and friendship among students from Japan and India and broadening the global view of the participant to cultivate the spirit of 'global citizens.'

JISC has become a catalyst and I congratulate and extend to them my best wishes for their continued success which would not be possible without the dedication and hard work of the organisers.

Deepa Gopalan Wadhwa
Ambassador of India to Japan

Tokyo
10 November, 2015

第19期日本インド学生会議が有意義な成果を挙げられたことに心よりお慶び申し上げます。

皆さんとデリーの大使公邸でお会いしたのは8月半ばのことでした。インド到着から間もない皆さんの、少し不安げで、緊張した表情が思い出されます。しかし、そんな中でも皆さんは、堂々とインドに来た理由を語り、インドで体験したいことを語り、将来の夢を語ってくれました。皆さんの物怖じしない態度とチャレンジ精神を目の当たりにし、皆さんならインドでの充実した1ヶ月を過ごすことができると確信しました。その後、皆さんはチェンナイ、コルカタへと移動しながら、現地の学生との意見交換、企業訪問をはじめとするフィールドワーク、ホームステイなど、様々な活動に取り組んでこられたと聞いています。インドで過ごしたこの夏は、おそらく皆さんのこれまでの人生で最も刺激的な日々だったのではないのでしょうか。

皆さんのような若い世代の交流は、「最も可能性を秘めた二国間関係」とも言われる関係の将来にとって非常に重要です。日印関係は、近年、政治面・経済面で益々緊密の度合いを深めています。政治面では、昨年8月末から9月に訪日したモディ首相と安倍総理との間で、両国の関係を「特別の戦略的グローバル・パートナーシップ」へと強化することに合意しました。また、閣僚の訪問も活発で、この一年ほどの間に、日本からは文部科学大臣、国土交通大臣、外務大臣、経済産業大臣がインドを訪問しています。経済面でも、日本企業のインド進出、対インド投資が増加しており、両国首脳も日印経済関係のさらなる発展に向けて高い目標を設定しています。

しかしながら、両国間の関係はこのような政治や経済の面の関係進展のみによって深化するものではありません。留学・観光・青少年交流を中心とした人的交流が、個々人のレベルで互いの国のことを知り、理解を深め、両国国民の相互理解に基づいた友好協力関係を強化する基礎となるものです。今回皆さんが参加された「日本インド学生会議」は、相互理解を深め、先輩方が築いてきた信頼関係をさらに発展させる機会となったと確信します。皆さんが多くの先輩たちからバトンを受け継いで、見事に第19期の活動をやり遂げたことに対し、心からの敬意を表するとともに、皆さんがこれからもインドに関心を持ち、そこから広く世界に視野を広げ、有為の人材として活躍されることを期待しています。

第19期日本・インド学生会議実行委員会への挨拶

第19期日本・インド学生会議のコルカタでの日程は（2015年8月27日～9月3日）、市内ジャドプール大学講堂での開会式で始まり、私もゴーシュ・カルカタ大学南・東南アジア研究所教授とともに祝辞を述べる機会を得ました。知り合っていないコルカタの大学生との交流は双方ぎこちなさが見られたものの、出席していた在コルカタ日本人会・日本商工会のメンバーは手作り感に溢れた楽しい行事であったとの感想を寄せられていました。総領事公邸におけるコルカタのインド人日本語教師を交えての懇談では、うちとけた雰囲気でも両国参加学生のお話をうかがい、お互いを良く知ろうという意気込みが強く感じられ、清々しい気分になりました。

日本とインドとの交流は、6世紀頃日本に伝来した仏教に始まって以来、宗教、美術、哲学、文学等様々な分野での交流の歴史があります。近年はアジアの確固たる民主主義国同士として政治、経済を中心にますます両国関係は深まっており、両国にとって最も重要な二国間関係の一つであるとの認識が広がっていることは喜ばしいかぎりです。私がコルカタで親しくさせて頂いているインドの元外務次官は、インドと日本は地理的に遠く離れており、それぞれ独自の文化、民族性等を有しているが、長い交流の歴史に育まれた、互いの国、国民に対する温かい友好感情というソフト・パワーを有効に活用して、政治、経済にとどまらない幅広い友好関係を築くことが重要であると日頃述べています。

目覚ましい経済発展によって「変わるインド」、そして古い歴史と文化・伝統に根ざした「変わらないインド」をあわせて理解することの難しさを日々痛感します。これまで日本・インド学生会議に参加してこられた若い世代の方々が、会議で発揮された清新な感性と新たな世界に挑戦する進取の姿勢をもって、これからも何らかの形でインドとの関係に係わって頂ければ、将来の日本とインドとの関係の一層の発展に繋がるものと期待しております。今回19期会議に参加された皆様には、このような貴重な機会でご得られた経験を生かされ、新たに進まれる道でのご成功をお祈り致します。末尾ながら今回もコルカタにおいて本件学生会議の受け入れ準備や滞在中のお世話を奔走されたニガム・和子氏や多くのインド人日本語教師の皆様には厚く御礼申し上げます。

第19期日本インド学生会議が大きな成果を上げて終了されたことをお慶び申し上げます。

とりわけ、8月にチェンナイ滞在中の実行委員の皆さんと直接お会いして、意見、印象を聞く機会を得られたことは私にとっても印象深く、また日印関係増進という本来業務にも有益な参考となるものでした。インドに関心を持ち、新鮮な目でインドを1年間見つめられた皆さんが今後とも長くインドとの関係に携わって頂きたいと願います。

今期日本インド学生会議に参加された皆さん全員が年間を通じての作業、行事を通じて貴重な体験を積み、各人それぞれ異なった印象、感慨を持たれたものと思います。その中でインド側参加者との直接・間接の接触から自分との共通性、共感を見いだす一方、相違点や違和感も覚えたのではないのでしょうか。長い歴史と伝統に育まれた日本、インドそれぞれの社会を土壌にして育ってきた個人の間では共通点があれば相違点もあるのが自然なことです。つまるところ個人、組織・団体あるいは国同士の関係増進とは相互に共通点、相違点の両面性があることを理解した上で双方が「益」を見いだせる点、箇所を増やし伸ばしていくことに他なりません。無論、この相互にある「益」とは対称な関係ばかりではなく非対称なものも含まれます。要は全体として双方のバランスがとれていれば自ずと両者間の関係は拡大均衡の軌跡を辿って行くことでしょう。

日本とインドの間では政治、経済、文化、学術等々多様な分野で様々な階層、チャンネルに亘って重層的な関係が築かれています。そしてその何れもが幅広く両国関係の進展に役割を果たしています。皆さんもその枢要な一翼を担っています。日本、インド双方の参加者がそれぞれ異なった自らの根っこの上に手を携えてともに成長していく「樹」を育てていかれることを希望します。

日本インド学生会議は、1997年の第1回大会から連綿と続く長い歴史を有し、多くの成果を上げてきました。この間の関係者の方々の御努力に敬意を表するとともにこの間に培われ、蓄積された知見を次回の学生会議に活かされることを期待します。

日本インド学生会議が 19 年の歴史を刻み、ますます活発な活動により日印関係の拡大・強化のために貢献されていることに衷心より敬意を表します。

日印関係は、大隈重信、渋沢栄一などの先駆者により日印協会が設立された 20 世紀初めごろから、伝統的な仏教の絆を超えた経済、文化など多方面での発展をとげてきました。第二次大戦の前から戦中にかけては、インド国民軍の創設や自由インド政府の設立などへの支援を通じて、我が国はインドの独立運動を支援しました。戦後、1947 年に独立を達成したインドは、苦境にあった我が国の復興や国際社会への復帰にあたって支援してくれました。1952 年の国交樹立後、東西間の冷戦は続きましたが、日印関係は友好的でした。

冷戦終了後、インドは外交・経済面で新たな生き方を探り、21 世紀になってからは新興国の雄となり、国際社会でも重きを増してきました。わが国との関係も、1998 年の核実験による頓挫はありましたが、2000 年以降、日印グローバル・パートナーシップが樹立され、ついで戦略的グローバル・パートナーシップ、さらに特別戦略的グローバル・パートナーシップへと格上げされて今日に至っています。

このように、日印関係は発展の一途をたどっていますが、青少年交流や留学生の相互受け入れの面では大幅に遅れています。駐印大使として 5 年近く、さらに日印協会をお預かりして 8 年有余にわたり日印関係に関与してきた私の率直な所感は、日印間においては将来を担う若者の相互理解や交流が抜本的に拡充されるべきだということです。両国政府も経済界も文化学術界も、今後の両国を担う若者たちのためにさらに努力すべきです。

両国政府の遅れがちかつ不十分な取り組みにもかかわらず、学生の皆様がイニシアティブをとる交流事業などが芽を吹き、花を咲かせ始めたことは喜ばしい限りです。

日本インド学生会議はその先駆をなすもので、両国の若者たちの前途を照らす松明ともいべき役割を担ってこられました。相互訪問や本会議のほか、IOT を活用した普段の対話や勉強会など多岐にわたる活動をされています。

皆様方の御活躍がさらに影響を広めて両国の友好関係の増進に寄与されることを確信し、また日印協会も皆様を応援し続けることをお約束して、祝辞といたしたいと存じます。

第19回目の印日学生会議が9月3日に大成功のもとに終了したことを嬉しく思います。

日本側メンバーはデリー、チェンナイで活動してきたあとだったので、疲れがたまっていたとみえ体調が良くない人が3人もいました。インド人のお医者さんに診察してもらい8日間も続いた下痢が半錠の錠剤でピタリととまり、インドの薬はよく効くということを確認しました。またこちらでは診断書を持って町の薬屋で薬を買い求めますが一軒の薬屋ではなかなか書かれてある全部の薬が揃わないということも体験してもらいました。

草の根の交流であるこの印日学生会議は今回コルカタ日本人会のご好意でこちらで頑張っておられる日本人の方々の貴重なお話を聞きながらおいしい日本食のお昼をご馳走になりました。以前にもこの会議が縁でインドのIT企業に就職した人やコルカタのNGOでインターンをした人、又現在チェンナイで働いている人がおられるように日本の大学生の目はますます大きくインドに向けられているようです。

今回の会議に参加した全員26名とNKKの会員で会議の時ボランティアで通訳として手伝ってくれた日本語教師など7名はいつものように総領事公邸の食事会に招待されました。初めて日本食を味わうインドの学生も多くいて温かいおもてなしを受けました。

去年の会議は日本で開催され、その時参加したコルカタメンバーは受け入れ側の細かな心配りに感激しそのお返しとして今回日本人メンバーを招待して一緒に出かけて買い物をしたり夕食を共にしたりと楽しいひと時を過ごしました。

この会議の期間中に2年前参加した日本側メンバーの一人がコルカタで得た友人を訪ねてきて友情を温めました。ことわざに古い友人が訪ねてきてくれるのは一番嬉しいとありますが、一週間や十日間という短い時間に築かれた深い友情が長く続くことを望んでいます。

今会議期間中にゼネストがあり日本人学生さんは驚かれたでしょう。日本人学生の宿舎は第一期から同じのラマクリシュナミッションゲストハウスなので分科会会場のジャダブプール大学はすぐ近くで移動は問題なく出来ました。少ない交通機関が動いている中インド側学生の半数が出席でき三日目の分科会が終了しました。本当にインドでは何があるか分かりません。

さて来年はこの会議の20周年の年に当たります。日本では20歳の青年は成人式を祝ってもらいます。私達みんながこの印日学生会議の20周年をお祝いしたいものです。

最後になりましたがこの会議がもっと有意義なものとなるようご支援してくださっているコルカタ日本総領事館、コルカタ日本人会に心よりお礼を申し上げますとともにこれからもこの交流活動が末永く続けられますよう皆様のご理解を頂くことを願っております。

ABK AOTS DOSOKAI Vice President Mr. Sriram Chellappa

ABK - AOTS DOSOKAI, Tamilnadu Centre, Chennai は 2009 年から JISC のメンバーのチェンナイでの受入れ団体として協力しております。毎回の JISC のメンバーのチェンナイの滞在期間を同窓会のメンバー、スタッフ、学生達、関係者の皆様がとても楽しみにしております。第 19 期の学生の皆様のチェンナイでの滞在はいい思い出になったと思っております。

本年度のプログラムも例年通り学生間のメールから始まりいろいろ準備が進んでおりました。本年度も文化関連でお寺へいたりバラタナティヤムの名門校として世界的に有名な、カラークシェートラにいたりまた日印の学生交流のため IIT MADRAS 大学で学生間の Conference を開催したりしました。また南インドをもっと知ってもらうためには世界遺産のマハーバリプラムにいたり南インドの文化や昔の生活の体験ができる DHAKSHIN CHITRA へ行ったりしました。またヨガの体験もできました。同窓会の日本語学校の学生達と交流の場ももうけました。また一般の南インドの家庭の生活を体験してもらうためにはホームステイプログラムをいれました。日本と IT 関係の仕事を中心でやっているインド企業の訪問し新入社員と話す機会ができました。

今後日印関係が益々強くなっていきますので日印の若い方が様々な場面で交流をしてお互いの事を深く理解していく必要があります。日本インド学生会議 (JISC) の活動を今後も ABK AOTS DOSOKAI, TAMILNADU CENTER としてサポートして行きたいと思っております。皆様のおかげで ABK AOTS DOSOKAI チェンナイセンターは今年で 40 年を迎えました。今後ともよろしくお願い致します。



インド国立科学コミュニケーション情報資源研究所主席研究員
Chief Scientist, NISCAIR
Prof.Ashok.k.Chawla

今年も、19 回目の日印学生会議がインドで成功に終わり、特に、ニューデリーでの活動も意義ある中身になり、日本からの参加した学生がインドで様々な経験を積み、たくさんの思い出と友人をつくり、全員無事帰国されことを大変うれしく存じております。ニューデリーでの滞在、活動などに関してはかなり不安があったことにも関わらず、想像していたよりも交流も分科会もうまく進み、学生会議というプラットフォームと学生の力に感動しています。

以前も私のご挨拶の中に申し上げましたが、2001 年にデリーでの活動がスタートし、数年間この活動の担当として働いた時、やはり組織構造と運営の見直しが必要だと数回か学生と発起者の長浜先生に話をしたことがあります。特に、インドからの学生が日本へ行く年には様々な課題、例えばビザのための身元保証人の確保、費用の問題、インド側からの参加者の選択方法、参加者の参加具合つまり分科会も含めどれだけ準備して行くか等々の課題がありました。日本の文化・マナー・価値観・モノに対する考えの違いなどに慣れていないインドの若者が日本へ行ってカルチャーショックを受けることと同時に変な動きをしてしまう恐れもあって、実際にそういうことが起きた例もあります。日本での開催中、インドからの学生の病気で救急車を呼ぶ必要が生じ、長浜氏と一緒に病院まで行って、その後の対応、特に病院への支払い交渉も含め、国際交流の様々の要素を考える必要があると感じました。

一方では、ほとんど毎回日本からの学生が私の研究所まできてくださり、私の話とそれに対する質疑応答からも感じますが、日本からの学生の中でもいつもすべてがスムーズにいったというわけでもありません。日本人が普通インドで直面する水、食事、衛生、快適さ、マナーの違い意外にも小さい事が色々あったと聞いております。しかし、学生会議がここまでやって来ている事と毎年特に日本側の運営の仕方は少しずつ工夫されてきていることは言うまでもありません。

言い換えると手続き又はルールなどの課題は着実に解決しつつ、学生交流の中身の方がもっと充実されてきているようにみえます。課題に関する事前調査、インドでの行き先の確認、アポ、タクシーなどに関してはネット、スマートフォンも大きな役割を果たしています。結果としては、学生同士でもっとエンジョイすることができ、オープンに物事を話したり、インドの真の価値観・伝統などに触れたりしているように見えます。今回も IJES 日本語学校の学生と一緒に観光に行ったり、そこで屋台のようなところで食事したり、そしてタージ・マハール見物の途中での経験などからも貴重なことを学習したりされたと思います。

インド側では都市によってやり方も組織構造も異なりますが、このような多様性に触れた日本側の学生にとって不思議に思われた一方で多様性の中の生き方も勉強になったと思います。このような貴重な経験は学生会議の継続性と持続可能な成長に繋がると存じます。

今回は全体で学生同士の交流が盛んに行われたと存じております。ここで作られた絆は両側の若者の宝物になるように願いながら、私の挨拶とさせていただきます。

日本インド学生会議顧問・国際基督教大学上級准教授 近藤正規 先生

日本インド学生会議の成功、おめでとうございます。

日本とインドの関係は近年ますます重要となりつつあります。インドにおける日系企業の数も1千社を超え、今後ともその数は増加する一方であると思われまます。そのような中、若い世代が将来に向けて交流していくことは、非常に望ましいことです。

この学生会議では、両国が関係する様々な 이슈 について、学生諸君の闊達な議論がなされ、大きな収穫を得ることが出来ました。

今後とも、この学生会議に参加した皆さんが両国の関係をさらに深めるために、将来にわたって活躍していただくことを願ってやみません。

19期日本インド学生会議(JISC)は、デリー・チェンナイ・コルカタの3都市で学生との対話を大切にしながら、インドから多くのことを学んでまいりました。今期もこの活動にご理解をくださり助成・後援のご協力を下さいました財団や団体、各都市で大切なお時間を費やして下さいましたみなさまに、心よりお礼申し上げます。

JISCは、来年20期を迎えさせていただきます。最初の歩み出しで日本語会話協会(NKK)の協力を得られたことが継続の大きな力となり、今日があります。ニガム和子先生と日本語の生徒さんとで、ほとんど変わらないメンバーで支え続けていただいていることを嬉しく存じております。

また、デリーでは4期から8期までの開催にご協力いただいていたアショク・チャウラ先生にもご協力の再開を少しずつ進めていただき、今期もお忙しい中ご尽力いただくことができました。

チェンナイでは、ご不在であったランガナタン氏に代わりスリラム氏と多くのみなさまのお力をいただき、大変嬉しく存じております。

このようにして、「日本に興味のあるインド人」と「インドに興味のある日本人」とが顔を合わせ、意見交換や楽しい時間を共有することは、国と国との距離を近くすることにもつながります。せっかくインドへ行ったならば、活字からではなく顔を合わせて直接話すことで情報を得、感動を得る。それは、将来多くの人々に分けることのできる、

個々の素晴らしい価値の高い財産となることでしょう。

学生メンバーが訪問させていただきました企業や公的機関のみなさまには、大切なお時間をいただき、心より感謝申し上げます。

コルカタでは、マザー・テレサの墓参をいたしました。JISC第1期をスタートした年、JISCメンバー全員でマザー・テレサにお会いした記憶が鮮明に思い出されました。天に召される一か月前のことでした。「今もJISCを見守ってくださっている」、そんな思いでおります。

最後になりましたが、在インド日本国大使館特命全権大使八木毅閣下・在コルカタ日本国総領事館総領事遠藤和巳様・在チェンナイ日本国総領事館総領事馬場誠治様には、学生たちを公邸にお招きいただき、貴重な機会をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。

これからも末永く日本インド学生会議が続けられますよう、よろしく願い申し上げます。

「今日の天気はどうか?」「今の地震、震度いくつだろう」「インドの人口は何人だろう」と思った時、インターネット開き検索エンジンに入力すれば、その答えがすぐにわかる。便利な世の中になりました。

「インターネットで検索すればなんでもわかるよ」ついそんな言葉が出てきてしまいそうです。

日本インド学生会議は、日本の学生がインドに出かけ、インドの学生に会い（もしくはインドの学生が日本に来、日本の学生と会い）、寝食を共にし、話し合うことを目的とした活動です。そのために、数ヶ月間準備し、会議は1ヶ月弱続きます。

準備では、インド人と話したいという期待を膨らませ、会って何を話そうか、一緒にどんなことしようかと考えます。インドの学生は平和のことどう考えているのだろうか、とか、一緒にスポーツができたらいいな、とか、インドの家庭料理を食べてみたいな、とか。

会議では、会ってみて、インド人の学生と過ごすうちに、いろんなことに気がついてきます。僕の意見に頷いてくれた。彼は将来のキャリアについては僕の意見とは違うみたいだけど、趣味は似ているな。あんな意見を言っていた彼女はこういう家庭で育ったんだ。コイツとはどうも気があうな。

同じ時を同じ空間で、一緒に過ごし、話を続けていくと、言葉ではとても説明しきれない理解が自分の中に広がってきます。

それらは、インターネットではとても検索しきれないものである、と感じます。

日本インド学生会議では、理解することの面白さ、難しさ、厚さ、広さ、そして時間の長さを身体で感じることができ、この会議の特徴の一つと感じています。

私自身このような経験をさせて頂きとても有難く感じています。そして、一人でも多くの日本の、インドの学生が参加でき、様々な経験ができる機会であってほしいと一人のOBとして願っています。

第19回日本インド学生会議本会議の開催に、ご協力をいただいた皆様、本当に有難うございました。ひとつの成果としてのこの報告書、日本とインドの学生同士が出会い、気がついた、理解の数々が載っています。是非最後まで楽しんでお読みください。

また、これからも日本インド学生会議にお力添えくださいますよう、どうぞよろしくお願い致します。

《第 19 期日本インド学生会議実行委員者名簿》

- [実行委員長] 仲村 祐一 宇都宮大学 森林科学部 2年
- [副実行委員長・学術局] 阿部 祐三 慶應義塾大学 環境情報学部 3年
- [国内渉外局] 神作 八起 立教大学 理学部 3年
- [国際渉外局] 瀬藤 朋 中央大学 総合政策学部 2年
- [国際渉外局] 田尾 あずさ 東京外国語大学 国際社会学部 3年
- [財務局] 石原 正章 日本大学 理工学部 2年
- [学術局] 梅井茉実花 慶應義塾大学 法学部 4年
- [企画部] 平川 奈々 東京外国語大学 国際社会学部 2年
- [広報局] 中村 允 日本大学 理工学部 3年

計 9 名

〈第一部〉

日本インド学生会議とは

《日本インド学生会議 基本理念》

「学生の学生による国際社会の将来のための会議」をモットーとする、私ども日本インド学生会議の主たる目的は以下の通りであります。

- 1、 学生という立場を存分に生かした、既存の概念や営利関係、特定の政治・宗教にとらわれない自由かつ建設的な直接討議を通じ、世界の諸問題について新たな意見、解決策を導き出し、自ら実行するとともに、それを社会に報告・提案する。
- 2、 上記のような討議に限らず、日本とインド両国の学生が寝食をともにする本会議の全日程、またそこまでの準備期間を通じて、両国の学生が直接的な交流をすることにより、お互いの社会、文化、価値観、考え方などについて認識・理解をし、それらを社会に発信する。

現在、私たちが生活するこの地球上では、環境問題・内戦・経済摩擦・人権侵害・人種差別など様々な問題が起こっています。そんな中、次世代を担う我々学生は、このような問題に対して真剣に取り組まなくてはならないと考えます。そこで、当団体は「日本とインドの学生による会議」というかたちで、解決の道を模索していきたいと考えています。

まず初めに、学生という社会的・営利的・政治的なものから自由な立場の我々は、専門家やビジネスマン、政治家ではすることのできない、より直接的で草の根的な会議をすることが可能であります。当団体はその利点を存分に生かした、政治家や専門家の「縮小版」にならない会議を目指しています。その一方、いくら「草の根」とは言え、私どもと対話するのは、インドの学生という一部の上流階級の若者ではあります。しかし、彼らは確実にインド社会を変えていける存在として、非常に意味があるものだと考えています。

次に、何故インドなのでしょう？インドは複雑に民族・宗教が絡み合う、他に類を見ない多様性に富んだ国であり、同じアジアでも日本とは全く違った文化・社会を持っています。そのようなインドからは新たな道を探ること、新たな価値観を学ぶことができるのです。また、現在、日本とインドはわずかな政治的・経済的關係を除き、文化的・精神的交流つまり人と人との交流は著しく乏しい状況にあり、お互いに誤解、偏見が至る所でみられます。私どもは、一年間の準備期間も含め「会議」というものを通して生身のインド人、インド文化を体験することができます。

そして以上のような成果で自分たちが成長するのはもちろんのこと、これらを社会に報告・提案することによって、国際社会に貢献することが当団体の最終目標であります。私どもは、社会からの助成・支援を受けて活動しているという自分たちの「公的性格」を認識し、社会還元への模索を続けていきます。

《日本インド学生会議 概要》

名称	日本インド学生会議（英語名：Japan-India Student Conference）
設立年月	1996年8月
創設発起人	石津達也、長浜浩子、後藤千枝
顧問	近藤正規
組織構成	実行委員会、OBOG会、創設発起人(3名)、顧問(1名)、賛助会員 (実行委員会…参加資格は大学、大学院、短期大学、専門学校に所属する学生)
協力団体	インド側パートナー、国際協力ユースネットワーク「絆」
団体目的	日本とインドの学生同士の討議や交流を通じて、お互いの社会、文化、価値観などを理解し合うことで、学生という立場での日印友好関係を築く。そして討議結果や交流の体験を社会に発信し、国際社会に貢献する。
活動概要	事前活動…組織運営、勉強会、合宿 本会議…学生同士のディスカッション、ホームステイ、フィールドワーク、文化交流（毎年日本、インドのどちらかで開催する。）事後活動…報告書作成、報告会開催、次期実行委員募集週に1回ほど定期的にミーティングを行う。
発行物	機関誌、活動報告書
広報活動	ホームページ、ブログ、facebook

日本インド学生会議は1997年のコルカタ大会を第1回目として始まり、2015年で第19回目を迎えます。

2001年にデリー大会が始まり、2009年から始まったチェンナイ大会も現在まで続いています。プネーで開催したこともあり、2012年はバンガロールにも訪れました。このように、開催年によって開催場所や内容は変わります。

運営は実行委員である学生が行っています。OBOG会、創設発起人、顧問からの助言を受け、学生でありながら、日本とインドを結ぶ団体としての意識をもって活動しています。対外活動としては、一人でも多くの方に日本インド学生会議を知っていただくため、多くの人にインドに関心を持っていただくために、講演会やイベントの開催などを行っております。また、社会と接点を持って活動していくために、財団や企業、その他国際交流団体などへ積極的に渉外活動をしております。他の同じような志を持つ学生会議団体とも交流を図り、お互いに切磋琢磨しております。

《沿革（2015年11月現在）》

1996年 8月 日本インド学生会議創設事務所発足
（石津達也、長浜浩子、後藤千枝）

第1期

1996年 10月 第1期日本インド学生会議実行委員会発足
11月 臼田雅之氏（東海大学文学部教授）顧問就任
1997年 3月 カルカッタに第1回先遣隊派遣
8月 第1期日本インド学生会議本会議
（於：カルカッタ 8月2日～9月11日）
11月 第1期本会議報告会開催

第2期

1997年 11月 第2期日本インド学生会議実行委員会発足
1998年 1月 （財）アジアクラブ主催 沖守広氏写真展参加
2月 機関紙第1号発行
3月 カルカッタへ第2回先遣隊派遣
4月 （財）国際教育財団より助成金給付第1回総会開催（各種規約施行）
6月 （財）三菱銀行国際財団より助成金給付機関紙第2号発行
7月 会議前合宿
8月 第2期日本インド学生会議本会議
（於：カルカッタ 8月5日～15日）
9月 （財）吉田茂国際基金より助成金給付
10月 （財）アジアクラブ主催イベント
インド政府観光局主催イベント「ナマステ・インディア」参加
第2期本会議報告会開催

第3期

1998年 11月 第3期日本インド学生会議実行委員会発足機関紙第4号発行
12月 「再考・JISCの基本理念」討論会第1回開催
1999年 2月 「同上」討論会第2回開催
3月 機関紙第5号発行

- 4月 (財) 国際教育財団より助成金給付
- 6月 カルカッタへ第3回先遣隊派遣
(財) 三菱銀行国際財団より助成金給付
(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
- 8月 福永正明氏 (拓殖大学) 顧問就任機関紙第6号発行
- 9月 本会議直前合宿
- 10月 第3期日本インド学生会議本会議 (於: 東京 10月2日~13日) 機関紙
第8号発行
「ナマステ・インディア」参加
- 12月 第3期本会議報告会開催第3回総会開催

第4期

- 1999年 12月 第4期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2000年 1月 「第1回学生会議連絡協議会フェア」参加
JISC 公式ホームページ作成
- 2月 日本インド学生会議メーリングリスト作成
- 4月 機関紙第9号発行第4回総会開催
「学生会議連絡協議会合同新歓」(SCN フェア 2000) 参加
- 5月 (財) 日印協会主催「川岸前カルカッタ総領事のお話を聞く会」出席
- 6月 バラーナス・ヒンドゥー大学ヤーダヴ教授を迎えてのヒアリング開催
(財) 三菱銀行国際財団・(財) 吉田茂国際基金より助成金給付
機関紙第10号発行
- 8月 機関紙第11号発行
本会議団結式・壮行会開催
第4期日本インド学生会議本会議
(於: カルカッタ 8月7日~26日)
- 9月 (財) 日印協会主催「森総理南西アジア訪問」講演会出席帰国報告会主催
- 10月 「ナマステ・インディア」参加
(財) インドビジネスセンター主催「日印 IT シンポジウム」参加
(財) 日印協会主催「駐日インド大使午餐会」出席
- 11月 国際基督教大学学園祭参加
インド側発起人モハン・ゴーシュ氏を囲む会主催
機関紙第12号発行「学生会議連絡協議会合同報告会」参加

- 12月 第4期本会議報告会開催
 駐日インド大使アフターブ・セート閣下講演会開催
 第5回総会開催

第5期

- 2001年 1月 第5期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 デリー側チャウラ先生、トマル先生を囲む会開催
 4月 SCN フェア 2001 参加
 (財) 国際教育財団より助成金給付
 5月 機関紙第13号発行日印議員連盟訪問
 外務省アジア大洋州局南西アジア課 訪問
 6月 山内利男氏を招いてのヒアリング勉強会開催
 日印経済委員愛甲次郎氏による講演会主催
 岐阜女子大学南アジア研究センター主催
 「日印 IT シンポジウム」参加 協力
 7月 機関紙第14号発行
 (財) 三菱銀行国際財団より助成金給付直前合宿
 国際交流基金より助成金給付福永正明氏顧問退任
 8月 第5期日本インド学生会議本会議
 (於：デリー・コルカタ 8月2日～23日)
 9月 帰国報告会開催
 (財) 吉田茂国際基金より助成金給付
 10月 「ナマステ・インディア」参加
 11月 亜細亜大学学園祭参加機関紙第15号発行
 12月 第5期本会議報告会開催第6回総会開催

第6期

- 2002年 1月 第6期日本インド学生会議実行委員会発足
 2月 第3期メンバーからのヒアリング
 3月 機関紙第16号発行
 4月 小野基先生（筑波大学教授）からのヒアリング開催
 SCN フェア 2002 参加
 在インド大使館後援名義受理
 (財) 国際教育財団より助成金給付

- 5月 保坂俊司氏（麗澤大学）顧問就任
（株）インドビジネスセンター後援名義受理
- 6月 勉強会集中合宿
- 7月 国交樹立 50 周年記念行事インドメラーに参加
（財）日印協会後援受理
（財）アジアクラブ後援名義受理インドセンター後援受理
外務省後援名義受理
- 8月 コルカタ、デリーに先遣隊派遣
- 9月 本会議直前合宿
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
（財）吉田茂国際基金より助成金給付機関紙第 17 号発行
- 10月 （財）国際交流基金より助成金給付
（財）東京都国際交流財団より助成金給付
第 6 期日本インド学生会議本会議
（於：東京 10 月 18 日～31 日）
- 12月 第 6 期本会議報告会開催

第 7 期

- 2002 年 12 月 第 7 期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2003 年 1 月 第 7 期日本インド学生会議「本会議案」作成
- 3月 機関紙第 18 号発行
- 4月 実行委員交流合宿
SCN フェア 2003 参加
- 5月 （財）国際教育財団より助成金給付
- 6月 （財）国際交流基金より助成金給付勉強会合宿（分科会案作成）
学生会議連絡協議会情報交換会参加
（財）日印協会より後援名義受理
デリー・コルカタに先遣隊派遣
- 7月 機関紙第 19 号発行
（財）三菱銀行国際財団より助成金給付
（財）吉田茂国際基金より助成金給付
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付

- 8月 本会議直前合宿関係者挨拶回り
第7期日本インド学生会議本会議
(於：デリー・コルカタ 8月9日～9月2日)
- 10月 報告書作成
小学校訪問(社会還元事業)計4回
「ナマステ・インド」参加
(財)東京都国際交流財団より助成金給付
- 11月 第7期本会議報告会開催
「インドの魅力を発見する会」主催パネルディスカッションに参加
- 12月 第7期本会議報告会開催

第8期

- 2003年 12月 第8期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2004年 1月 第8期日本インド学生会議「本会議案」作成
学生会議総会開催
- 2月 ミーティング開始
- 3月 大使館主催のパーティーに参加
- 4月 機関紙第20号発行
OB・OGとの懇親会第8期募集〆切(4月末)
SCN フェア 2004(29日)参加
- 5月 メンバー交流合宿(9、10日)
(財)吉田茂国際基金より助成金給付
(財)国際教育財団より助成金給付
(財)日商岩井億歳交流財団より助成金給付
- 7月 機関紙第21号発行
本会議前直前合宿(31日、8月1日)
- 8月 第8期日本インド学生会議本会議
(於：デリー・コルカタ 8月11日～30日)
在コルカタ日本総領事館より後援名義受理
- 10月 第9期実行委員募集開始
「ナマステ・インド」参加(16、17日)
小学校訪問(社会還元事業)報告書作成(10月末発行)
- 11月 第8回日本インド学生会議報告会開催(28日)

第9期

- 2004年 12月 第9期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2005年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始
- 4月 SCN フェア 2005(29日)に参加
- 5月 ミーティング開始
OBOG インタビュー実施
- 6月 合宿実施
- 7月 分科会トピック決定
- 8月 ミーティングを週2回に変更
本会議直前合宿(11・12日)
日本インド学生会議機関紙発行
第9期日本インド学生会議本会議(於:東京 8月28日~9月12日)
- 9月 第9期日本インド学生会議本会議終了(12日)
コルカタ側メンバー帰国(13日)
デリー側メンバー帰国(14日)
- 10月 報告書作成開始
日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2005」に協力(1・2日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第9回日本インド学生会議本会議報告会(11日)

第10期

- 2005年 11月 第10期日本インド学生会議実行委員会発足
- 2006年 1月 本会議案作成
- 2月 助成金申請・後援名義の申請開始
- 3月 新人勧誘開始 ミーティング開始
- 4月 SCN フェア 2006 参加
- 5月 合宿実施(26・27日)
- 6月 インド大使就任パーティー
先遣隊派遣(10日~19日)
合宿実施(23・24日)
- 7月 上方舞友の会、吉村桂充様訪問
- 8月 シン大使就任パーティー
第1回インド知識経済勉強会参加
第10期日本インド学生会議本会議
(於:プーネ・コルカタ・デリー 8月24日~9月19日)

- 9月 日印文化交流祭「ナマステ・インディア 2006」に協力
(23・24日)
- 10月 インディアンデイ開催(28日)
- 11月 報告書作成
- 12月 第10回日本インド学生会議本会議報告会(26日)

第11期

- 2006年 12月 第11期日本インド学生会議発足
(以降毎週土曜ミーティング実施)
事業計画書・予算案作成、財団渉外・申請
- 2007年 1月 事業計画書・予算案作成、広報(新メンバー募集)
アイセック主催インド勉強会参加(7日)、財団渉外・申請
- 2月 広報(新メンバー募集)
後援渉外・申請
- 4月 (財)国際教育財団より助成金給付
- 5月 財団申請
(財)日商岩井国際交流財団(財)吉田茂国際基金より助成金給付
- 6月 OBOG会主催 第1回 JISCDAY(30日)合宿実施(30日・7月1日)
在インド日本大使館、在コルカタ総領事館、在ムンバイ総領事館より後援名義受理
(財)三菱銀行国際財団より助成金給付
- 7月 勉強会、模擬ディスカッション
先遣隊派遣プネー・デリー(29日～8月4日)
外務省より後援名義受理、日印交流年イベントとして認定
日印交流年実行委員より助成申請受理
(財)国際交流基金デリー実行委員より協賛申請受理
- 8月 直前合宿実施(12日・13日)
第11期日本インド学生会議本会議
(於:コルカタ・プネー・デリー 8月15日～9月7日)
- 9月 本会議終了(9月7日)、反省会
日印文化交流祭「ナマステ・インディア2007」に協力(29日・30日)
- 10月 報告書作成、12期準備
- 11月 報告書完成第11期日印学生会議報告会実施
(3日オリンピックセンターにて)

第12期

- 2007年11月 第12期日本インド学生会議実行委員会足
第11期メンバーからのヒアリング
各種資料作成（事業計画書・予算書など）第1次京都先遣隊派遣
IIT 同窓会講演会（於：慶應義塾大学）を補助
- 12月 国際開発研究者協会（SRID）学生部にて講演第1次勉強会合宿
財団助成・後援の申請開始
- 2008年2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
- 3月 第2次勉強会合宿
（財）日印協会後援名義受理
- 4月 学生会議合同説明会（日印・日越・日韓・日中・日ケ）実施
外務省後援名義受理
- 5月 インドセンター後援名義受理京都府後援名義受理
第2次京都先遣隊派遣本会議直前合宿
（財）日商岩井国際交流財団より助成金給付
第12期日本インド学生会議本会議
（於：東京・京都 5月29日～6月11日）
- 6月（財）日印協会より助成金給付
- 7月（財）吉田茂国際基金より助成金交付
- 8月 報告書完成
第12期本会議報告会実施

第13期

- 2008年10月 第13期日本インド学生会議実行委員会発足
第12期メンバーからのヒアリング
- 11月 各種資料作成（事業計画書・予算書など）
実行委員の募集
- 12月 学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
- 2009年1月 実行委員の募集 定例会
- 2月 日本インド学生会議 OBOG 総会
学生会議合同講演会の企画と実施
（日中学生会議、日露学生会議と協働）
取材（メンターダイヤモンド学生記者クラブよりウェブ記事の取材）
- 3月 学生会議評議会の合同イベントの企画と実施
予算案の見直し
（財）日印協会後援名義受理

- (財) 双日国際交流財団助成金給付
- (財) 吉田茂国際基金助成金給付
- 4月 (財) 国際交流基金助成金給付
 - 学生会議評議会合同説明会実施
 - 外務省後援名義受理
 - 在インド日本国大使館後援名義受理
 - 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 - 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
- 5月 日本インド学会議 OBOG 会主催
 - 「キャリアエクスチェンジ」参加
 - 学生会議評議会交流会
 - 学生会議合同講演会の企画と実施（日中学生会議、日露学生会議と協働）
 - 於：東京大学5月祭
- 6月 (財) 三菱 UFJ 国際財団より助成金給付
 - 学生会議合同勉強会（日中学生会議、日露学生会議と協働）
 - 勉強会合宿
- 7月 合宿
- 8月 先遣隊派遣(8月5日～)
 - 第13期日本インド学生会議本会議
 - (於：コルカタ・チェンナイ・デリー 8月17日～9月7日)
- 9月 ナマステインディア 2009 出店
 - 報告書作成
- 10月 報告書作成、決算報告
 - 財団渉外、14期引き継ぎ準備
- 11月 第13期報告会実施
 - 学生会議評議会合同報告会実施
 - 第14期引き継ぎ

第14期

- 2009年 12月 第14期日本インド学生会議実行委員会発足
 - 第13期メンバーからのヒアリング財団渉外
 - 各種資料作成（事業計画書・予算書など）定例会
- 2010年 1月 日本インド学生会議 OBOG 総会
 - メンバーリクルーティング
 - 定例会
- 2月 財団渉外
 - SCN ミーティング定例会

- 3 月 SCN イベント
 予算案見直し
 (財)日印協会後援名義受理
 (財)双日国際交流財団助成金給与
 (財)吉田茂国際基金助成金給与
- 4 月 (財)国際交流基金助成金給与
 分科会(勉強会)合宿実施(10日・11日)
 SCN イベント(25日)
- 5 月 SCN 交流会(27日)
 文化交流会(日舞・ダンス練習)合宿実施(15日・16日)
 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6 月 ソフトブリッジソリューションズ訪問(25日)
 (財)三菱UFJ国際財団より助成金給付
- 7 月 在インド日本国大使館 後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
 分科会(勉強会)合宿実施(3日・4日)
 直前合宿実施(31日・8月1日)
- 8 月 先遣隊派遣(8月8日～)
 第14期日本インド学生会議本会議
 (於:コルカタ・チェンナイ・デリー8月14日～9月4日)
- 9 月 「ナマステ・インディア 2010」協力
 報告書作成
- 10 月 報告書完成 決算報告
 財団渉外
 第15期引き継ぎ準備
- 11 月 第14期報告会実施(14日、オリンピックセンターにて)
- 12 月 第15期引き継ぎ

第15期

- 2010年 12月 財団渉外
 各種資料作成(事業計画書・予算書など)
- 2011年 1月 メンバーリクルーティング
 第15期日本インド学生会議実行委員会発足第
 14期メンバーからヒアリング
- 2月 財団渉外
- 3月 東日本大震災により活動休止
- 4月 予算案見直し

- 5月 入会希望者へのオリエンテーション実施
- 6月 (財) 三菱UFJ国際財団より助成金給付
合宿オリンピックセンターにて (10・11日)
- 7月 外務省後援名義受理
株式会社インド・ビジネス・センター後援名義受理
- 8月 独立行政法人国際交流基金後援名義受理
JICA 後援名義受理
公益財団法人日印協会後援名義受理
- 9月 本会議直前合宿オリンピックセンターにて (3日)
経済産業省後援名義受理
在日インド大使館後援名義受理
第15期日本インド学生会議本会議 (於: 東京 9月10~21日)
「ナマステ・インディア2011」協力報告書作成
- 10月 報告書作成財団渉外
第16期引き継ぎ準備
- 11月 報告書完成決算報告
第15期報告会実施 (26日、東京大学にて)
- 12月 第16期引き継ぎ

第16期

- 2011年 12月 財団渉外
- 2012年 1月 メンバーリクルーティング
- 2月 入会希望者へのオリエンテーション
- 3月 第16期日本インド学生会議実行委員会発足
第15期メンバーからヒアリング
- 4月 (財) 双日国際交流財団助成金給与
(独) 国際交流基金助成金給与
予算案の見直し
定期勉強会開始
ブログ更新開始
新歓イベント参加 主催: 国際協力学生プラットホーム「絆」
(15日)

新歓説明会 (29日)
インド側とやり取り開始
- 5月 新歓イベントビラ設置 主催: YDP Japan Network (5日)
バンガロール訪問決定
国交樹立60周年記念イベント認定
(財) 三菱UFJ国際財団助成金給与

- 6月 笹井大嗣氏からのヒアリング
 機関誌第1号発行
 参加メンバー確定（リクルーティング終了）
 事前合宿実施（30日・7月1日）
- 7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在インド日本国大使館後援名義受理
 (財)日印協会後援名義受理
 中津雅昭氏による勉強会
- 8月 機関誌第2号発行
 在日本インド大使館後援名義受理
 第16期日本インド学生会議本会議
 (於：コルカタ、チェンナイ、バンガロール、デリー 計4都市
 8月8日～9月4日)
- 9月 ナマステ・インディア 2012 協力
 報告書作成開始
- 10月 財団渉外
 報告会準備
- 11月 報告書完成
 第16期報告会（於：東京外国語大学 10日）
 総会
 機関誌第3号発行

第17期

- 2012年 12月 メンバーリクルーティング、財団渉外
- 2013年 1月 第17期日本インド学生会議実行委員会発足
 メンバーリクルーティング
- 2月 本会議案作成、メンバーリクルーティング、定期勉強会、
 インド側との調整開始
 日本イスラエルパレスチナ学生会議との合同イベント
- 3月 合宿、事業計画書見直し、本会議プログラムの検討、広報
- 4月 (財)双日国際交流財団助成金給与
 (独)国際交流基金助成金給与
 参加者決定、分科会議題決定、本会議プログラムの検討
 機関紙発行
- 5月 実行委員参加締切、広報、後援申請

- 本会議日程・内容最終調整
 (財) 三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 6月 合宿
- 7月 国際交流基金ニューデリー日本文化センター後援名義受理
 在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
 在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
 在インド日本国大使館後援名義受理
 在日本インド大使館後援名義受理
 (財) 日印協会後援名義受理
 事前合宿
 機関誌第2号発行
- 8月 第16期日本インド学生会議本会議
 (於：デリー、コルカタ、バンガロール、
 チェンナイ 8月6日～9月4日)
- 9月 ナマステ・インディア 2013 協力
 報告書作成開始
 第18期実行委員募集開始
- 10月 財団渉外
 報告会準備
- 11月 報告書完成
 第17期報告会
 機関誌第3号発行(予定)
- 12月 第17期第2回報告会
 総会

第18期

- 2014年3月 (財)三菱 UFJ 国際財団助成金給与
- 5月 (財)双日国際交流財団助成金給与
 メンバーリクルーティング(17期)
- 6月 第18期日本インド学生会議実行委員会発足
 メンバーリクルーティング
- 7月 本会議案作成
 定期勉強会
 インド側との調整開始、
 実行委員参加締切
 メンバー決定
 会議日程確定
- 8月 外務省後援名義受理

- (財)日印協会後援名義受理
インド側メンバービザ取得準備開始
分科会テーマ決定、定期勉強会開始
- 9月 公益社団法人 在日インド商工協会後援名義受理
(独)国際交流基金後援名義受理
ディスカバー インディア クラブ後援名義受理
ナマステインディア 2014 協力
- 10月 在日インド大使館後援名義受理
第 18 期日本インド学生会議本会議
(於:東京 10月3日～15日)
- 11月 報告書作成開始
第 19 期実行委員募集開始
報告会準備
- 12月 第 19 期引き継ぎ

<第二部>

活動報告

《第 19 期日本インド学生会議年間活動報告》

- 2015 年 4 月 メンバーリクルーティング（19 期）
- 5 月 (独)国際交流基金助成金給与
第 19 期日本インド学生会議実行委員会発足
メンバーリクルーティング
- 6 月 メンバーリクルーティング
事業計画書作成
- 7 月 (公財)三菱 UFJ 国際財団助成金給与
(公財)日印協会後援名義受理
在コルカタ日本国総領事館後援名義受理
機関誌第 1 号発行
実行委員参加締切・メンバー決定
インド側との交渉
- 8 月 (公財)双日国際交流財団助成金給与
在日本インド大使館後援名義受理
在インド日本国大使館後援名義受理
在チェンナイ日本国総領事館後援名義受理
第 19 期日本インド学生会議本会議
(於:デリー、チェンナイ、コルカタ 8 月 12 日～9 月 4 日)
- 9 月 ナマス테인ディア 2015 協力
報告書作成開始
合宿実施
- 10 月 財団渉外
報告会準備
- 11 月 報告書完成
第 19 期日本インド学生会議報告会
第 20 期メンバーリクルーティング開始
日印協会訪問
- 12 月 学生会議合同報告会

《各局活動報告および反省》

国際渉外局(International Liaison)

担当：瀬藤 朋

— 仕事内容 —

フィールドワークや訪問企業先の方、分科会の事前打ち合わせなど幅広い分野で事がスムーズに進むようにコーディネートする。

— 反省・感想 —

お互いの意識の食い違いから大変なこともあるでしょうが、それぞれの側に私がインドで感じたような、理解できる、してもらい喜びを与えることができるという点で非常にやりがいがある仕事だと思いました。

財務局(Financial Bureau)

担当：石原 正章

— 仕事内容 —

JISC 全体の活動を支えるすべての金銭の管理をします。助成金をいただく財団とのやり取りも担当をし、毎期の予算書、決算書の作成も行います。

— 反省・感想 —

本会議の予算、決算などの書類を財団に提出するのが遅れ迷惑をかけてしまったのが一番の反省です。幸い今期は前年度担当者のおかげで無事に本会議を催行することが出来ました。

国内渉外局(Liaison in Japan)

担当：神作 八起

— 仕事内容 —

国内渉外局の仕事は、日本インド学生会議と国内の関係者の方々とを結ぶこと。日本インド学生会議の活動が関係者、関係団体に支えられていることを念頭に入れ、その関係性の維持・発展を目標として活動を行う。具体的には、後援名義の申請や本会議、開会式・報告会のご案内の作成や、やりとり等を行う。

— 反省・感想 —

本会議の事業計画が作成できず、後援名義の申請が今年も遅れた。積極的に局外へ働きかけて周りを巻き込み、作成を急ぐべきだった。

広報局(Public Information)

担当：中村 允

— 仕事内容 —

新規メンバーの募集と JISC の活動を内外に広めること。具体的には、本会議前に機関誌製作・発送、本会議中は報告書作成準備とホームページ・ブログ更新、本会議後は、報告書作成、月間インド掲載用記事作成、関係者の方々へ報告書発送などがある。本会議後が一番忙しい役職といえる。

— 反省・感想 —

広報局は本会議前のリクルートも重要と同時に本会議後の報告書作成が一番責務の大きい仕事である。本会議前に十分なリクルートが出来ず少ない人数で仕事をしていたので準備がどんどん後ろ倒しになってしまった。一番肝心なのは引継ぎであると痛感した。来年度の後輩がスムーズに広報の仕事に取り掛かれるようにしないといけない。

学術局(Academe)

担当：梅井 茉実花

— 仕事内容 —

学術局の仕事は、本会議を円滑に進められるように各局をサポートするとともに、渡印前は事前勉強会の準備を中心に行い、渡印後は報告会の準備・司会進行を担う。

— 反省・感想 —

事前学習についてはメンバーが直接集まり勉強会を行い、情報の共有などある程度の成果は挙げられていた。メンバーの集まりがより早ければもっと密な勉強会が行えていたと思った。報告会の準備・運営は留学の関係上、阿部に引き継ぐ形となってしまったので年間を通して行動が出来るメンバーがやった方が滞りなく行える。。

〈第三部〉

本会議報告

《第19期日本インド学生会議 実施要綱》

事業名：第19期日本インド学生会議本会議
主催：第19期日本インド学生会議実行委員会
開催期間：2015年8月12日（金）～9月4日（水）
開催地：インド

助成： 独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱UFJ国際財団

後援： 在日本インド大使館
在インド日本国大使館
在チェンナイ日本国総領事館
在コルカタ日本国総領事館
独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 日印協会

協力： 日本語会話協会
独立行政法人 JICA
(株)三井物産
デリー日本語学校 IJES
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI
(株)日本テクノロジー
独立行政法人 JETRO
インド工科大学マドラス校(IITM)
(株)SRI CITY
Jadavpur University
NGO Destiny Foundation
Mather's House
コルカタ日本人商工会
月間インド通信
鹿子木 謙吉様
ラビンダー・マリク様
近藤 正規先生
長浜 浩子先生

鈴木 祐輔様
エア・インディア

参加学生：

日本

第19期日本インド学生会議実行委員会

実行委員長	仲村 祐一	宇都宮大学森林科学部 2年
副実行委員長・学術局	阿部 祐三	慶應義塾大学環境情報学部 3年
国際渉外局長	瀬藤 朋	中央大学総合政策学部 2年
国内渉外局長	神作 八起	立教大学理学部 3年
国内渉外局・広報局	田尾 あずさ	東京外国語大学国際関係学部 3年
財務局長	石原 正章	日本大学理工学部 2年
学術局長	梅井 茉実花	慶應義塾大学法学部 4年
企画局長	平川 菜那	東京外国語大学国際関係学部 2年
広報局長	中村 允	日本大学理工学部 3年

チェンナイ

President	Abhishek Sharma	IIT Madras(以下同)
	Rohit Janagal	
	Nikhil Nulinti	
	Sashank	
	Rohan Chavan	
	Suraj Kashyap	
	Pranjal	
	Paul	
	Yash Murty	
	Sachin Sanodiya	
	Nitesh	
	Dheeraj	
	Ruturaj	
	Devaansh Samant	
	Danam.B.N.Tilak	

コルカタ

President	Seshadri Mitra	Prafulla Chandra College
-----------	----------------	--------------------------

Communicator	Smaran Basu	Prafulla Chandra College
Events Manager	Sohini Das	St.Thomas' College of engineering
Content Writer	Deepsha Saha	St.Paul's College
Finance Head	Arnab	City College
	Chankrabarti	
	Pubali Das	Swami Vivekananda College
	Barshana Panigrahi	Jogomaya Devi College
	Shreya Bose	University of Kolkata
	Maharshi Bhaduri	St.Thomas' College of engineering
	Rajarshi Ghosh	Heramba Chandra College
	Piyush Verma	Gurudas College
	Aaina Prakash	Bhawanipur Education Society
	Sayan Roy	Prafulla Chandra College
Juli Nandan	University of Calcutta	
Riddhima Ray	University of Culcutta	
Karan Sharma	Government College of Engineering	
Ayan Sarkar	Netaji Nagar Day College	
Ayantika Saha	Rammohan College	

《第19回日本インド学生会議日程》

本会議日録

8/12~9/4 India

8/12~8/16 Delhi

8/17~8/25 Chennai

8/26~9/4 Kolkata

《本会議日程》

日程	都市	午前	午後	宿舎
8/12(水)	成田発/デリー着		午後四時到着・宿舎移動	
8/13(木)	デリー	JICA訪問	日本大使館訪問	World
8/14(金)		三井物産訪問	日本語学校交流会	Buddhist
8/15(土)		(独立記念日)/休日	和尚と食事会	Center
8/16(日)		アーグラ観光		
8/17(月)	移動	チャウラ先生研究室訪問	飛行機で移動	
8/18(火)	チェンナイ	宗教施設見学	チェンナイ本会議開会式	
8/19(水)		総領事公邸訪問	日本テクノロジー訪問	
8/20(木)		ダクシンチトラ観光	マハーバリプラム世界遺産観光	R&B
8/21(金)		休息	JETRO訪問・分科会①	Residency
8/22(土)		分科会②	分科会②	
8/23(日)		日本語交流会	ホームステイ	
8/24(月)		ホームステイ	エリオットビーチ観光	
8/25(火)		スリシティ訪問	チェンナイ本会議閉会式	
8/26(水)	移動	チェンナイ出発	夜八時コルカタ到着	
8/27(木)	コルカタ	コルカタ側学生との交流	コルカタ本会議開会式	
8/28(金)		Destiny Foundation訪問	美術館・ガンジス川見学	
8/29(土)		分科会①	総領事公邸訪問・ホームステイ	Rama
8/30(日)		ホームステイ		Crishna
8/31(月)		ホームステイ	分科会②	Mission
9/1(火)		マザーハウスボランティア	IJSC18期OBOG食事会	
9/2(水)		分科会③		
9/3(木)		商工会の方々と食事会	チェンナイ本会議閉会式	
9/4(金)	コルカタ/移動	コルカタ出発、デリー経由、翌朝日本到着		

《本会議日録》

8月12日（水）担当：神作 八起

初めてのインド。長期滞在では日本食も久しく食べることができない。出発の日の朝食は、白ごはんと納豆、味噌汁を食べると決めていた。旅立ちの前、最後の日本食を食べているとき、本会議中の新たな出会いへの期待に胸を膨らませていた。

空港で朝食をすませ、JISC メンバーで集まって荷物を預けて、一緒に搭乗した。フライトの途中、文化交流の出し物として披露する予定の折り紙を練習していると、CA さん達に頻繁に話しかけられた。CA のお姉さんには、折っていたクジャクをプレゼントした。お姉さんは非常に喜んでいて様子で、嬉しかった。

8時間弱のフライトの後空港に到着し、集合写真を撮影した。ホテルまでの足にはタクシーを利用。到着までの道のりには手間取った。タクシーの運転手は英語が出来なかったからだ。運転手とともに、路肩にいる人に道を尋ねながら目的地へ向かった。途中、覚えてたのヒンディー語で話しかけると、運転手の表情が途端に和らいだ。

今日何よりも印象的だったのは、道端で会ったおじさんだ。ホテルまでの詳細な道のりを聞くと、気前よく教えてくれた。別れ際に両頬をタッチしてきた。タッチしてきた理由はよく分からなかったが、おじさんは笑顔だったので、思わず笑顔になってしまった。タクシーの運転手とも仲良くなった所で、ホテルに到着。美味しいチャイで温かくお迎えして頂いた後、マクドナルドで夕食を取った。明日の予定について話し合い、その後就寝した。インド初日から面白い出会いがあった。



8月13日（木）担当：阿部 祐三

昨日の晩にホテルに到着したので、今日が実質的なインド初日となった。朝、7時に起床し、ホテルの朝食は案の定カレー。そして初日なので、時間に余裕を持って行動しようと決め、9時30分にホテルを出発し、JICAの企業訪問へ向かった。しかし、切符の買い方や電車の乗り換えに時間を浪費し、結局10分前にJICAオフィスに到着することとなった。JICA企業訪問では、JICAがインドに行っている事業の一般的な説明から、貧困の現状など深いお話をしていただいた。1時間30分ほどで訪問を終え、再び電車でホテルに戻り、昼食をいただいた。案の定またカレーであった。

その後、電車は良い思い出がないので、タクシーで日本大使館へ向かった。日本大使館の中は、瓦屋根があったり、松の木があったりなど、とてもインドの光景とは思えないほど美しかった。1時間程、日本大使とお話しし、ホテルへ再び戻った。夕ご飯はカレーと思いきや、ピラフという御馳走で、スプーンが止まらなかった。

初日を終えて感じたことは、インド人の優しさである。JICAに向かっている途中、乗り換えなどで何度も迷い、路頭に迷ったが、多くの現地の方が、わざわざ声をかけてくれたり、駅員に聞いてくれたりなど、彼らの優しさがなかったらJICAにたどり着くことはできなかっただろう。日本大使の方もおっしゃっていたが、インド人は、お金に対する執着心と、家族や人を大切にするという心を持ち合わせた民族だそうである。今日は、そのインド人の民族性について身をもって経験した一日であった。



8月14日（金）担当：仲村 祐一

今日は三井物産とチャウラ先生が主宰されている日本語学校に訪問した。

昨日はデリーメトロをうまく利用できず JICA に着くのがギリギリになったので、今日は少し頭を使ってタクシーを利用した。超快適（笑）。デリー空港から宿泊先の WBC まではクーラー有りのタクシーを頼んだら、クーラー無しの 30 年ほど経ったビンテージタクシーがお迎えにきて、1 時間半ほど暑い中拘束された後だったのでこの車は天国のようであった。その後、少し早く着きすぎたので三井物産の近くのショッピングモールをまわった。

午前 10 時少し前に三井物産に移動し、小野様・大橋様に会社の事業概要について説明をしていただいた。インドでのインフラ、特に水道・電気・道路の未整備やインド人の計画性の欠如は多くの会社のインド進出を妨げているとのことであった。しかし、NPO や ODA の支援（JICA によるメトロ開発）や経済政策により改善されてきているので、今後の外資の参入は期待できそうだ。また他の企業・団体のインド駐在員と同様に三井物産の方も休日にするのがないので娯楽の拡充が必要になりそうだ。

その後第一級首相元通訳アショク・チャウラ先生の日本語学校に行き、日本語学習者と交流した。そこでは、日本とインドの違いや好きなことについて話したり、折り紙をしたりした。その後は一緒にマーケットに行ってショッピングをしたりご飯を食べたりして、午後 8 時頃に解散となった。この日もとても暑かった。そこら中で、犬が気持ち良さげに水浴びをしている。僕も混じりたかったけど、汚いから止めた・・・。



8月15日（土）担当：瀬藤 朋

今日はインドの独立記念日であった。本来は美術館へ行く予定だったがどこのお店も、娯楽施設も閉まっているということで1日フリーになった。少し疲れがたまっていたのか起きたのはお昼前。そのころにはインド門でのセレモニーも終わっており、頑張って起きて見に行っとけばよかったな、と少し後悔した。

そして今日のお昼頃、WBCに創設者である中村行明さんが戻ってこられたのでメンバーと中村さんでお昼と夕飯をいただいた。お昼はそうめんだった。日本食が恋しくなってきた頃だったので中村さんのお心づかいに感謝しつついただいた。そして夕飯は、中村さん曰く「世界一美味しい」バターチキンカレー。そのお言葉通り、ナンもカレーもとても美味しく日本では出会った事のないものであったほど。昼食、夕飯ともに、中村さんのちょっと変わった人生経験や考え方、インドにまつわる面白いお話を聞きながらいただくことができ、いっそう楽しい時間を過ごす事ができたと思う。

夕飯が終わり、帰宅した後はチェンナイやコルカタの分科会に向けて本を読んでいた。他のメンバーは中村さんのギターを聴いたり雑談を楽しんだり、休息をとったり、と各々の時間をすごしていた。



8月16日（日）担当：梅井 茉実香

インドに来て5日目、初めてのインド観光。前日に交流会で知り合った日本語を学ぶ18歳から30歳までの多様なインド人の皆さんと共にバスでアグラへ。デリーからアグラまではバスで3時間から4時間かかるため、集合時間は朝の7時半。インド人が日本人の宿泊場所まで来てくれた。インド人は少し遅れるのが当然なのではないかと勝手に推測していたら、皆集合時間の10分前には集まってくれていて、むしろ日本人の方が遅れ気味という結果に。そしていよいよ出発！バスで数十分走ると、高速道路沿いに緑が広がっており、お店や民家は窓からは見えなかったが、デリー中心部とは異なる光景が広がっており、郊外ではどのような生活が営まれているのかに興味をそそられた。バスの中ではインド人が朝ごはんとしてジュース、カップケーキ、スナック菓子を用意してくれていて助かった。前日初めて現地のインド人学生との交流が始まり、早くもインド人の優しさを感じることが多い。しかしスナック菓子が多く、少々重く感じた。

さて、賑やかなバスで2時間ほど走ったところで休憩タイム。初めてのインドのサービスエリアへ。日本のお土産屋さんなどは少なく、お土産のお菓子などは売っていなかった。インド雑貨は置いていたが、日本円に換算しても結構高価で、学生に手が届く値段ではなかった。一体誰向けに販売しているのだろうか。レストランではインドの軽食が一通りそろっていた。何だかんだでパーキングエリアで1時間ほど過ごし、目的地であるタージマハルへ着いたのは12時半ぐらいであった。しかし、ここからまた実際にタージマハルを見るまでには、チケットの購入、購入場所からのローカルバスでの移動、セキュリティチェックなど1時間ほどかかってしまった。個人的には今まで行った観光地の中で人が一番多く、インドのパワーを感じるようになった。ただ、外国人はインド人の35倍の値段を払っているせいか、ほとんど並ばずにスムーズに入場できた。タージマハル内で集合写真をとるために、インド人のリーダーがワイロ的なものをあたり前のように渡していて、ここでもまたインドを感じる事ができた。

さて世界遺産を堪能し、午後3時半になり、予約していたレストランに到着。皆が席について注文を始めようとするが、一番年上で日本人を観光においてリードしてくれたインド人男性が、バスから降りてこないことに気付く。話を聞きに行くと、敬虔なベジタリアンでお肉料理があるお店には入ることも憚られるということであった。細かいいろいろなやり取りがあった後、日本人メンバー三人と彼とで近くにあったベジタリアンのお店に行くことになった。この過程の中で、気を遣わせてしまった申し訳なさから、悔し涙を流す日本人メンバーもいた。しかし、宗教について考えさせられるきっかけとなり、これをきっかけに様々な話ができてインド人との絆は深まったように思うので結果オーライである。さて、短いながらもデリーとは違うインドの姿をたくさん見ることができて、ここには紙幅の都合上書ききれない気づきがたくさんあり、有意義な一日を過ごすことができた。インド人の皆の心遣いとおもてなし精神に感謝！お疲れさまでした。



8月17日（月）担当：神作 八起

朝、宿舎をチェックアウトしてチャウラ先生（Prof. Ashok K. Chawla）の研究室がある政府施設へ向かった。チャウラ先生は言語学の研究者であるだけでなく、歴代首相の日本語随行通訳も務め、研究者として日本での長期生活経験もある方だ。チャウラ先生には、ご自身の研究と日印関係についてのお話を頂いた。日印関係への今後に関する先生の展望は明るい一方で、草の根交流の喫緊なる必要性についても言及されていた。日本インド学生会議がその交流の一部になれることを望んでいる。

お話の最後にチャウラ先生から頂いた課題がある。それは、「多様性に満ちたインドで、何が国を1つに統合しているのか」を見つけて欲しいとのことだった。これからのインド滞在で、この問いに対する答えを見つけ、チャウラ先生とディスカッションしたい。

チャウラ先生とのお話の後、日本語学校(IJES New Delhi)の生徒の家にお邪魔した。そこで頂いたキーマカレーが美味しかった。一家のご主人は、学生時代に化学を専攻していた。自分の専攻と同じだったこともあり、話が自然と弾んだ。息子さんとも仲良くなった。乱気流の中、飛行機でチェンナイに向かった。飛行機の中で若いビジネスマンと同席した。日本に出張している同僚がいるらしい。到着先の空港では、タクシーの手配にまで気を配って頂いた。ありがとうございます。

空港ではチェンナイ側カウンターパート（日本語会話協会：ABK-AOTS DOSOKAI）に出迎えをして頂いた。空港から30分ほどの場所にあるホテルは広く、綺麗で、快適だった。夜、ダンスの練習をして就寝した。チェンナイでの新しい出会いに期待している。



8月18日（火）担当：仲村 祐一

今日は、チェンナイで迎えた最初の朝。メンバー全員の顔に疲れが見えていたが、朝早くから外に出てチェンナイを散策した。チェンナイはデリーとは異なり道が整備されゴミもなく衝撃を受けた。州によって雰囲気ガラリと変わると聞いたがここまで違うとは。

チェンナイ散策はヴェーダさんとソームさんというチェンナイでのコーディネーターの方と一緒にいった。午前中に Parthasarathy Temple というヒンドゥー教の寺院と St. Thomas Basilica というキリスト教の協会に行った。Parthasarathy Temple は1200年ほど前に建てられた石造りの寺院で、質感の良い石材は自然素材が大好きな僕にとっては最高の場所だった。St. Thomas Basilica はほどほどに、近くのインドレストランへ。みんなマサラばかり頼んでいたの、僕は Ragi Kanji を注文。「カンジ」とか書いてあったから和食かなと期待していると、出てきたのは紫色で少し塩味のついたスープと生野菜、マンゴーのピクルス。なんだこれ……。慣れない食感、味に多少の抵抗を感じつつも完食。異国に滞在しているからこそその経験であった。次からは食事に関しては現地の人に聞いてから選ぶことにする。

その後、ショッピングをして、19時から ABK-AOTS DOSOKAI へ行き、開会式。スリラム氏、長浜先生、僕の挨拶の後によさこい節を披露した。踊りに関しては少し不安はあったが意外と好評で一安心。また日曜日に踊ることになったので完成度を高めて披露せねば！！開会式で振る舞われたご飯はとてもおいしかった。南インドの料理がこれから沢山食べられるので楽しみだ。



8月19日（水）担当：石原 正章

昨日のABKでの開会式も無事終わり、よさこいを披露する緊張から開放されたメンバーは心なしかさわやかな表情で朝集合をした。本日ははじめに在チェンナイ日本国総領事館を訪問した。領事館はデリーと比較して穏やかな南国のようなチェンナイの閑静な木漏れ日あふれるオフィス街にあった。塀に囲まれた敷地内は非常に丁寧に整えられた庭をもちその中に洋風のきれいな領事館の建物があった。長年JISC先代の方々が築き上げて下さった活動の成果と表敬訪問を了承して下さった馬場総領事のご厚意に深く感謝せねばならない。

建物の中に案内された私たちメンバーは在チェンナイ総領事の馬場誠治様からチェンナイの現在の状況、在留邦人数が少ないことなどのお話を伺った。総領事自身もまだチェンナイで着任されたばかりでインドの多様性（といっても一言では十分に表すことができないと思われる）についてご自身がセレモニーでのスピーチの失敗談を踏まえながらユーモラスに語ってくださった。その後なぜ私たちメンバー一人ひとりが今回 JISC を通してインドに来ようと思ったのか知りたいとおっしゃったので、各々自分の大学の専攻を踏まえ、考えていること、インドでの率直な感想をのべそれに対し総領事がチェンナイでの経験、最新の情報をふまえても貴重なお話をいただいた。学生であるメンバー各々想像できないほど貴重な機会である。また、終始総領事は私たちメンバーが緊張しないようにとさまざまな配慮をしてくださりとてもありがたかった。そして用意していただいた日本食の味はインド料理三昧だった私たちには染み渡った。

領事館をあとにした後、私たちは、ABKのスリラム氏がCEOを務める日本テクノロジーという企業を訪問した。日本テクノロジーは社員のほぼ全員がインド人であるが、働きながら社内で日本語を同時に学んでいた。IT 大国インドの最前線がかつ日本を相手に営業している企業は私の目には日本の IT 企業と写ったが日本人がそう思うほどの社内の清潔

さ、社員の方の人柄の良さ、謙虚さ(日本テクノロジーでは、単に日本語だけでなく日本基準のマナーなども社員に教えていた)を実現するためには並々ならぬ努力、工夫があるだろうとおもった。



8月20日(木) 担当：石原 正章

本日は非常にエキサイティングな一日であった。午前中、朝早くからバスで移動し、Dakshin Chitra というインドの特にタミルナドゥの文化を紹介する、日本で言うと京都の太秦映画村のような場所に向かった。バスで1時間半ほど揺られて着く海岸線にあるこの施設はインドの昔の住居、織物などの伝統工芸、祭りの山車、陶芸の紹介、体験などまだまだ数えきれないほどの展示が広大な敷地の中で行われていた。ここ数日、緊張の連続だったメンバーは普段よりテンションが高かった。敷地内にはコリウッド(チェンナイ版ボリウッド)のスター俳優、女優の看板やインドでは珍しいジャングルジムなどの遊具がありそこでもはしゃいでいると「only for kids」の看板があるとインド人に言われ少し冷静になった。Dakshin Chitra では前述の織物が織られていくのを目の前で見ることができ、サリーがこのようなにつくられていたのかと思った。またここは、現地のインド人にも課外研修でくるところだったようで、百数十人のインドの小学生(もしくは中学生)に囲まれたりした。昼食のミールスを私たちが食べている横の施設で先ほどの小学生百数十人が歴史を伝える紙芝居を鑑賞しており、学生全員が紙芝居の話の緩急とともにこえをあげて純粋に楽しんでいる様は心が洗われる気がした。

その後私たちは世界遺産のマハーバリプラムに移動した。ベンガル湾に望むマハーバリプラムはかつて交易で栄えた都市でマハーバリプラムの建造物群は世界遺産となっている。

見学料として外国人価格の一人 750Rs(≒1350円)を支払い見学した。見学とはいっても敷地内にはいると柵も何もないのでみんな勝手ににのぼって写真を撮ったりしていた。7世紀ごろにつくられた建造物に何の制限もなく触れられるのは、さすがインドの懐の深さといったところか。その後私たちはマハバリプラムビーチへと歩いた。インドでビーチに

行くといってもインド人は海で泳ぐことを想定はしない。インドの海は汚染が激しいようで大半のインド人は海に入ることはないようだ。実際ビーチに出てみると砂浜にはさまざまな屋台みたいなものがたくさんあり人が海にはいって遊ぶというよりは馬に乗って遊んだりしている様子だった。ビーチには人間もいるがほかに、野良牛、野良犬、野良山羊などの動物が闊歩してあるところでは集団で走り回っており、ある意味人間より野生動物のほうがビーチを楽しんでいるように感じた。



8月21日（金）担当者：瀬藤 朋

今日の午前中は、午後に控えた分科会の準備のためにフリーにさせていただき、各自ディスカッションで言いたい事をまとめたり、本を読んだりして過ごしていた。

お昼すぎにお迎えがきて、独立行政法人 JETRO の訪問に向かう。はじめに JETRO の業務内容の概要および、今後に向けての課題を簡単にかつ的確に説明してくださった。そして、チェンナイに研修中だという方が、タミルナドゥ州の産業的な可能性も含めた特徴や JETRO の詳しい取り組みを説明してくださった。質疑応答の時間ではタミルナドゥ州の事情をよく知る、コーディネーターのヴェーダさんが時折解説をしてくださるなどしてより深い内容を理解できたように思う。企業訪問を終えると、次はいよいよ分科会。IITM に向かうバスの中では、各々自分でまとめたノートを見返したり、不安げな表情をうかべたり、トピックに関する本を読んだりしていた。私は「緊張する～～」と言ったり、「胃が痛い～」と言う度にヴェーダさんに「できるできる」と元気づけられていただいた。

いつになく緊張した雰囲気で行きは IITM に到着。事前にかがってはいしたが、やはり森のなかに大学があるような雰囲気だった。分科会の1日目は事前に決めたトピックについてのディスカッションと、時間が許せば明日のプレゼンテーションに向けての話し合いをする予定だった。分科会の時間は4時間ほどあったように思ったが、分科会終了後にはメンバー一同、「時間が足りなかった！」と嘆いていた。私のグループは、トピックについての

意見交換に終始してしまい、プレゼンテーションにむけての話し合いは全くなされないまま分科会が終わってしまった。あしたのプレゼンテーションがうまくいくかとても不安だ。



8月22日（土）担当：中村 允

分科会1日目が無事終了。昨日夜遅く宿舎に戻ったメンバーはさすがにクタクタな様子だった。さて、今日の午前中はそんなクタクタな私たちが一息つくために ABK AOTS DOSOKAI の一部屋をお借りして朝九時からヨガを体験した。ヨガの先生はなぜか身体を動かしづらそうなスーツ。それはさておき、全員が床に横になりリラックスして柔軟体操のような動きをする。女性陣は身体が柔らかいのに対し男性陣はボロボロ。締めくくりに行ったメディテーションは目を瞑り頭の中に森を思い浮かべ空想の世界で気持ちよく散歩をすること。二時間のヨガ体験を終えた頃にはすっかり気分もリフレッシュし身体も軽くなった気がする。ヨガ終了後は用意してくださったランチを取り、バスで移動し Government museum へ。広大な敷地には絵画や銅像、壁画などインドの文化、歴史を知る貴重なものばかり。しかし大抵の展示品は日本のようにしっかりと管理されているわけではなくひとびとはそれらを触ったりして楽しんでいる様子。いい意味でインド人は寛容な気質なのだろう。ヨガと博物館、インドの二つの文化体験をしたところで、バスに乗り本日のメインイベント、IIT での分科会2日目・プレゼン発表だ。前日は各自分科会のために用意してきた題目、資料を基に IIT のメンバーと白熱した議論を繰り広げた。今日はそれを Powerpoint にまとめ全員の前で15分の発表をした。何人かのメンバーは IIT のメンバーが豊富な知識を持つがゆえに話したい議題から脱線してしまいプレゼンをまとめるのに苦労したようだったが、日本人側のメンバーもそこはしっかりと彼らの意見受け止めた上で明快にまとめ発表が出来ていた。二日間にわたる分科会は大成功のうちに終了しすっかり打ち解けたメンバー同士お互いに握

手をし合い写真を撮り合ったりして健闘をたたえあった。日本とインドの学生が心から繋がったワンシーンであると思えた。



8月23日（日）担当：中村 允

チェンナイでの二日間の分科会を無事終え心も身体も開放されたメンバー一同。さて本日は、ABK AOTS DOSOKAI にて私たちは日本からのゲストとして招かれているのだ。というのも DOSOKAI で日本語を勉強しているインド人の方々が集まり交流会を開くのだ。交流会は11時からスタート。交流会の部屋には80人を超えるであろうインド人の生徒の方々、DOSOKAI の日本人の関係者の方々がいて満席状態となっていて驚いた。私たちは交流会でよさこいを踊る予定だったので既に着物・ジンベエの状態で部屋に入り、普段見慣れない日本の伝統衣装にインド人の方々は興味津々の様子。壇上に腰をかけ、日本語で自己紹介をしたのち、よさこいを披露。なるこの軽快な音を響かせながらステージいっぱいに身体を動かし踊りを披露すると笑顔の皆さんが目映り私たちもうれしかった。続いて私たちは日本の有名な「世界に1つだけの花」を歌うとインド人の方々もお返しにと、練習していたという「幸せなら手をたたこう」を歌ってくださった。和やかなムードのまま、本日の交流会のメインイベントであるトークセッション。椅子で丸く輪を作りインド人8、9名に対し私たちが一人ずつその輪にローテーションで入る形でトークは進んだ。日本語の習得レベルに差はあるものの、懸命に質問しようとする姿勢に私たちも笑顔で答える。インド人の方々は漢字に大変興味をもたれていて、私たちの苗字・名前の意味を聞いてくる印象だった。また、自分で言うのもなんだがよく字がきれいだとほめられる私は、希望にこたえて日本語の勉強ノートに私の名前をはじめ、書いて欲しい漢字を書いてあげて大変喜んでいるようだった。小一時間のトークセッションはあっという間に終了してしまい、みんなで記念撮影。交流会は大成功のうちに幕を閉じた。

午後からはいよいよホームステイ。ABK AOTS DOSOKAI で日本語を勉強している方々のお宅へメンバー一人ずつ泊めさせていただいた。私のステイ先はホストマザーのブイジさんが日本語の先生をしていて彼女の娘のワンダラと息子のアンブリッシュは日本語の勉強を始めて一ヶ月だそうだ。2人とも小学生で元気が良いすぎる。ステイ先に到着した私はホストファーザーのムラリさんと一緒に暮らしているムラリさんのご両親に挨拶をした。ムラリさんとおじいさん(ムラリさんのお父さん)は日本で東芝・パナソニックなどで勤務経験があるため日本に大変縁のあるご家族だ。私は挨拶をした後に着物姿のまま外で2人の子供とドッジボール、バスケットボール、自転車競走をした。全力で子供と遊んだ経験がほとんど無い私は疲れ果てたが自分が子供に戻れたような気持ちが出て楽しかった。夜になりチェンナイを案内すると、ご両親とアンブリッシュと共にイスカーン寺院に連れて行っていただいた。寺院の中ではクリシュナを祝うイベントが行われていて軽快な太鼓の音と人々の喧騒にあふれていた。中でも寺院の中央では衣装を着た方々がダンスを踊っていたので思い切ってアンブリッシュと一緒に輪の中に入り躍らせてもらった。汗だくになりながら気づいたら一時間半も踊っていたから驚きだ。存分に楽しんだ後ご両親が寺院に隣接するショップでクルタをプレゼントしていただいた。風通しがよく柄も綺麗なクルタを頂いてとてもうれしかった。さらにチェンナイのエリオットビーチに近い南インドの伝統的なレストランに招待していただき、バナナの葉っぱをお皿代わりとして数種類のカレーをご馳走になった。家に帰宅した私は部屋で子供たちよりも早く寝てしまっていたそうだ。温かいもてなしをしていただきインドがよりいっそう大好きになった。



8月24日（月）担当：阿部 祐三

ホームステイが終わり、ABK AOTS DOSOKAI（日本語教室など、日本のオフィスのような場所）でメンバーが集合し、Elliot's Beach へ向かった。ビーチはインドと思えないほど美しく、ゴミが少なかった。寺院の周りにもゴミが落ちていないように、インド人は節度があるようである。ビーチでしばらくのんびりし、日が落ちると、分科会に参加していた IIT の学生もビーチに登場した。ビーチで食事をするために、ケンタッキーへ買い出しに行くと不思議なことが起こった。人数が多かったので 40 ピースのチキンを注文すると、店長らしき人がよく分からない英語で話しかけてきた。IIT の学生によると、どうやら 40 ピースは時間がかかるので、キッチン案内してあげてもいいという話だった。まさかの展開にももちろん即答で ok のサインをだし、マスクを着用し、キッチン内を案内していただいた。手も洗っていないのに、大量のチキンが眠っている冷蔵庫や調理過程を見せて頂き、衛生面を心配してしまった。しかし、ベジタリアンのために、ノンベジタリアンと異なる油や手袋を使用し、徹底的に分けていたことは感心した。ケンタッキーのキッチン見学は、日本では決して経験できないだろう。待たせるのは申し訳ないという南インド人の暖かさを感じた。

そして、40 ピースのチキンとともにビーチで小さなパーティーを開いた。辛い、久しぶりの肉と夜のビーチの景色を見ながら食べるケンタッキーは、格別に美味しかった。分科会では知的だった IIT の学生も、パーティーの最中では僕らと同じ学生だった。海ではしゃぎ、一緒に笑い、とても素敵な時を過ごすことができた。IIT の学生とともに過ごして強烈に印象に残ったことは、彼らのモットーは、'Party hard, Study hard' ということである。ビーチでの彼らは僕らの知っている IIT 生ではなかった。オンオフがはっきりしていて、学生の本来あるべき姿だと私は感じた。



8月25日（火）担当：瀬藤 朋

午前中はスリシティという企業を訪問した。今まで訪問してきた企業はすべてインドに進出している日本企業だったが、今回はインドの企業ということで説明から質疑応答まですべて英語だった。スリシティ自体は、インドに進出している外国企業向けに安定したインフラや住居、家族向けのサービスを提供している企業である。インドは有望な市場だが、ビジネスを円滑進めるためにはインフラ等の面で課題が多いということを様々な企業で伺っていたので、インドの発展に伴ってこのようなかたちのビジネスも大きくなりそうだなと思った。

その後は、秋平というラーメン屋さんにご飯を食べに。味が濃いめだったがとても美味しかった。ベジ向けのメニューもあり、コーディネーターのヴェーダさんが注文していた。午後からはABKに戻って、チェンナイ閉会式が行われた。チェンナイ訪問の感想と日本側、インド側の対応を含めての反省点を出し合い、これからどうすればもっと良くなるかを話し合った。



8月26日（水）担当：田尾あずさ

朝、ソームさんとドライバーさんにタクシーでチェンナイ空港まで送っていただき、夕方の国内便でコルカタへ向かった。午前中はホテルで過ごし、昼頃空港についた。チェンナイには9日間滞在したが、チェンナイは北インドとは違う雰囲気の街だと感じた。第一に、言語が異なる。チェンナイ空港に着いたとたん、北インドで使用されている文字の特徴とは対照的な、曲線が多い文字が目に入るようになった。チェンナイのあるタミルナードゥ州の公用語はタミル語であり、系統も、北の言語の多くがアーリア系であるのに対し、タミル語をはじめとする南インドの言語の多くはドラヴィダ系であるといわれる。つまり、同じ国にもかかわらず、言語系統自体が違う言語が混在しているのである。北インドでも南インドでも

州により複数の言語が話され、北インドの言語の例としてはヒンディー語をはじめ、ベンガル語、パンジャービー語、グジャラーティ語などがある。しかし、北インドでのヒンディー語の通用度は非常に高く、ヒンディー語が話せれば北インド全体でコミュニケーションとすることは難しいことではない。この理由には、北インドにはヒンディー語と文法や単語が似ている言語が多いことや、ヒンディー語映画が大変人気で、ヒンディー語を母語としない人々でも口語レベルであれば理解できる人が極めて多いことがあるが、一方で南インド、特にタミルナドゥ州では、インド独立後に政府がヒンディー語を国語にしようとしたことに反対した人が多かったという歴史的背景から、ヒンディー語の通用度は低いと大学で習った。そのため、チェンナイでは街でヒンディー語を見かけることはほとんどなかったが、思っていたほど、ヒンディー語に対する敵対意識が持たれているわけでもないと感じた。例えば、ボリウッド映画で人気のヒンディー語の歌は、言語が違えどもそれを好む人々も多くいたし、また学校で、その利便性からヒンディー語を勉強したという人もいた。さらに、滞在した宿舎の従業員の方々は皆母語がヒンディー語の人々で、私は食事の時間や、サービスに関する簡単な内容をすべてヒンディー語で伝え合っていた。このような点で、北インドと南インドの言語の違いが表面的に明らかであった一方、実際に人々とコミュニケーションをとってみると、以外にもヒンディー語が通じた機会が多く、言語的にも非常に面白いと感じたチェンナイ滞在であった。また、気候が北インドとは雰囲気も異なった。さらに温暖になるせいか、人々がゆったりとしていて、また親切だと感じた。交通量やクラクションの喧噪は北インドと変わらないが、買い物などをしていると、外国人でもあまりじろじろ見られず、また物売りの勢いも少し穏やかであった。以上の2点が、チェンナイで最も印象に残った出来事である。

コルカタには夜に到着したが、IJSC の学生さんたちが迎えに来てくださっており、クリシュナミッションまでの移動も非常にスムーズであった。夜9時ごろに着いたが、その後夕食をとり、ミーティングをして一日は終了した。



8月27日（木）担当：神作八起

フォーマルを着用して開会式の会場となる大学(Jadavpur University)へ向かった。大学に到着して暫くの間、インド側メンバーと談笑した。構内を少し散歩して、会場でのリハーサルを始めた。

リハーサルを始めようとした所、持参したダンス楽曲 CD の読み込みに失敗して、どうにも立ち行かなくなってしまった。仕方なくホテルに戻り、USB フラッシュメモリへデータを移行して、何とか読み込みに成功。

ホテルへ戻る時、インド側メンバーであるイーシャン(Ishan Basu)が付いてきてくれた。イーシャンは日本開催の 18 期にも参加したメンバーだ。開会式の開始時間が迫っていたが、ホテルへ向かうリキシャの中では、18 期の時の話に花が咲いた。このように期をまたがって、活動を継続するメンバーがいることに感動するとともに、19 期からも 20 期に繋げたいと感じた。

リハーサルも問題無く終わり、開場と共に挨拶に回った。在コルカタ日本国総領事館の遠藤和巳 総領事や錚々たるゲストの方々と挨拶し、気が引き締まる。そして、なんと間の悪いことに、開会式で使用していた大学備え付けのラップトップが動作を停止した。

懸命の復旧作業にも関わらず、ラップトップは不調のまま。これに依拠していたダンス・歌の音源を何とか用意して、再生する作業は困難を極めた。楽曲ごとに会場の皆様をお待たせしてしまった。非常に申し訳ない。最後にコルカタにいらしていた和太鼓奏者の方に、10分ほどの太鼓演奏をして頂いた。素晴らしい演奏だった。

今日出会ったばかりのインド側、日本側メンバーは、舞台裏で予想だにしない修羅場をくぐっていた。しかしその分仲良くなれたかもしれない。



8月28日（金）担当：仲村 祐一

今日は朝から曇天の空。コルカタに来て数日経つが、未だ暑苦しく大気が少し淀んでいるこの都市には慣れない。むしろ体調の面ではどんどん悪くなっている気がする。その結果、今日は田尾と阿部は体調不良で自室安静となった。軽く朝食をとった後、ニガム先生と元気なメンバー5人で destiny foundation に赴いた。この団体は人身売買の被害を受けた女性を支援する NGO で、裁縫での製品作りを通して自立を促すよう日々教育をされている。最近活動場所を移したようで探すのに時間がかかったが、日本人でこの団体と共に企画をされている伊達さんに会うことができ、無事着くことができた。施設の中では作業の見学と団体の成り立ちや成果について伺うことができた。男性の女性に対する接し方が同じアジアなのにこれほどまで違うのかということをお話しをしていただいた。

午後は半分のメンバーはガンジス川や美術館に行き、残りは宿舎で休憩をとった。ガンジス川に行きたかったのだが、体調が優れなかったので自室待機。インド滞在も折り返しだ。最後まで楽しもう。



8月29日（土）担当：田尾 あずさ

今日は、午前中にコルカタのインド側の学生と分科会の1日目をした後遠藤総領事にお会いし、各自ホームステイ先へ向かうというスケジュールであった。まず、朝 Jadavpur 大学に集合し、文化、インフラ、政治、経済と宗教の4つのテーマのグループに分かれた。今回は人グループあたり4~5人と、チェンナイと比べて人数が増え、また女性も多く参加していた。各グループメンバーが順番に、完成したプレゼンテーションをしていくというやり方で、それぞれのグループのテーマに沿って別々のトピックを選択し、自由にプレゼンするというやり方であった。例えば、私の班は文化がテーマであったが、その中で、異文化対応、日本とインドの行事、インドのお見合い結婚、日本とインドの婚礼方式の違いといった細かい

トピックについて一人ひとり発表をした。そのため、一つのトピックについて多角的に分析することができたと感じた。その後、お昼頃に日本領事館へ向かい、遠藤総領事にお会いした。日本側の学生だけでなくインド側の学生も全員ご招待いただき、総領事とコルカタの文化やお祭り、コルカタに住む日本人などについてお話をし、にぎやかな雰囲気であった。そこでお昼もごちそうになり、初めて日本食を口にしたというインドの学生も多かったようだが、口に合ったようだった。私の知っているインドの人々の中では、スパイスがないと味を感じないという人も多くいるため、とても意外に感じた。その後は一旦クリシュナミッションに戻り、ホームステイ先の学生と待ち合わせをした。それぞれ違うホームステイ先に向かうこととなったが、今回は一日半と、多くの時間があり、外食に連れて行っていただいたり、映画を見たり、遠くまで出かけたりと充実した時間を過ごしているようであった。私は Sohini という子のご家庭へお邪魔したが、彼女のお姉さんの結婚式の時の写真やビデオを見せてもらい、コルカタの結婚式について多く教えていただいた。私の分科会のトピックがインドのお見合い結婚であったため、大変興味深かった。また、お母さんの手料理が忘れられないほどおいしかった。コルカタでは魚もよく食べるため、それまで食べたことのなかった魚のカレーもごちそうになることができたのが嬉しかった。インドではゲストは神様であるという考えがあり、Sohini にもご両親にも大変良くしていただき、日本人も見習うべきであると思ったほど、温かく迎えていただいた。



8月30日（日）担当：神作八起

遅く起きたホームステイ2日目の朝は、非常に暑かった。朝飯をすませて、植物園(Botanic Garden)に行った。この植物園は、ガンジス川に沿って広がっており、全世界の希少植物が展示されている。美しく静かな場所だ。ホームステイ先のKaran曰く、コルカタは汚くてうるさいだけではないとのことだ。

昼飯を食べて、ホストファミリーの皆さんと雑談をした。Karanの専攻は、自分と同じ化学だ。Karanの父親もケミカルビジネスをやっている。私を含めたこの3人で、日印間のケミカルビジネスの可能性について話した。本当にビジネスが始まりそうな感がある。

昼寝をした後、日本語の音楽をかけながら話をした。言語が通じなくても桑田圭祐の歌声は心に響くらしい。気に入った楽曲があると、歌詞の意味を説明するというのを繰り返した。

美味しい夕飯を頂いて、ホームステイ最後の夜を過ごそうとしていた。有難いことにホストファミリーからお土産を頂いた。またコルカタに来るときは、泊まりに来なさいと、温かいことばをかけられ、嬉しかった。

Karanと他愛もないことを話したあと、遅い時間に就寝した。また必ずここに来たい。

8月31日（月）担当：平川菜那

ホームステイの家に別れを言う日がやってきた。私の訪れたインドのホームステイ家庭はどちらも私をゲストとして歓待してくれた。コルカタのホスト、大学生のプバリの家族はいつも私に気を使ってくれ、ホストマザーは今朝も甘いチャーエとビスケットを出してくれた。辛いものや甘すぎるものがあまり得意ではない私に配慮して、辛さを抑えたカレーや甘さを抑えたチャーエを作ってくれた。私の行ってみたかったヴィクトリアメモリアル、そして国立美術館にも連れて行ってくれた。使う言葉の違う私をいつも話の輪に加えようとしてくれ、インド人のゲストに対する心尽くしと温かさを実感するよい経験となった。また、インドでは家族の一体感が日本よりも強いことが影響してか、ホームステイ2日目のヴィクトリアメモリアルに行く日は、プバリの一家総出で、プバリの父も母も、大叔母も弟も全員一緒に行動したのでとても面白かった。国立美術館に入るときに、外国人の料金が現地人料金の15倍くらいするので、プバリの家族から現地人と同じように振舞って、チェックする人からどこから来たか尋ねられたら「アッサムから来た」と答えるように言われた。ただその嘘をついてどうなるのか知りたかったのでそのまま現地人として敬意を通り過ぎようとする、一目で警備員に外国人だとばれたようで、プバリの家族と警備員が大声で言い争いを始めたのには驚いた。日本人にはあまり見られないインド人の気性の荒さや主張の強

さを見られた瞬間だった。彼は家族の愛情、特に母、姉からの愛情を一身に受けまたいつでも来ていいよという言葉に甘えてまた訪れたいと思う。また、ちょうどプバリの家に滞在していた彼女の大叔母さんもとても温かい人で、共通の言語は全くないのに表情としぐさで意思疎通を図った。心と心を通じ合わせるのに、言葉が不可欠なわけではないのだと実感した。

大満足のホームステイ先から出発し、プレゼンをしに大学へ向かった。他のほとんどの日本人メンバーもこの日にプレゼンをおこなった。私のプレゼン内容はチェンナイと同様インドの貧困についてのものだった。ここで痛感したのはインド側のメンバーは皆日本の経済、特に新卒の日本人の就職状況や失業者率、そしてそれらの結果の要因に興味を持っていた。インドの貧困について調べるだけでなく、日本の貧困についても、もっとよく調べておかなければならなかったと感じた。プレゼンは終わったが、またより深くこのテーマについて調べて、日本との比較もしていこうと思った。まだまだ課題が残ったプレゼンだったが、一応プレゼンも終わり、安堵した。日本側のメンバーもプレゼンが終わったことで、ホッとした表情をしていた。



9月1日（火）担当：仲村 祐一

朝6時前に起きて、眠い目をこすりながら身支度をし、タクシーに乗る。いつも遅れてくる一部のメンバーも今日は時間通りに準備を終わらせロビーにいた。なぜそんなに早くに出發したのか？それは午前中にあのノーベル平和賞を受賞したマザー・テレサが働いていたマザーハウスでボランティアをすることになっていたからである。

マザーハウスは様々な患者を引き取り、手当をしているので周りに自然しか無いような地域にあるのかとおもっていたのだが、コルカタのごちゃごちゃした町なかに建てられていた。キリスト教の施設なので、洋風のデザインがとてもきれいであった。食事が終わった後、JISCメンバーと Seshadri, Ishan, Sayan とで PREM DAN という軽度の障害をもった患者が収容されている施設へ移動した。そこでは、洗濯・食事の手伝い・床掃除をした。このプログラムの中には仕事だけでなく、一緒にボランティアをしている外国人との交流もあり、色々な国の方々と話すことができるとても有意義な時間を過ごせた。

午後には IJSC18 期のメンバーとの食事会があった。彼らは昨年本会議のお返しということで企画してくれたもので、中華料理を食べにいった。石原は相変わらず後先考えず食いまくっているの少し心配になった。今回の IJSC18 期のメンバーとの交流が実現したことはこの団体の OGOB の方々が親密な関係を築いてくれたことによって実現した。JISC と IJSC の OGOB の方々には本当に感謝している。



9月2日（水）担当：田尾 あずさ

インド開催も終わりに近づく中、本日、コルカタでの分科会も最終日を迎えた。今日はコルカタで大きなデモが予定されており、交通機関が使えるかどうかや安全面での心配があったが、予定通り、Jadavpur 大学にて分科会を行うことができた。朝はニガム先生とインド側の学生が迎えに来てくださり、バスを使って大学へ行くことができた。いつもより交通量が大きく減り、クラクションの喧騒もなく比較的静かなコルカタの道は、違和感を覚えるような光景であった。私たちは無事に大学へ到着することができたが、やはり遠方から通っている学生たちの中には、遅れてくる子や、来られない状況にある子たちもいたため、グループ内で欠けている学生がいたのは少々残念ではあったが、全グループのディスカッションを終えることができた。自分のグループのディスカッションが終わった学生たちの中には、他のグループに参加し議論に加わる者もあり、幅広いトピックに携わることができ有意義な分科会であったように思う。しかし、長旅の疲れがこたえたのか体調不良者も出ていたため、夕方ごろには予定を完了させ、早めにクリシュナミッションへ戻り、夕食をとり1日を終えた。また、インド側の学生たちや先生方は常に日本側の学生の体調を気遣い、お茶を用意してくださるなど大変お世話になり、見習わなければならないと強く感じ、また、今度は彼らが日本に来た際には、今度は私が精一杯のおもてなしで必ず恩返しをしたい。



9月3日（木）担当：中村 允

今日はお昼にコルカタの日本人商工会の方々を日本料理店での会食に招待していただき、日本料理店でおいしい料理を振舞っていただいた。日本企業の代表取締役の方と同席で会食をすることなど普段ではないことなのでとても緊張したのが、おいしい日本食と共に有意義な時間が過ごせた。

のち、一向は閉会式の会場となるニガム先生のご自宅へお邪魔させていただいた。閉会式には日本、コルカタ側の学生、ニガム先生、日本語学校の先生方など50名近い方々にお集まりいただき、全員がコルカタでの修了書をニガム先生から受け取り、各自感想や感謝の意を一人ずつ発表し感慨深い時間となったが、みんなで乾杯してからは音楽を流してダンスをみんなで踊り盛大な閉会式となった。

今思えば10日間など昨日のことに感じられ、コルカタでも様々な方々との出会いがあり、毎日が本当に楽しく、勉強になり、メンバーそれぞれの記憶に強く刻まれた。

日印学生会議のプログラムは今夜を持って終了し、明日は朝早く宿泊先を出発し、コルカタ→デリー→成田空港と乗り継ぎ、帰路に着く。あっという間で、かつこれほどまでに新しいことが凝縮された24日間は今までの人生で無かった、それほど良かったと胸を張って言える。



9月4日（金）担当：石原 正章

ついに長かったインド滞在も最終日を迎えた。数日前から帰国が近づき、どこか何処か忙しなかったメンバーも今日の朝は不思議と落ち着いている様子だった。コルカタからデリーの中継便の搭乗時刻が9時30分だけに朝の集合時刻も早かったが、JISCのたくさんのインド側メンバーが Ramakrishna Mission に集まってくれていた。フロントで手続きを終え、インド側メンバーとともにタクシーに乗り込み、空港へ向かう。道中日本側メンバーは車窓から見える景色の移ろいに視線を向けていた。コルカタにはじめて到着したときの空港から Ramakrishna Mission への道は疲労もあり、1時間という時間がとても長く感じたが、今回は一瞬で空港へ着いたような気がし、メンバーも口々にもう空港着いたのと話していた。空港到着後、フライトまで時間があつたので、インド側メンバーと日本人側メンバー最後のお別れをした。空港の入り口前で日印あわせて30名ほどの人が20分ほど抱き合ったり、踊ったりしている姿は異様だったかもしれないが、空港の警備員は笑ってこちらを見守ってくれていた。コルカタでの本会議はほかの都市と異なりそのメンバーの人数もさることながら、全員私たちと同じ年齢の大学生ということが特徴であった。実際コルカタでの本会議は開会式を始めトラブルが絶えなかった、しかしどんなことがあっても、常に対話し、ともに楽しんできた。実際ともにすごした時間は2週間もないかもしれないが、日本とインドという、とても地理的にへだてられた国の同じ若者がこうして集っていることに私は価値を感じた。

近年日本は東京オリンピックを控え、「おもてなし」をキーワードに日本人のもつホスピタリティを活かし、外国人をお出迎えしようといわれているが。私たちの出会ったすべてのインド人は私たち以上にホスピタリティにあふれ、逆に彼らから学ばされることが多かった。もし彼らが逆に今度は日本を訪れたときは、私たちが彼らをおもてなしする。そのようなことが繰り返しおきていけばよいなと感じた。

最後に私たちの活動を支えてくださったインドの方、ニガム先生をはじめインドにいる日本人の方、出国前にサポートしてくださった日本人、在日インド人の方に感謝を述べて最終日の日録とさせていただきます。



分科会レポート①

Chennai

India Institute Technology Madras

8/21, 22

分科会(チェンナイ)

作成者：中村允

日時：8/21(金) 17:00～21:00 , 22(土) 17:00～21:30

日本側担当者：中村允

インド側担当者：Nikhil Mulinti, Sashank

トピック：インフラ～防災対策～

・目的

両国で起こる自然災害の種類を理解し、それに対する両国の対策、取り組みについて理解する。

・考察

日本で起こる災害の割合は地震が80%を占め次いで台風、大雨が20%となっているのに対し、インドでは台風、洪水が80%、地震が10%、疫病が10%という結果となっている。「インド政府は災害発生時被災地域に支援をする際にカーストや宗教で支援の優先順が変わってしまうことなどはあるか。」という質問に対し、それはない。と応えた。しかし、インドは日本と異なる支援プロセスを持っている。インドは多くの州が存在し人口も多いため、インド政府があらかじめ各州の災害義捐金の額を決めている。そして被災した際にインド政府から州政府に支援金が行く。支援の方法はインド政府ではなく州政府が決めるため(インド政府より州政府の方が権限が強い)、ここで最悪汚職が発生すると被災した人々のために有効に支援金が使われなくなってしまう。

また、「被災した人々にどのような支援を行っているのか。」という質問には、インドでは避難先に仮設のテントが作られ人々はそこに住まうことができる。しかし日本と違う点は、インドの仮設住宅は2ヶ月しか住むことができないという点である。居住期間を過ぎると出て行かなければいけないため路頭にさまよう人もいる。これは改善しなければいけない点である。逆に面白いと思った点はインドでは被災し仕事を失った人々のために半年間土地を貸し与え、農業職に従事できることだ。日本は面積も小さく土地も無い。そのうえ日本では農業従事者の数自体が少ないため仮に土地を貸し与えられたとしても十分に活用することは難しいだろう。

インド側からの質問は「台風が発生した際に日本の一般的な家はどのような対策をとっているのか」、というものだったが日本では家ごと吹き飛ばされるような恐ろしい台風は発生しないため台風に対する対策はあまり無い、と答えたが被害件数こそ少なけれ何も対策はしないのか、例えばアメリカのようにハリケーンに備える地下シェルターのような防護設備が今まで日本の一般家庭に浸透していないのはなぜ、と聞かれて私自身返答に困ってしまったのが反省である。日本は地震大国であるが大きな高層ビルなどに用いられる免震構造の説明を求められ、巨大なゴムの免震装置を建物と基礎の間に挟みこみ建物を基礎と分断した状態にして地面のゆれを全てゴムの免震装置が吸収する技術があることを話したところ興味深そうにしていたが、インドと日本では先に述べたように災害の種類が異なる

ため、インドで災害の多くを占める洪水の対策を日本ではどのようにしているか聞かれ、一般的に上下水道の整備、東京では洪水対策に地下に巨大な雨水貯蔵場所があるくらいしか説明できず一般の家庭で行われている対策まで細かくは説明できなかった。

・総括

総じてインド側のメンバーは1つの質問・疑問から派生して様々な角度から物事を見てくるので対応が難しかった。分科会のトピックカテゴリーにとらわれない、時に柔軟な思考力、また事前の知識量も求められる。日本にいる間から自国のことにちゃんと目を向け常に考える力を持っていればより充実した分科会が実現できる。



分科会(チェンナイ)

作成者：仲村祐一

日時：8/21(金) 17:00～21:00 , 22(土) 17:00～21:30

日本側担当者：仲村祐一

インド側担当者：Rohan Chavan, Suraj Kashyap

トピック：日印の交通インフラの比較

・目的

人口が増加しているインドで需要が急増する輸送システムの今後のあり方について日本の輸送技術を取り入れ、予測する。

・考察

まず基本情報として①インドの人口②国土面積③都市人口率とその推移④世帯年収による階層区分などを調べた。これらは輸送システムの利用と密接に繋がっていると考えた

めだ。①日本の10倍（2030年には15億人に達すると予想）、②日本の9倍、③32%と低く農村人口は世界一となっている。2030年には都市人口が2億人ほど増加することが予想されている。④1985年には総世帯数の95%を占めていた貧困層も2015年には25%に減少し中間層が74%に拡大し、今後はより貧困層が減少していく。これらのことより今後インド国民は物や移動に多くのお金を使うことが予想される。

次に交通網について。今回は鉄道と自動車のみ扱った。まず鉄道について。インド国鉄の総距離はJRの3倍ほどではあるが、面積が日本の9倍近くあることからかなり疎といえる。中間層以下の国民からすると「近くに鉄道がない＝長距離移動が不可能」という状態なので、今後経済が発展し、人や物の行き交いが増えてくると沿線部と鉄道から離れている地域では収入格差が広がることが考えられる。また乗降者数が非常に多いため時間通りに運行している訳でもなく事故も多いため（年間鉄道事故死者数は約4000人超）、まだまだ安心して利用できるようにするために改善の余地はありそうだ。加えてメトロ。都市部にはメトロが敷かれ、車両はきれいで時間通りに運行されているが、やはり日本の地下鉄ほど網羅されていないので多くの人々が利用する都市中心部の駅数と路線の拡充が必要になると考えられる。

次に自動車に移る。まず道路について。どこの国に行っても道路はあり、無論インドのような大国には数えきれないほど存在する。そういうこともあってか、なかなか修復がされず悪路が多い。チェンナイはそれほどではないが、デリーでは車窓から地小さな陥没は至る所で見られた。悪路が原因での車の故障は多く、資材や商品のトラックでの輸送の際のロスが多くの会社を悩ませているようだ。また、現在はインドでは人だけでなく、車の割り込みなんて普通で車線はあってないようなものだ。その上、道には牛や犬が寝転がっていたり、物乞いや物売りが群がっているので事故が頻発する。（インドは交通事故数・死者数共に世界一位）そこで日本の自動車メーカー・スバルの衝突被害軽減ブレーキ

「EYE SIGHT」のような自動制御システムを導入するのはどうかとの話しが出た。理由としてはインドでの事故死の大半は「車対車」ではなく「車対人」であるためだ。ドライバーの目では時に前方にいる人間を認知できない場合がある。そういったときにいかにして人間を守るかということを考えるとこのシステムを利用することが一番の解決策だと感じた。

・総括

日本は交通インフラ先進国で国土面積も小さいことから人がある程度居住している地域では交通網が充実しているが、他にも様々な問題を抱え、解決することに躍起になっているインドではそうはいかない。しかし、交通インフラを整えることは他の産業に大きな影響を与えるので今後も政府は最重要課題として進めていくだろう。



分科会(チェンナイ)

作成者：石原正章

日時：08/21 17:00~21:00 08/22 17:00~21:30

グループ:Infrastructure

日本側担当者:石原正章

インド側担当者:Pranjal Paul, Suraj

トピック:インフラ~交通~

議論の目的

将来インドへの輸出が加速するであろう交通インフラ技術に対する意識、考えを考察する。

考察

チェンナイでの分科会はお互いに PowerPoint を用意し発表しそれに対する質疑応答、そしてそれからメインの骨組みである「これからの日印間における交通技術の投資のありかた」について話をもっていった。はじめに簡単に日本の道路、鉄道、航空交通網の簡単な説明を PP をつかっておこなったところインド側では特に日本の道路交通網の管理法について質問が多かった。現在日本は車両管制システムが主要な道路には整備されているが、そのシステムの解説、そしてその導入時期が 1990 年代に完成した事を告げると驚いていた。そして現在導入しようとしている「ETC2.0」について非常に興味を持たれた。ETC2.0 は新しい路車間双方向通信システムのことで従来路上に設置されたセンサーで車両の動向を管理していたのに対し、これは車両側からも直接走行情報などのデータを受け取り、よ

り正確な車両管制を可能にするものだ。インド都市部では毎日のように渋滞が発生しており、このような車両混雑緩和システムについて熱意をもって質問してきた。そもそもインドにはまだ路上にそのようなセンサーを配備するという考えがまだ浸透していないようであった。また ICT(情報通信技術)を利用するという点で IIT 学生にも魅力的にうつったようだ。

お互いに「円滑な交通網はその国の経済発展の土台となる」ということには同意見ではあった。現在インド現首相のモディ首相は経済発展の基礎固めのため交通などのインフラに多大な投資を行うことを述べているが、もしその波に乗って前述のようにまでは行かないまでも、交通管制システムを整備できればインドの交通事情は大幅に変わっていくように感じた。そして彼らはインドへもっともっと日本は投資すべきだと述べていた。それについてはコルカタの分科会で見られたような日印間の意識のずれは感じたものの、彼らのこの姿勢は日本にとってありがたいことに思えた。



分科会(チェンナイ)

作成者：平川 菜那

日時： 8/21(金)17:00～21:00 , 22(土) 17:00～21:30

トピック：経済

日本側担当者：平川菜那

インド側担当者:Yash Murty, Sachin Sanodiya

1 日目

IIT の学生とディスカッションをするということで戦々恐々としていたが、私以外の参加予定だった経済枠の IIT の学生が急遽参加できなくなった。代わりに他の IIT 生二人が経済枠のディスカッションに参加した。私のテーマはインドの貧困層についてだったので彼らとインドの貧困層について話した。IIT の学生はディスカッションの前準備はしていないわけだが、私よりも彼らの方がインド経済の実情に日々ふれているわけなので、そんな現地のインド人が感じるインドの貧困層についての事情を知ることができた。その中で議論的になったのは、まずインドの貧困層は機械化が進展していない農村部に集中していることについて。そしてレーションカードについて（インドにはレーションカードと呼ばれる貧困層が食料品や石油などの生活必需品を買うにあたって補助金を得るための証明書がある。またそのレーションカードは、政府のデータベースで管理されている。）そして MGNREGA について。（MGNREGA とはマハトマ・ガンジー国家農村雇用保証法の略で貧困農村世帯から数人を単純な土木作業などに就労させることで賃金を支払うという支援制度。しかし様々な問題が起こっている。）これらのテーマについて彼らと一緒にプレゼンを作ることになった。私自身が作っていたパワーポイントも披露した。そこで被雇用者の年間平均賃金上昇率のグラフデータの変動に不明な点があり、彼らから指摘を受け修正を行った。私自身が作っていたパワーポイントも活用しつつ、指摘を受けたデータの変動理由を明確にし、さらにそこに議論の話題になったテーマを付け加えつつパワーポイントを作成することになった。

2 日目

パワーポイントのデータ変動の理由が明らかにし、私の作っていたパワーポイントに新たなスライドを8枚付け加えた。まずはインドにおいてどのように貧困層の数が測定されているのかについてだが、2005年以前と2005年以降では貧困層の定義が異なっていることに注目し、そのことについて説明した。貧困層の定義が変わると2005年以前と2005年以降の間で貧困率を比較することはできない。下の表は年代別のインドの貧困率だが、同じ状態でも貧困率はだいぶ変わってしまう。そこで2005年以前と以降の貧困率の比較はかなり困難だと示した。

	2005 年以前の方法			2005 年以降の方法		
	農村部	都市部	総合	農村部	都市部	総合
1993～1994	37, 3	32, 4	36	50, 1	31, 8	45, 3
2004～2005	28, 3	25, 7	27, 5	41, 8	25, 7	37, 2

そしてインドの経済開放からの貧困層の減少、インド政府の貧困層をターゲットにした政策について、インドの特定の地域における貧困率の高さの理由などを新たなスライドで説明した。一人の IIT の学生は大学のミーティングがあるらしく、途中で退席したが、発表の直前にそのミーティングを抜けて来てプレゼンに参加してくれた。IIT の学生は準備にそれほど時間を割いていたようには見えなかったが、みな最後の最後まで自分の発表するパートを頭に叩き込み、自由自在に説明ができるようにしていたのに感心した。



分科会(チェンナイ)

作成者：瀬藤朋

日時：8/21(金) 17:00～21:00 , 22(土) 17:00～21:30

日本側担当者：瀬藤朋

インド側担当者：Abhishek Sharma , Rohit Janagal

トピック:宗教

目的:インド、日本の両国での宗教観やそれに付随する宗教的問題の違いおよび共通点を洗い出し、それに対する解決策を考える事で両国の理解を深める。

考察：

分科会において、両国で何らかの宗教を信仰している割合の大きな違いやその数字が意味するところを理解し、まとめることに時間を費やした。

インドでは多くの国民が自ら何らかの宗教を信仰していると認識している。その中でもヒンドゥー教がほとんどの割合を占めている。セム的宗教などは、教理に感銘をうけたなどの理由で血筋や民族関係なしに自ら入信することが認められている。しかし、ヒンドゥー教は、血筋によって受け継がれていくものである。そのため、信仰者の広がり方としては閉鎖的と言えるかもしれないが、逆に言えばヒンドゥー教の血筋であればその人も自動的にヒンドゥー教となるということなので今日のインドのように信仰者を安定的に維持できる。

(イスラム教の台頭により状況はかわりつつあるが)このような理由から、多くのインド人は「家系がヒンドゥー教だから私はヒンドゥー教の教えに従って生活している」という具合に自分が属す宗教を明確に認識している。つまり、インド人が宗教的である理由が必ずしも、信仰心が深いからということではなさようだという事である。

一方日本の統計資料では、全く宗教的ではない、というものから神道と仏教の割合をあわせて100%を超える、つまり2つの宗教を信じているのだというものまであった。議論の結果、これは意識的に何らかの宗教を信仰しているか、無意識的に日常生活で何らかの宗教的行為に及んでいるかの違いであるとの結論に至った。前者は日本では少数はであろう。しかし後者は神社へのお参りなどを含めると大多数の日本人が宗教をまたいで、行っている。このようなことから日本人は宗教的であるというよりは超自然的(スピリチュアル)な行為を日常生活に取り入れているのだと結論づけた。

宗教が生活に密着しているインドと宗教に対する認識がうすい日本でおこる宗教的問題はまったく性質のちがうものであり、原因や解決方法も正反対とっていいほど違った。

「日本人は物事の始めにいつも宗教が関わっているかもしれないとの認識を持つべきだ」という私の意見に対して、インド人メンバーが「無理な話だけど、インドでは宗教に関する認識がより薄くなれば問題はもっとシンプルになるのに」と述べていた点が非常に印象的だった。解決策については両国ともマインドセットの話題に終始していた。それを変えるための現実的な方法についてはまだまだ議論の余地があった。

先にも述べたが、全体的な感想として両国の宗教的な事情の違いについては十分に議論できた。しかし、宗教的問題の解決方法については、教育など多領域の分野が関わってくるため、議論するには十分な時間がなかったように思う。しかし、日本とインドの理解を深めるという意味では十分に良い分科会になったのではないかと思う。



分科会(チェンナイ)

作成者：田尾あずさ

日時：8/21(金) 17:00～21:00 , 22(土) 17:00～21:30

日本側担当者：田尾あずさ

インド側担当者：Nitesh, Dheeraj, Raturaj

トピック：Mixed (Religion, Infrastructure and Culture)

私たちの班は、トピックがバラバラだったため、共通点を見出すことができなかった。Niteshは世界の宗教について、Dheerajはインフラ、特に地震を感知するための新しい技術についてと、社会インフラ、特に教育についての両方を担当した。私はインドのお見合い結婚 (Arranged marriages) について考えを深めたいと思い、日本の結婚のあり方と、インドの結婚を比較しながらディスカッションを進めた。共通点は無かったが、インフラの発展→宗教の広まり→結婚の選択という流れでプレゼンテーションを作った。Raturajはプレゼンの準備と、ディスカッションのみの参加であった。

Dheerajのトピックの概要は、Disaster Managementの一環として、地震予測の技術の進展について議論した。結論としては、インドでの防災技術は発展しつつあるものの、ミクロレベルには及ばず、予測はたてられるが探知することが難しい状況にあるという。しかし、IITM(IIT Madras)の学生たちによるSAT Project (Student Satellite Project)によると、

NISAR (NASA-ISRO)により、地球上の自然現象とその変化をとらえる人工衛星が開発予定であるという。これにより、地震探知の技術の進展が見込まれるという。ちなみに ISRO は、インド宇宙研究機関のことを指す。

Nitesh は、それまで宗教について深く学んだ経験がなく、世界にはどのような宗教があるのか、また宗教とはどのような役割を果たすのかということ話をし、宗教とは何かという根本的な疑問を解決しようという目的を持っていた。まず、宗教とは、『信条、文化、そして人々をその存在に結び付ける観念の集合体である』と定義した。つまりは、宗教とは、人々の考え（信条）、慣習（文化）、生きる目的（存在）を規定するものであり、宗教が違えば食習慣や、信仰する神、物事に対する価値観（飲酒、恋愛、喫煙）などが変わってくるということである。次に彼は、インドの宗教事情について議論を展開したが、主には、インドの宗教は『寛容さと受容』ということにまとめられるという。実際に、全インド人口の 90%以上がヒンドゥー教徒である一方、残りの 10%弱はイスラム教徒、ジャイナ教徒、キリスト教徒、仏教徒、シク教徒など、多くの宗教が信仰されているというデータがある。つまり、インドでは、ヒンドゥー教徒が大多数を占める一方で、その他の宗教信者と日常的に関わりあひながら暮らしているということが最大の特徴であると述べた。また、宗教がもたらす弊害についても述べ、一部の過激派、宗教をめぐる紛争、同じ宗教間での派閥を起因とする対立を述べた。結論としては、宗教は人々の生活や考えを規定し、私たちの人間としての価値や、生きる上で信じるべき教えを与えるもので、インドは信教の自由が日常的に受け入れられている国の最大の例であるが、宗教により暴力など、人の死を巻き起こす事態が発生してしまっているとなった。

最後に、私がインドのお見合い結婚について議論した。議論のポイントは、インドでは 2015 年現在も約 90%がお見合い結婚をするという事実があるが、一方で世界各地では、結婚に関する選択肢を増やす動きが多数みられるし、恋愛結婚の割合がインドと比べて高い。これに対しインドの人々は、自国の『お見合い結婚』という慣習をどうとらえるのか、これを廃止するべきかと考えるのか、ということである。インドの外では、数か月前にアメリカ合衆国全州で、同性婚が合法化されたばかりであるし、2008 年には、イギリス、アイルランド、ウェールズでの、女兒に対する結婚の強制が違法化された。つまり、世界中で基本的な人権の大切さが認識され、結婚に関する選択の自由化が図られているのである。この様な時代の中、インドは果たして世界のトレンドに合わせ、お見合い結婚をやめるべきなのか、それとも文化の保存という観点から、お見合い結婚の慣習を残していくべきなのかという疑問を解消したかった。この議論を展開するにあたり、まずお見合い結婚という慣習の起源と、世界のお見合い結婚の割合のデータ（日本を含む）とインドのデータの比較、そして教育が結婚の選択にもたらす効果について述べた。先述のとおり、インドでは約 90%の人々が恋愛ではなくお見合いによって結婚する。日本では、40%、世界では約 50%の人々がお見合い結婚をし、インドでのお見合い結婚の割合が非常に高いことは明らかである。これについて、インドのメンバーにどう考えるかを聞いたところ、教育が広まり、またその質の向上によりおのずとお見合い結婚の数は減っていくのではないかと意見が一致した。教育により人々の視野や、職業選択の幅が広がると、結婚のあり方（恋愛なのかお見合いなのか）や、パートナーの選

択、むしろ結婚をするかしないかへの関心が高まると考えられる。さらに、主に欧米での結婚の選択はあくまで個人の自由であり、パートナーの選択も強制されるべきではないという考えも影響し、お見合い結婚の数は減っていき、恋愛結婚の数が相対的に上がるであろうと私たちは結論付けた。しかし、同時に念頭に置くべきであるのは、インドのお見合い結婚は悪ではないし、むしろお見合い結婚も、『自由な結婚』のうちの選択肢の一つとしてあるべきであるが、結婚が強制されてはならないということである。インドのお見合い結婚で問題視されていることは、親が子供の結婚相手の選択権を完全に握っており、親の決定に子供が反対することは許されないという点である。また、結婚相手を決める基準は、星座や家柄、カーストなど、当事者同士の性格や、外見の好みなどが反映されにくいことも挙げられる。このような形の、パートナーの意向が考慮されないお見合い結婚のあり方は、彼らの選択の自由という人権に違反するものとして、あってはならないとの結論に達した。お見合い結婚が完全に問題視されるべきであるということではなく、当事者の意向も考慮されるべきなのである。大切なのは、インドが完全にお見合い結婚を廃止するべきということや、欧米で恋愛結婚が主流だからといってそれを単に真似すればよいということではなく、これまでのインドのお見合い結婚を、『強制されないお見合い結婚』に変えていくべきだということである。



分科会(チェンナイ)

作成者；神作八起

日時：8/21(金)17:00～21:00, 22(土) 17:00～21:00

メンバー：Devaansh Samant, Danam. B. N. Tilak, 神作八起

トピック：日印の民主政についての意見～社会集団によるキャラクタリゼーション～

・目的

社会集団の動向という切り口で、両国の政治のキャラクタリゼーションを行う。

・議論の前提

社会集団(Social Group)とは個人もしくは組織が集合して作る集団である。全ての社会集団は、何らかの社会的、政治的な目標を持っており、それを達成するため政府や社会に訴えを行う。つまり社会集団とは、自らの主張を実現するため、政治に圧力をかけるほか、社会変化を元に戻そうと試みたり、政策に反対したりする。

社会集団は、その目的の性質の違いにより 2 種類に分かれる。1 つは、利益集団(Interest Group)であり、もう 1 つは市民団体(Citizen Group)である。利益集団は所属する個人または組織の利益を追及する。市民団体は、当該団体が考える公益に適う目標を達成しようとする。具体例としては、利益集団には各業界団体や財界 3 団体(経団連、経済同友会、日本商工会)が挙げられる。市民団体には、グリーンピース、9 条の会、在特会、沖縄県人会などが挙げられる。

・議論の過程

まず、上記社会集団の定義と、その分類、日本の具体例についてプレゼンテーションを行った。具体例として挙げた社会集団は、経団連、JA、グリーンピースジャパン、頑張り日本！全国行動委員会、拉致被害者家族会、沖縄県人会、SEALDs、在特会。

プレゼンテーションの後、インド側参加者からインドにおける社会集団を挙げてもらった。これらの具体例から、ディスカッションによって日印の社会集団のキャラクタリゼーションを行った。

・議論の結果

インド側参加者からインドにおける社会集団を挙げてもらった。これらインド側が挙げたインドにおける社会集団を表にまとめ、下の表に示す。

表 インド側が挙げたインドにおける社会集団

社会集団とその政治目標	詳細
ダム建設反対	グジャラート州等を通る河川、ナルマダー川におけるダム建設に反対する団体。

(Narmada Bachao Andolan)	
軍事特別法 AFSPA 反対	インド軍に対して「危険地帯」での特権行使(令状無しでの逮捕、武器使用等)を容認する法律に反対する運動。
反 Indira Gandhi	1975 年、非常事態宣言により野党党員を多数逮捕させた当時の首相インディラガンディーに対する反対運動。
反腐敗 (IAC: India Against Corruption)	2011 年および 2012 年の反腐敗運動において、主要な役割を果たした社会集団。
退役軍人年金問題 (Retired veterans)	インド軍退役軍人に対する年金保障制度の整備を訴える運動。

プレゼンテーションの内容および、表に示した具体例を基に、議論によって日印の社会集団の特徴づけを行った。この結果を以下に記述する。

政治に影響を与えるを試みる社会集団は、日本インドともに数多く存在することを確認した。

また、社会集団の活動方法と活動結果の成否については、日本とインドの違いがあることが分かった。活動方法については、社会への訴えかけの手段としてハンガーストライキがインドでは一般的である一方で、日本は見られないという点が異なっていた。活動結果の成否について、特に直近の問題においては、インドの成功例をすぐに挙げる事ができた一方、日本の成功例を挙げる事が出来なかった。

例えば、インドにおける直近の成功事例として、退役軍人への給付金問題がある。この問題は進行中であり、議会での法案成立も遅れているという評価を受けているが、それでもなお問題は解決に向けて前進している。一方で、日本において現在注目されている社会集団とその活動として取り上げられる問題には TPP、アメリカ軍基地移設、安全保障関連法案などが存在する。その全てにおいて、デモによる示威行動や、インターネットを利用した大衆運動化という手段は注目されるが、実際に政治に影響を与え、目的を達成しつつあるようには見えない。このように社会集団の動向において、両国の違いが存在した。

政党にとらわれない社会集団の存在感が両国ともに増大しているという意見は一致した。

・議論における結論

政治に影響を与えるを試みる社会集団は日本インドともに数多く存在する。また、社会集団の活動方法と活動結果の成否については、日印間の違いがある。さらに政党にとらわれない社会集団の存在感は、両国ともに増大している。

・議論を終えての所感

日本の社会集団が、直近で目的を達成した事例を挙げられなかった。だが、例えば5～10年前のものであれば挙げる事が出来る。東京都による尖閣諸島国有化への圧力団体の活動や、北朝鮮拉致問題の進展に対する拉致被害者家族会による働きかけなどである。

両国の歴史的な背景を考えると、インドでは、ガンジー、国民会議派主導による独立の達成、インディラガンディー独裁に対する反対運動の成功などが、社会集団の運動の顕著な成功例である一方、日本では、自由民権運動や、日米安保反対運動など顕著な成功例が見つけがたい。しかし失敗例ならすぐに思いつく。社会集団が政治に大きな影響を与えるという経験において、日印間の違いがあるのかもしれない。

・総括

ディスカッションが出来た時間は限られていたが、興味深い結論を得ることが出来た。さらに議論の内容を掘り下げたかったが、それは出来なかった。

今回は、「社会集団」という切り口で、両国の政治のキャラクター化を行ったが、以後の期では他の切り口でも特徴づけが行われることを期待する。



分科会(チェンナイ)

作成者：阿部祐三

日時：8/21(金) 17:00~21:00 , 22(土) 17:00~21:30

トピック：政治～領土問題～

・考察

チェンナイでの分科会は、IITの学生2人、日本人1名という3名のグループに別れ、2日間でディスカッションを行い、最終日に他のグループの前でプレゼンを行うといった形のものだった。私のグループは、領土問題について話あった。IITの学生はパキスタンと紛争が続いているカシミール地方を主体として、中国、スリランカとの領土問題について、私は、韓国、中国、ロシアとの領土問題について話あった。そしてお互いの国が抱える領土問題の現状について説明し、共通点や特殊な点を話し合った。インドと日本の領土問題において共通することは、領土問題の多くは、資源を巡るものであるということである。地下資源であったり、漁獲の権利であったりするものである。資源を巡る領土問題は、第二次世界大戦後、世界的な人口増加や、石油やガスなどの資源が減少してきたことが起因していると考えられる。加えて、両国の領土問題において異なる点は、宗教の対立による領土問題である。日本は、韓国、中国、ロシアに対して問題を抱えているが、どれも地下資源や漁獲減が起因している。一方、インドは、カシミール地方を巡ってパキスタンと紛争を続けているが、この争いの原因の根本はヒンドゥー教とイスラム教の宗教対立である。

以上のように、領土問題の原因は様々な要因があるが、軍事的な解決ではなく、平和的な解決策はないかとグループで話し合った。そこで、平和的解決のロールモデルとして、バングラディッシュとインドの領土問題解決が例にあがった。両国は、2015年6月に、約160あまりの飛び地の交換に合意に至った。両国の関係は、決して友好的ではなかった。バングラディッシュ独立時の背景もあり、独立当初は友好的な関係であったが、ムスリムとヒンドゥー教徒の対立がパキスタンへの編入を促した事情もあり、関係は冷却化した。しかし、国境を画定させ、両国が合意に至るまでに軍事的介入は一切なく、話し合いによる平和的な方法で領土問題を解決した。これは、インドは火力発電技術の提供、バングラディッシュはインドの貨物船が2つの港を利用することができる権利を提供し、お互いがwin-winの形で合意に至ったのである。私のグループはこのインド、バングラディッシュの解決方法をモデルとしたwin-winの関係になれることが、領土問題の解決策という結論に至った。



分科会レポート②

Kolkata

Jadavpur University

8/29, 31, 9/2

分科会(コルカタ)

作成者：中村允

日時：8/29(土) 10:30~12:30 , 31(月) 10:00~17:00 , 9/2(水) 14:00~17:00

グループ：Infrastructure

日本側担当者：中村允、仲村祐一、石原正章

インド側担当者：Sayan Roy, Maharshi Bhaduri, Shreya Bose

トピック：インフラ～防災対策～

・目的

インフラに関連した各々の 10~15 分のプレゼンを元に、両国のインフラ産業の成り立ち、発展、今後の可能性をテーブルディスカッションで検討、模索していく。

・考察

チェンナイでの分科会に引き続きコルカタでも同様のトピックを用い、新たな質問・疑問が挙がるか、また州により違った見方の考えが上がるのかを狙った。コルカタで挙げた疑問点は、災害発生時に軍が災害支援にどういった役割を果たしているかである。まず、各国の部隊の種類であるが、日本は陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の三部隊がある。インドでは陸軍、海軍、空軍のほかに Coast Guard という沿岸警備部隊が存在しインドを囲む広大な海の巡視を行っている。災害の種類に応じてそれぞれの部隊が出動・支援を展開する。例えば津波が発生した際に日本では海上自衛隊が中心となり沿岸域の行方不明者の捜索を行うが、インドでは海軍と沿岸警備隊がこれを行う。分ける必要があるのかという日本側の質問に対して、インド側メンバーは日本と比べインドは両側に隣国があり海に面している面積も広いとそれぞれ役割がありそして古くからそれは機能していると答えた。防災の観点からは外れてしまったが、日本では日本海側の沿岸部で中国、韓国との緊張状態が続いており、特に中国漁船が日本の領海付近に接近、違法に侵入し問題となっているが、航空監視や巡視船の警戒範囲、頻度が縮小されている。そういった違法行為に対する日本側の圧力が足りていない現状が伺える。

日本では防災の対策としてハザードマップやピクトグラム、非難経路板などを各自治体が設置し災害時に適切かつ迅速な非難が出来るような対策が取られているというプレゼンに対し、インドにも洪水などの災害時の被災予測図などは存在するがそこまで防災に対し徹底した対策・意識が人々に行き届いているとはいえないだろうという結論になった。また、避難場所の一つとして日本では体育館や各自治体に1つはある公民館などのパブリックな施設が挙げられるがインドではそういった施設はあまり見受けられず興味深い様子だった。両国で災害の種類は違えど自然災害の恐怖は常に付きまとう。日常レベルで少しでも災害に対する意識、警戒をすることが重要といえる。

分科会（コルカタ）

作成者：仲村 祐一

日時：09/02 14:00～14:30

（全体日程 8/29 10:00～12:00, 31 10:00～17:00, 2 14:00～17:00）

グループ：infrastructure

メンバー：Sayan Roy, Maharshi Bhaduri, 中村允, 石原正章, 仲村祐一

目的

日印両国の産業的または人的インフラストラクチャーの比較し、理解する。

考察

チェンナイでは交通インフラに絞って議論し、各システムの比較・考察した後に一つのプレゼンを作ったが、今回は各自で関心のあるテーマのプレゼンを用意した上で開始した。Sayan Roy は日印の軍事の歴史と各組織の形態や取り組み、Maharshi Bhaduri は IT 産業の仕組みとインドでの IT 産業の今後の展望、とインドで今後懸念される公害の紹介。中村は日本の防災システム、石原は日本の交通インフラ。そして僕はインドを例に取り、水道システム後進国でおこっている問題とその解決策について話した。

計 5 人のプレゼンを聞いた後、今後インドが日本の辿って来た道を後ろから後追いするような事柄や逆に日本とは違うルートでステップアップをしていく事柄が何となくではあるが分けることができた気がする。

まず日本とは異なる進み方をするのは IT や軍事ではないかと感じた。IT の分野は多くの人が知っているようにインドの主要産業である。インドは今までの先進国や発展途上国とは異なり、第三次産業で国の成長を加速させた国であるのもいえる。無論、国の成長のためには交通インフラや生活インフラ、第二次産業を充実させるためにこ入れをすることはとても重要なのでモディ政権に移行したことでこういった分野への取り組みは強化されている。Maharshi Bhaduri のプレゼンで気づいたことはアフリカ諸国や東アジアを除くアジア諸国では都市から距離のある地域での無線 LAN 網が急激に充実してきていることから今後インドのように IT による国家開発が増えるのではないかとの結論に至った。

現代では軍事は基本的には自国を防衛する役割を果たすためにあり、これはインドも日本も同じだがインドは近隣諸国との関係上身を守るために軍事大国になりつつあり、軍人数も世界 3 位、軍事費は 10 年前に比べて 15 倍ほどで世界 7 位となっている。イスラム国家や中国の圧力は増加していくのは必至なのでインドの軍需産業は拡大することが想像できた。インドに限らず世界全体で軍需産業が伸びるのは間違いないが。結論としては、多くの国では軍隊を安全保障のために配備しており、今後もそれを強化するために軍事費も増えていくということであった。

上記の 2 点とは異なり、日本と同じ道を辿るのは公害であろう。規模や規制が日本と大きく異なる理解しているが（特に公害のスケール）、日本の高度経済成長期の文献を見ると「硫酸化物やばいじん等による大気汚染によって視程は 30～50m にまで落ち込み、自

動車は日中でもライトをつけなければ運転できない状態であり、硫黄酸化物による鼻を刺すような臭いが立ちこめていたところもあった。」というものや水質汚濁がもたらす人体への影響がインドの報告とさほど違いがないような趣旨の記述があった。そこを考えると中国もインドも今後発展していくアフリカや東南アジアも日本や西欧、アメリカと同じような道を辿っていくことがわかるので前例を取り入れ、最新技術で改善するという形をとることが重要ではないかという結論に至った。

分科会(コルカタ)

作成者:石原正章

日時:09/02 15:00~15:30

(全体日程 8/29 10:00~12:00, 31 10:00~17:00, 9/2 14:00~17:00)

グループ:Infrastructure

日本側担当者:石原正章、中村充、仲村祐一

インド側担当者:Sayan Roy, Maharashi Bhuduri, Shireya Bose

トピック:インフラ~交通~

議論の目的

将来インドへの輸出が加速するであろう交通インフラ技術に対する意識、考えを考察する。

考察

コルカタでの分科会でもお互いに PowerPoint を用意し発表しそれに対する質疑応答、そしてそれからメインの骨組みである「これからの日印間における交通技術の投資のありかた」について話をもっていった。はじめに簡単に日本の道路、鉄道、航空交通網の簡単な説明を PP をつかっておこなったところインド側では特に Bullet Train、新幹線についての質問がおおくあがった。新幹線の技術は現在日本がインドへ輸出しようとしていることからタイムリーであったからのようだ。新幹線の速度、車両数、距離あたりの運賃、セキュリティチェックの有無など説明した。インドでは鉄道を利用することは可能だが、車両は古く、運行間隔が長いため一本の電車に大量のインド人が枚挙し、すし詰めドアを開けたまま運行している。ゆえに治安もいいわけではなく女性利用者は少ないのが現状である。それを解決

するためには①車両数を増やす ②運行本数を増やす ③収容可能人数の多い車両に変更するなどの対策が考えられるが、インドではそこに向けられる資本が少ないため現状改善にはいたっていない。そのようなこともありインド側では日本の交通機関の導入価格また運賃についての質問がおおかった。お互いに「円滑な交通網はその国の経済発展の土台となる」ということには同意見ではあったが、インド側では、現在の日本政府の考えと異なる、直接投資をインドで日本が行うべきであるという意見が多かった。日本では輸出した技術がその国で現地人の中で運営しまわっていくような形を望んでいるがインド人にはそのことがうまく伝わっておらず、中国などの他国と同

じように建設費(イニシャルコスト)を安く抑えることが一番大切なことであるように考えているようであった。ランニングコスト

メンテナンスコストを将来抑えるような形で輸出している日本にとってこのことは不利であると感じた。日本の技術には非常に強い関心があるものの、実際の日本側の意思を共有するのは難しいと感じた。日本もそのことを踏まえて他国の格安(に見えるだけかもしれないが...)なプランに負けない、競争力ある計画を提示していく必要があると思う。

分科会 (コルカタ)

作成者：平川 菜那

トピック：経済

メンバー：Aaina Prakash, Pubali Das, , Piyush Verma, 平川菜那

1 日目

インド側の学生 2 人がプレゼンをしてくれた。チェンナイにおけるプレゼンと異なっていたのは、コルカタのほうがより広範なテーマにおいて網羅的に、時代ごとにインドの経済がどのように変化していったかを事細かに説明をしていた点だ。そのためプレゼン時間は長く、インドについての理解が深まったように感じた。やはりインドの経済開放がインド経済を前進させたということが改めて感じられた。

2 日目

私のプレゼンを行った。インドの貧困についてのプレゼンをチェンナイと同様に行った。インド人学生にとったら日本の経済について興味があるようで多くの質問をされた。日本人の平均年収や新卒の就職率を聞かれた。しかしその数値について調べておらず答えられなかった。インド人の学生が日本の経済について興味を持っていることを考えている必要があったと思った。

3 日目

インド側の学生が 1 人プレゼンしてくれた。インドの経済格差の大きさについて考えた。今回学生会議に参加しているインドメンバーは中流階級の学生らしかった。インドの収入ピラミッドを見た場合、富裕層 (170 万ルピーより上) : 中流層 (34 万ルピー~170 万ルピー) : 下流層 (15 万ルピー~34 万ルピー) : 貧困層 (15 万ルピーより下) =3:31:71:135 ということだった。またインドにおける 1 日の収入が 1.25 ドル以下の人の人口に占める割合 33 パーセントということで、今回私たちがインドで関わり合いになった人たちがどれだけインドの中で恵まれた階層に位置しているのかということも改めて感じられた。そして彼らにとって経済格差は大きな問題のようだった。収入格差はこの 20 年近くで 2 倍に膨れたということで、やはり経済発展の恩恵を十分受けるものと恩恵を受けず、資本家に搾取されるという構造が存在しているようだった。そのような格差の是正のための解決策につい

て話しあった。情報化社会の中で、安価にネットにアクセスできる仕組みを作ることや政府のすべき格差是正の政策を考えた。

分科会：コルカタ

担当：瀬藤

インド側メンバー：Juli Nandan, Arnab Chakrabarti, Ridh Roy

トピック：宗教

目的：自分自身が考える両国の宗教的違いや問題の解決の糸口についてインド側のメンバーの意見を聞く事でさらに理解を深める。また、インドの学生の宗教にスポットをあてたプレゼンを聞き意見を出し合う事で、宗教というトピックについて新たな視点を得る。

考察：

インド側のプレゼンの主なトピックは、宗教における祭りの重要性やインドにおける宗教の多様性であった。チェンナイでは両国の核となる宗教観の違いについて議論したが、今回はインドに存在する宗教のそれぞれの教理についてや、宗教的なお祭りの違いなどより詳細なテーマに触れることができた。チェンナイでの分科会や彼らのプレゼンをうけて、とりわけ私が興味を持ったのが、インド人にとって宗教がどの程度宗教的な意味を持つかという事である。ヒन्दゥー教が血筋によって信仰されているという点で、特に若いヒन्दゥー教徒が宗教的なお祭りに参加する事や菜食主義であることが本人にとって宗教的行為であるというよりは、小さい頃からの習慣であると位置づける事ができるのではないかと考えたからである。メンバー内で話した結果、ヒन्दゥー教徒でもお祭りには楽しみだけの意味で参加しているひともいるし、菜食主義に関しても子供の頃から食べてないし親も食べないから、という人もおおいということが分かった。もちろん地域や家庭、年齢ごとに意見は違うと思うが、私はインドのヒन्दゥー教徒が必ずしも自らの宗教的行為とヒन्दゥー教の教理とを結びつけているわけではないのではないかと、という印象をもった。ただしこのことについてはまだ再考の余地がある。

私のプレゼンでは、インドの宗教的な問題（他宗教への個人から社会的な規模での差別や侮辱）について、マインドセットを良い方向に変えていくためにどのようなことが必要かをディスカッションクエスチョンとして提示した。教育環境の改善によって広い視野を身につけることが必要との結論に至った。しかし、国土が広く、民族や政治的なまとまりがないインドにおいて良い教育環境を行き渡らせるのは、まだまだ難しい。

分科会(コルカタ)

作成者:田尾あずさ

日時 : 8/29 10:00~12:00, 31 10:00~17:00, 2 14:00~17:00)

グループ : Culture

メンバー : Sohini, Barshana, Deepshaa, Ayantika and Azusa

今回は全員共通して、文化についてディスカッションを行った。Sohini は日本とインドの文化全般（結婚、お祭りとお祝い事、食、言語と文字）、Ayantika はインドの婚礼について、私はインドのお見合い結婚について引き続き議論をした。Deepsha と Barshana 二人はそれぞれ日印関係についてと、教育が日本とインドの子供たちにもたらす影響について話したが、この二つについては残念ながら私が風邪をひいたため、聞くことができなかった。インドのお見合い結婚の起源とデータ、そして現在はお見合い結婚ではなく恋愛結婚を望む人々が増えているということは、チェンナイの分科会で話した通りで、こちらでも意見が一致した。しかし、チェンナイでは私以外のメンバーが全員男性だったのに対し、今回は全員が女性であったということもあり、前回の分科会とは少々異なった結論に達し、恋愛結婚のほうが望ましいという意見がインド側で一致した。この理由について、主に2点書きたいと思う。

まず、現在でもインドでは『男性が働き、女性は家事を担当するべきだ』という考えが根強く残っているということもあり、結婚をしたら仕事をやめなければならないなどという点から、男性よりも女性にとってのほうが結婚のハードルが高いといえる。結婚をしたら、自分のやりたいことをやるという自由が奪われてしまうのである。IJSC のメンバーは皆大学または専門学校生であるから、高等教育を受けてきた学生たちである。少なくとも私の今回のグループの皆は、大学を卒業したら仕事をしたいと考えていると述べた。そのため、結婚を理由に自分のキャリアをギブアップしなければならないことに皆抵抗を感じていた。この理由から、親が決めた結婚相手は、女性が結婚後も働くということを許容してくれない可能性があり、理想的ではないとした。恋愛結婚により、女性のキャリア形成に理解のある男性を見つけるほうが、彼女たちの仕事の自由を守るうえで望ましいという結論であった。

二つ目は、インドのお見合い結婚は、当事者同士の意思が全く反映されないという点から、恋愛結婚が良いというものである。コルカタを含む都市部では、徐々に恋愛結婚も増えつつあるという話ではあったが、お見合い結婚を支持する両親のもとで育てられた子供達の多くは、同じようにお見合い結婚をするという。日本のお見合い結婚は、相手こそ両親が子供に紹介するものの、性格の不一致などを理由に子供がそれを却下することは可能である。しかし、インドでは親が紹介した相手が絶対の結婚相手で、結婚式で初めて相手の顔を見たということも珍しい話ではない。また、もし当事者同士が全くお互いを好きになれなかったとしても、離婚は社会的に許されにくいことである、インドでは親戚同士のつながりが深く、結婚に関しても当事者の意見よりも、親や親戚がどう判断するかが重んじられるため、社会的に許容されがたい離婚をするという決断を実行することも難しいの

である。よって、恋愛結婚のほうが、相手との性格の相性などを考慮に入れられるため、好ましい結婚方法であるという結論に至った。

チェンナイと比べて、コルカタでのディスカッションでは、女性の声が大きく反映された結論に至った。理由としてはやはり、インドでは結婚後は『女性として』の生き方を強いられがちであるということが挙げられると感じた。もちろん、お見合い結婚が完全に悪であるとしたわけではないが、やはり皆、恋愛結婚に憧れると言っていた。今回新たに発見できたことは、女性と男性ではお見合い結婚に対する見方が違っていたということである。チェンナイでは男性の意見しかなかったため、確かに恋愛結婚は今後インドでも増えるだろうし、結婚は強制されてはならないが、お見合い結婚も選択肢のうちにあるべきだ（あっても構わない）、という結論に至ったが、コルカタでは絶対的に恋愛結婚を支持する意見のほうが圧倒的に多かった。これは、インドではジェンダーロールという考えが強いということから起因するものなのではないかと考えられる。

分科会(コルカタ)

作成者；神作八起、阿部祐三

日時：09/02 14:00～14:30

(全体日程 8/29 10:00～12:00, 31 10:00～17:00, 2 14:00～17:00)

グループ：Politics

メンバー：Ayan Sarkar, Ishan Basu, Seshadri Mitra, 阿部祐三, 神作八起

トピック：日印の民主政についての意見～社会集団の動きと将来の行方～

・議論の目的

日印の特徴的な社会集団が、今後両国に与える影響を考察する。

・議論の前提

社会集団(Social Group)とは個人もしくは組織が集合して作る集団である。全ての社会集団は、何らかの社会的、政治的な目標を持っており、それを達成するため政府や社会に訴えを行う。つまり社会集団とは、自らの主張を実現するため、政治に圧力をかけるほか、社会変化を元に戻そうと試みたり、政策に反対したりする。

社会集団は、その目的の性質の違いにより 2 種類に分かれる。1 つは、利益集団(Interest Group)であり、もう 1 つは市民団体(Citizen Group)である。利益集団は所属する個人または組織の利益を追及する。市民団体は、当該団体が考える公益に適う目標を達成しようとする。具体例としては、利益集団には各業界団体や財界 3 団体(経団連、経済同友会、日本商工会)が挙げられる。市民団体には、グリーンピース、9 条の会、在特会、沖縄県人会などが挙げられる。

・議論の過程

まず、上記社会集団の定義と、その分類、日本とインドの具体例についてプレゼンテーションを行った。具体例として挙げた社会集団は、経団連、JA、グリーンピースジャパン、頑張り日本！全国行動委員会、拉致被害者家族会、沖縄県人会、SEALDs、在特会。インドの具体例としては、Narmada Bachao Andolan, Retired veterans, Adani Group を挙げた。

プレゼンテーションの後、次の2点について議論を行った。1つに、注目すべき団体はどれか。もう1つは、その注目すべき団体が今後、両国に与える影響について、だった。

・議論の結果

注目すべき団体として取り上げた団体は、インド側はCRY(child rights and you)、日本側は当団体：日本インド学生会議であった。

CRYは子供の保護と発達の支援のため、全インドに展開するNPOである。具体的にはストリートチルドレンや労働を強いられる子供の保護、教育を行い、文化活動のワークショップ等を開催している。ここコルカタでも活動を行っており、インド側の実行委員長はボランティアとして活動に参加している。また、インド側メンバーは総じてCRYをよく知っていることが分かった。

現在、ストリートでの生活や児童労働の環境を強いられていたとしても、子供の身体保護は違法である。そのため、今後は子供の保護を合法化できるよう法整備を働きかける活動を行うだろうという結論に至った。

日本インド学生会議は、学生という立場を生かした交流を通じての日本・インド双方の相互理解を目的とした団体である。相互理解という趣旨はインド側のメンバーもしっかり共有していることが分かった。

19年の活動の結果として、実際にインドで働く元日本側メンバー、日本の大学で学ぶ元インド側メンバー等がいることを確認した。今後は、さらに多くのメンバーが参加することによって、日印関係の強化に貢献し、また学生会議参加後も留学などの具体的な結果を出していくだろうという結論に至った。

・議論における結論

インドにおける子供の保護団体CRYは、今後子供の保護を合法化できるよう法整備を働きかける活動を行い、もって子供の権利状況を改善するだろう。

日本インド学生会議は、今後さらに多くのメンバーが参加することによって、日印関係の強化に貢献し、また学生会議参加後も留学などの具体的な結果を出していくだろう。

・議論を終えての所感

まず驚くべきことに、注目すべき社会集団として日本インド学生会議が上がったことだ。注目すべきとして選んだことには悪乗り之感があったが、今後、両国に与える影響の議論においては有益な議論ができた。一方で、団体としての課題も浮かんできた。学生会議の結果と

しての、具体的な成果の創出という点である。議論の中では、明るい見通しが出てきたが、実際に成果を出すということは常に真剣に取り組むべき事項だろう。余談だが、コルカタの公共交通従事者によるストライキのため、テーブルディスカッションの時間を大幅に削ることになった。まさに社会集団の影響である。

・総括

日本インド学生会議は実際に両国に影響を与え得る存在であることを確認した。その上で、克服すべき課題もあった。また、今後とも両国の学生同士で日本インド学生会議のあり方を考えたい。



訪問プログラム報告

Delhi

8/13 JICA 訪問、インド日本大使館訪問

8/14 三井物産訪問、日本語学校訪問

Chennai

8/19 チェンナイ総領事館訪問

日本テクノロジー訪問

8/21 JETRO 訪問

Kolkata

8/28 Destiny Foundation 訪問

8/29 コルカタ総領事館訪問

9/1 マザーハウス訪問

[訪問日時]：2015年8月13日(火)

[訪問目的]

経済成長著しいインドにおいて JICA が担っている役割を質疑しながら理解を深めていく。

[タイムテーブル]

11:00～12:30 JICA 全般の概要・支援政策説明のち質疑応答

[JICA 概要]

独立行政法人 国際協力機構(JICA)とは、平成15年に設立された世界最大規模の二国間援助機関であり、主に発展途上国への経済支援・発展に寄与することで国際協力の促進並びに国際経済の発展に資することを目的としている。JICA インド事務所では鉄道インフラ整備をはじめ、国際緊急援助隊や青年海外協力隊派遣、産業発展支援のための技術協力・ノウハウの伝授などを行っている。

[インド概要]

・インドは世界最大の貧困国であり、約12億の人口の中で貧しい人の数(定義：1日1.25ドル以下で生活している)は3億6000万人存在し、これはアフリカの貧困人口とほぼおなじ数である。電力を使用できる人の割合75%、下水道普及率35%、識字率62.5%といったこれらの数値から見ると、インフラ面での貧弱さ、教育格差などが伺える。

・

[考察]

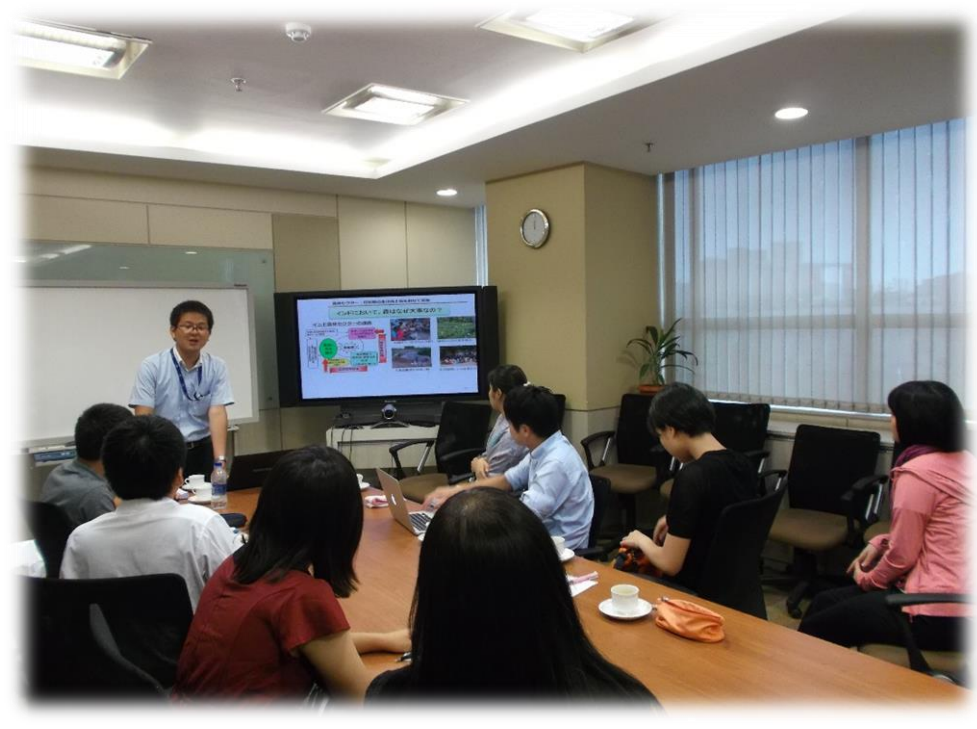
・インドにおける最大の問題点の1つにインフラの整備の遅れが挙げられる。上下水道の整備の面から見るとインド都心部でさえも、水道水が浄水場から供給される時間は1日あたり3～6時間程度といわれ、水質も日本の浄水場に送られる下水と同等の汚さである。水質悪化の原因は、常に水道管に水が流れていないため管の劣化の進行が早くなってしまうこと、改善しようにも悪質な水泥棒が多く水道代の料金を徴収できないため整備金が不足し、修理ができない悪循環が起こっている。インドの水道事業体が機能し無収水対策の重視の徹底が必要、日本の優れた技術協力の下で現地の人材育成を行うことが、こうした問題の解決につながるといえる。

・鉄道面のインフラに関してインドのデリーメトロの発展には目を見張るものがある。日本企業はインドのメトロ開発に多大な有償資金協力を行っており、日本の地下鉄と比較しても決して引けは取らないほどである。メトロ整備により自動車利用者の数を減らし交通渋

滞と大気汚染の緩和につながっている。インドの土地は広大なためまだまだ路線数を増やしていく余地があり、それに伴い日本の強みである鉄道事業の更なる技術提供の可能性は十分にある。

・医療・保健面では所得の差が顕著に表れている。インドは英語が準公用語なため英語圏の医師も集まり医師の質が非常に高く都心部の私立病院は日本と同等かそれ以上の医療サービスを受けることができる。その一方で公立病院ではそういった設備が全くいきわたっておらず、病室を犬が歩き回り、乞食が病人に寄付をもとめて群がるなど悲惨な状況である。このように公的医療に関しては脆弱な側面が露呈しており多くの貧困層にまで満遍なく医療サービスを受けられるには時間を要するとみられる。

最後に、JICAの皆様、貴重なお話をありがとうございました。



本日は JICA 訪問後、まだ気温の下がらない 16 時ごろに在インド日本国大使館に訪問した。日本国大使館はデリーの中心部近くの大使館が集まった地域に所在しており、建物や庭園などは趣向が凝らされており、日本に帰って来たかのような和様式美にはとてもなごまされた。大使館に入ったところで児玉様にお会いし、面会室にご案内していただいた。面会室へ行く途中の通路には日本の著名な芸術家の作品が展示されていた。私自身、初めて在外公館を訪れたのでとても緊張しており、コップを持つことがままならないほど震えていた。八木特命全権大使（以下八木大使）がいらっしゃるのをお待ちしている間、児玉様にインドでの生活などをお聞きした。児玉様はユーモラスな方で、ジョークをおっしゃる度に自分の緊張がほぐれてきた。そして 10 分ほど経った頃、八木大使がお見えになられた。まず八木大使が自己紹介や在インド日本大使に就任された後のご活動の内容をお話をされて、JISC メンバーの自己紹介に移った。大使にも大学生くらいのご息がいらっしゃり、この年代の若者の考えや活動などにとっても興味があるようで、私たちの話を深く耳を傾けておられた。その後、各メンバーの興味のある分野をピックアップし、掘り下げていった。例えば、自分の場合だと狩猟に興味があるので世界での狩猟の動向や日本での害獣の対策、またスポーツであるとインドに今後の娯楽の変化などについて話した。他にも様々なトピックについて八木大使にお話をしていただいたが、大使の教養の深さにはとても驚かされ、そしてそのことが今の自分にとっても刺激になったように思う。

最後に、天皇皇后両陛下が御訪印なされた際に撮影された木の前で写真を撮り、大使館訪問は終了となった。大変お忙しい中、弊団体との談話にお時間を割いていただいたことに八木大使と児玉様、そして大使館職員の方に感謝申し上げます。



●訪問日時

2015年8月14日

●訪問目的

- ・インドの三井物産の事業、日系企業の今後について、ビジネス面からの理解を深める。
- ・インドでのインフラ整備とビジネスとの関わりについて探っていく。

●当日のタイムスケジュール

10:00～12:00 三井物産デリーにて講義および質疑応答

●講義概要

インドの政治経済状況から、教育、宗教、民族情報、三井物産の事業内容に至るまで、幅広く説明をして頂いた。

・三井物産は、様々な日本の企業と提携してインドの幅広い事業に参入している。一方で、現地の企業にも積極的に投資を行っている。

・インドにはインド特有のビジネス文化があり、苦勞することもある。例えば、計画がスケジュール通りに進まない、規制が多すぎる、認許可がなかなか下りない、商談が一度で決まらない、従業員の定着率が低い、等。

・インドの輸送インフラの未整備は深刻で、州をまたいだロジスティクスが貧弱であるため、ビジネス利用要請に応えられない。

・インドに進出する日系企業は年々増加している。一方で、中国に進出している企業の数に比べれば非常に少ない。さらなる発展の可能性を秘めた国であるから、学生にはインドに来て、この国を知るべきである。

●所見

- ・三井物産が手掛けるビジネスのお話を伺い、その幅広さに魅力を感じた。
- ・インフラ整備が未発達であり、それがビジネスに少なからぬ影響を与えていることが分かった。
- ・独特の文化と、その文化に由来するビジネスの難しさがあしながら、一方で発展の可能性がある。この点がビジネスとして面白いと感じた。

●謝辞

上にあげた講義事項だけでなく、ビジネスの裏側まで様々な情報を頂きました。インドに到着して最初に訪問させて頂いたということもあり、インドを知るうえで大変参考になりました。

インド三井物産の皆さま、貴重なお時間を頂きありがとうございました。



8月14日 日本語学校の学生との交流会

担当：平川 菜那

三井物産から日本語学校に向かうために私たちは徒歩でオフィスビルである Salcon Ras Vilas を出てメトロの駅に向かった。約2キロの道のりは私にとってカルチャーショックだった。道路の脇にある雑多な人々に占拠されたごちゃごちゃした遊歩道の隙間を縫って歩いた。車の修理をする人たち、道路に迫るように作られたパンに似た食べ物の屋台、そして野良犬、あれほど大量のハエを見たのは初めてだった。待ち合わせ場所であるラジブチョーク駅で日本語学校の小森先生にお会いし、サイクルリキシャーに乗って日本語学校に向かうことになった。まさか今回の滞在中にサイクルリキシャーに乗るとは思っておらず、またデリーの道路はカオスなので生きて学校につけるのか心配になった。しかしそんな考えも単なる杞憂で、実際に乗ってみると遊園地のアトラクションのような楽しささえ感じられた。リキシャを漕ぐ人はとても痩せていたのにすごいスピードで道路を進んだ。タクシーよりも速く、風が気持ちよかった。

学校についてまずは自己紹介から始まった。デリー大学の学生や日本語学習にブランクのある主婦、ビジネスで年に一度は日本に行く若いビジネスマン、これから日本の大学に留学する予定の学生。女子学生が6人、男子学生が1人だった。皆とても朗らかな人だった。椅子を輪に並べてインド人学生と日本人学生が交互になって1対1または1対2で雑談した。インドの食べ物、日本において興味のあるもの、なぜインドに来ようと思ったのかなどについて話した。そして皆で折り紙の鶴を折った。日本人を含め半分近くの学生が苦勞していた。紙を折るという習慣のないインド人にとって、折り紙は難しいのかもしれないと思った。そのあとのブレイクタイムでは甘くて美味しいチャーエに、とっても辛いサモサ(カレー風味に味付けされたジャガイモの入った揚げ餃子)、ひよこ豆を使った甘いお団子、そしてチョコレートのお菓子を食べた。インドではすごく辛いものと、すごく甘いものを食べるのだという。

交流会のあとはインド人学生の車に乗りマーケットに連れて行ってもらった。私はとても辛いサモサと車酔いで気持ち悪くなってしまった。車を運転してくれた学生はとても礼儀の良い人で、長浜先生に対しての尊敬と信頼の態度に感心した。インドの師弟関係を大事にする文化を感じた。その学生は他のインド人学生に比べて静かな方で、とても穏やかで優しい雰囲気を醸し出していた。私はインド原産のアムラというフルーツに興味を持っていたのでそのことについて彼女に尋ねた。アムラはインド人にとって国民食らしく毎日食べているのだという。インド門の前を通過して、南下していくと道路は広く、渋滞は緩和していき、ロータリーが増え、より整備されたものになっていった。マーケットにはインドのお土産がたくさんあった。パンジャーブドレスやそれ用の布地、パール、チェスの置物などの小物、インド風の手書きの絵、それに軽食が食べられる屋台のようなものもあった。その屋台にはスパイシーウォーターと呼ばれるものがあり。神作がインド人学生と競ってどちらが多く飲めるか競っていたが、遺伝子によるものか環境によるものかインド人学生にはかなわなかった。インド人学生はとても明朗快活で日本人学生とすぐに打ち解けあい、素敵な時間を

過ごした。最後に写真撮影を行った際に、インド人学生間でカーストの違いをからかわれ、ある女学生が泣きそうになる場面があり、彼らにとってカーストはとてもセンシティブなものだと感じられた。

次に訪れたカーンマーケットでは念願のアムラを手に入れたが、乾燥したアムラにスパイスがまぶしてあり、私は少し苦手だった。マーケットを少し見学したあと、インド人学生オススメのインド料理のレストランに連れて行ってもらった。全ての料理がスパイシーでたまにとっても辛く感じられることもあったがとても美味しかった。またリプトンの紅茶も飲んだがやはりとても甘かった。とても現代的なレストランで、若く西洋的な格好をしたインド人がやってきていた。清潔感があり、三井物産からメトロに行くまでに通った道と同じ国にあるのが信じられないほどだった。

みな思い思いにインド人学生と交流をし、打ち解けあい、楽しい時間を過ごすことができた。彼らとアーグラ観光に行くのが楽しみになった。



チェンナイ領事館訪問

担当：仲村 祐一

朝 10 時に領事館到着。いざ敷地内に入ると日本庭園が広がっていた。その庭園の中で最も立派な建物に入ると馬場総領事が玄関で待っていて下さった。馬場総領事と名刺交換を交わし、いざ対談が始まった。メンバーの簡単な自己紹介の後、総領事が一人一人にコメントするといった内容だった。総領事のお話で最も印象に残ったのは、インドの今後の発展についてである。インドの強みは、人口の 7 割が 30 歳以下という労働力が豊富なところである。その多くの若者が今、教育を受け、そして社会に進出する。すると市場がより拡大し、お金がより回り、経済状況がますますよくなると丁寧に説明して下さい。しかし、経済の発展も重要だが、インドにはインフラ整備、貧困など経済成長以前の問題が多く存在している。そこで、日本からの技術や知識をインドに輸入して、経済以外の発展の手助けをしたいとおっしゃっていた。総領事のお話を聞くと、今後、日本とインドの関係が強くなり、重要なパートナーになると確信した。



本日は、日本テクノロジーを訪問し、今年入ったばかりの新入社員の方々とのディスカッションをメインに行なった。彼らは、現在3か月のトレーニング中で、日本語の学習では1か月目であった。そのため私たちは日本語でディスカッションをする組と、英語でディスカッションをする組に分かれた。私は英語でディスカッションをする組に加わったが、両国の特徴、人気のスポーツや好きな映画の話など、お互いの理解を深めるためにランダムに質問を出し合い、自由に意見を交わした。中でも面白いと感じたことは、私たち日本人の中では共通に持っていた、『インドは多様性にあふれる国』という事が、必ずしも彼らインド側にとっても事実であるという事ではないというものであった。私たちが、南インドと北インドは食文化、言語などの点で全く違う文化を持っており、互いの共通点が無いように思えるという意見を述べたとき、彼らは、同じインド国民として北や南との違いはあまり意識していないとの回答を得た。確かに、それぞれの州の文化や言語に個々に注目すると共通性が無いように思えるが、同じ国に住む人間として、彼らとしてはあまり違いに敏感ではないのかと思ひ、とても意外だった。また、社内での日本語の重要性について聞いた時も、日本語は彼らが日本テクノロジーで勤務するにあたって非常に重要と考えていると述べていたが、インドの人々が日本で活躍しようとしてくれていることに嬉しさを感じたと同時に、日本側ももっと英語教育を伸ばさなければならないと感じた。彼らは、タミル・ナードゥ州で話されているタミル語のみならず、周りの州で話されている言葉であるテルグー語などを話す人々も社内にいるため、母語と英語という2言語のみならずそのほかの言語が話せる人々もいることが普通だという。それとは対照的に、日本では長期の英語教育が行われているにも関わらず、英語を流暢に話せる人がとても少ない。もちろん、日本に進出する企業や人材が日本語を学び、それを仕事に活かすという事は大きな意味を持つと思うが、日本側ももっと英語力の養成に力を入れたらいいのではないかと思った。



[訪問日時]

8月21日

[訪問目的]

日本貿易振興機構(JETRO)がインドにおいて果たす、果たそうとしている役割について学び、インドへの日系企業進出の現状、課題を知り知識を深めていく

[JETRO 概要]

日本貿易振興機構(JETRO)は70ヶ所を超える海外事務所と本部(東京)、大阪本部、アジア経済研究所および貿易情報センターを合わせた40以上の国内拠点からなる国内外のネットワークを活用し企業と政府、企業と企業、人と人を「つなぐ力」で成長に貢献している。特に①対日直接投資の促進 ②農林水産物・食品の輸出支援 ③中小・中堅企業の海外展開の支援 ④情報提供・調査研究をつうじた企業活動や通商政策の支援 に力を入れている。

[講義・質疑応答を終えての考察]

- ・タミルナドゥ州は識字率が80%と平均より高く、主要産業は自動車関連、IT、エレクトロニクス、繊維などと非常に発展しており、南アジアのデトロイトと呼ばれ、ベトナムと同じ経済規模を持つ。
- ・インドのインフラ整備が進まないのは①モディ首相になって政策が変わったこと②政府のインフラ整備担当者が実際の“世界水準”がどのようなものかわかっていないことによるところが大きい。
- ・タミルナドゥ州には日系企業(日産、東芝、コマツ、ヤマハ、パナソニックなど)225社進出。
- ・工科大が450校もあり人材サプライヤー、大企業が集積している
- ・チェンナイ周辺には、10ヶ所の巨大工業団地と四箇所の港湾が整備されている
- ・電力は基本的にいつでも不足している。タミルナドゥ州では再生可能エネルギー(風力)が電力全体の1/3を占めていることが特徴。ゆえに工場進出の際は、自家発電の導入検討が必要不可欠。
- ・インフレがつづいており賃金上昇率は高い、今までは優秀なエンジニアは海外に流出していたが、近年は国内にとどまり働くケースも多い → 国内一部企業と海外トップ企業との賃金が変わらなくなっている。



Destiny Foundation レポート

担当：瀬藤 朋

Destiny Foundation は、人身売買をされた女の子たちの自立をサポートする NGO で、縫い物の技術や教育の機会を設けています。自立を促すやり方は一様ではないと思いますが、ここではとりわけ女の子の精神的な回復と自立に重点を置いているようでした。というのも、人身売買をされた女の子の多くは両親や親戚などの身内に売られており、買われた先では性的な虐待を受けるなどしています。身内からの裏切りと売られてからの扱いという2つの事情が重なっているため、完全に彼女たちで自立して生活するには精神的な回復が不可欠ですし、この問題を扱う上でも重要なポイントだからです。縫い物の技術を身につけ作り手として自身を得ていく女の子や、英語の読み書きを覚え今では読み書きのできない子に教えるまでになった女の子、のサクセスストーリーを話している職員の方はとても嬉しそうで、彼女達の成長や成功を心から喜んでいるのだと思いました。また、Destiny Foundation では彼女らの主体性を尊重していると言っていました。これは精神的な回復とも関連がありますが、やらされていることよりも自分がやりたいと思った事のほうに熱中でき、それに希望も見いだせます。そのような理由から、彼女らにアドバイスはするが強制はしないのだということを強調していました。

このような団体の概要をふまえて、私が思ったのは、将来的に、人身売買（とりわけ女子の）問題の根本的な解決には取り組まないのかという事です。現場でアクションを起こすのは素晴らしいことですが、罰則の厳格化や警察の取締の強化など根本的な問題を解決しないことにはいつまでも被害者は減りません。インドでは、警官の汚職の蔓延や、国と各地域とで分離された政治システムなどこの問題の他にも違うことを整備、解決していく必要があるためすぐには見通しがたっていないということも予測はしていましたが、そういう意

思はあるのか、ということについて聞いたかったので質問しました。回答は、わたしの予想の通りあまりにも遠い道のりであるためそのことは考えていないとのことでした。Destiny Foundation の考え方自体は素晴らしいので、このような NGO を通して考え方が広まり、市民の行動によって国が良い方向に変わるような状況がいつかできたらいいなと思いました。

そして、この団体と協働している日本の学生団体の方にもお話を聞く事ができました。人身売買をされた女の子の精神的な回復を目指すため、彼女らがつくったファッションアイテムを使ってファッションショーを企画しているのだそうです。「かわいくなりたい」という思いやファッションへの関心は日本もインドの共通だということに気づきこの企画をたちあげたということでしたが、このような両国の共通点から企画を発想して点は素晴らしいなと思いました。また、このような親しみやすい企画は人身売買についての議論や解決への活動をより活性化させていけると感じました。



2015年8月28日コルカタ総領事館

担当 仲村 祐一

今日から始まったコルカタでの分科会の後、正午頃に在コルカタ日本総領事館訪問した。日本側メンバー以外にもニガム先生やNKK(Nihongo Kaiwa Kyokai)先生、コルカタ側メンバーもお招きしていただいた。本会議開会式にて遠藤和巳総領事には来賓挨拶をしていただいたので、今回の訪問は2回目の面会となる。遠藤総領事はとても柔和な方でリラックスしてお話をすることができた。インドの話が中心で、多くの時間をインドの伝統的行事やインド人 IT エンジニアの世界での活躍について話をした。コルカタ側の委員長である Seshadri の開会式でのパフォーマンス（彼はこの地域の伝統舞踊の俳優だ。）が総領事に御気に召していただけただけようだ。お話の中で在日インド人は2万5千人、在インド邦人は5千人強と両国の貿易・外交が盛んになっているものの、なかなか文化交流が上手くいっ

ていないと指摘があり、在留邦人数を見る限り、日本人は駐在員としてインドでそれほど長くない期間のみ滞在するケースが多いため、インドのことを深く吸収することができないまま帰国してしまうことが原因とも考えられる。このような問題を解決するためにも、自分たちのような大学生が実体験を通してインドの魅力を伝えていく必要があると感じた。

これからコルカタではドゥルガプジャが始まる。お祭りが好きな日本人にはドゥルガプジャも含め、インド各地のお祭りを紹介することはかなり有効だと感じた。

最後に、庭園にて訪問者と総領事や秘書の方と記念撮影をし、会は終了となった。大切な休日に私たちを迎えていただいたことに感謝申し上げます。



9/1 マザーハウスレポート

担当：瀬藤

マザーハウスの施設は、死を待つ人の家や障害を持つ子供が生活する場所、孤児しているところなど10カ所に分けられており、今回私たちがボランティアしたのはプレムダンという捨てられたお年寄りや重病者が生活している施設でした。プレムダンは大きなスラムの近くにあります。マザーハウスの礼拝施設から徒歩でプレムダンに向かったのですが、初めて見るスラムの光景はあまりにも衝撃的でした。道の両脇にたまった生ゴミのにおいやそれを掘り出す人、道で水浴びをする男性、沢山のイスラム教信者などその光景は「スラムドックミリオネア」そのもので、頭では分かっていたけど実際に見てみるとインドでの貧富の差にびっくりしてしまうのだなと思いました。

ボランティアでは男女で分かれて、女性は女性、男性は男性のお世話をします。ボランティアは洗濯から始まりました。収容されている人たちの大量の服を手であらい干します。そ

のあとは、おばあちゃんたちのお話し相手になったり、マッサージをしたりします。思っていたほど重病の方はいらっしゃらず、予想に反して和気あいあいとした雰囲気だと感じました。昼食の時間になったら全員に手分けして水とご飯を提供します。食べ終わったら彼女たちがベッドに戻るのを手伝いました。ご老人のお世話をした事が無い私は、ベッドへの誘導や食事を食べさせる際に戸惑う事もありましたが段々慣れてきて、テキパキと仕事をこなせるようになったように思います。言語に関しては、英語を話せる方もいましたが、ヒンディー語で話しかけられる事の方が多かったです。大学でヒンディー語を学んでいるので簡単な質問なら分かったのですが、それ以上になると全く分からなという事が沢山あり悔しい思いをしました。インドでは英語が使えたら生活できると言われる事もありますが、もっと深くインドやインド人と関わっていくためにはヒンディー語が不可欠なのだと感じました。

今回は、世界中からボランティアをしにきた人たちを交流する会話をする機会も多くありました。彼らの多くが3週間など長期で活動しにきています。印象に残ったのは、中国人の大学生の女の子のはなしです。「ボランティアをすることはわたしにとって使命なんだ」と言っていました。また、マザーハウスのボランティアはビジネスにとりこまれていないためやることに意味があると言っていました。私はボランティアによる社会貢献についてそれほど深く考えた事が無く、今回のことも単なる経験としか思っていなかったもので、彼女の思いを聞いて身が引き締まる思いがしました。

今回マザーハウスのボランティアに参加した事、またマザーハウスへの道のりも含めて発展しつつあるインドが抱える負の側面も実際に見る機会を得ましたし、自分がどのような形で社会に貢献できるのかという事についても考える機会を得た、とても貴重な体験でした。



ホームステイ報告

Chennai 8/23~24

宿泊先 **ABK AOTS DOSOKAI 関係者宅**

Kolkata 8/29~31

宿泊先 **コルカタ 19期メンバー宅**

私たちは **Chennai** で **8/23(日)14:00～, 24(月)16:00、**
Kolkata では **8/29(土)14:00～30(日)まで、**一人につき一家庭を紹介していただき、**インドの家庭の生活を経験することが出来ました。**代表して何名かの体験記をここに記します。

8月23日(日) ホームステイ1日目 担当：神作八起

日本語会話協会(ABK-AOTS DOSOKAI)に集合し、ホームステイ先のホストの方とお会いした。自分のホストは日本語会話協会の教師であり、日本人出向者向けの事業を行う企業を経営する、Gayathri Chandrasekaran さんだ。

ホストファミリーの家に向かう前に、協会での日本語の授業があった。授業は、日本語会話協会の吉森さん、Gayathri さんで運営を行い、私は臨時教師として参加した。

一通り授業が終わった後、日本の文化に関する簡単なセッションを行った。話してみると、生徒には真面目な人もふざけた人もいて、クラスの様子は、インドと日本に差異は感じられなかった。クラスの生徒は幅広い年齢層で驚いた。12歳のサンジェナちゃんに教えて貰ったスラング”サッパーマター(超簡単)”のお返しに、「めっちゃ簡単」を教えてあげた。仲良くなれて良かった。

授業が終わった後、日本語会話協会の吉森さん、永田さんと一緒に、Gayathri さんのお宅へ向かった。家に到着すると、Gayathri さんの夫の Ajit さんが迎えてくださった。なるほど快活な Gayathri さんと優しく落ち着いた Ajit さんはお似合いの夫婦だ。

夕食はトマトベースのチリスープ(カレー)、ダルマサラ、マスタード風味のジャガイモ炒め、チリに浸ったミニマンゴー、チャパティ、自家製ヨーグルトと、たくさん食べた。感動するほど美味しかった。毎晩このようなメニューだと言うが、これが毎日食べられるなら一生ここに住みたいくらいだ。

夕食の後、皆さんにビーチ(Elliots Beach)に連れて行って頂いた。綺麗な空と海が広がっていたと言いたい所だが、暗くて何も見えなかった。ただ、涼しい海風は気持ちが良かった。

ビーチで Ajit さんとお話をした。曰く、

“If it were not to be external things, Human being’ s nature are all same”

と。これを聞いた時、これがインドで感じる親近感の理由であると直観した。インドで出会う人々に対しては不思議な親近感を感じていた。宗教も、言語も、肌の色も、食べ物も、住む場所も、外的な与件は全く異なる。でも、だからこそ共通点である人間の本質を感じることが出来たのかもしれない。だからこそ、不思議な親近感を感じていたのだろう。

Gayathri さんも名言を残してくれた。

“A good girl always gets a good boy”

どうやらこれは真実であるみたいだ。

吉森さん、永田さんとお別れをして帰宅した後、タミル映画を見て、就寝した。盛りだくさんの一日だった。



8/24（月）担当：中村允

ホームステイの別れの日、私はホームステイ先の子供2人が朝学校に行くのも気づかずベッドでぐっすりと寝てしまい、ホストファーザーのムラリさんと遅めの朝食を取った。ムラリさんの仕事の時間帯は夜のため眠いはずなのだが、私のためにチェンナイの文化についてたくさんのお話を話してくれた。午後はホストマザーのヴィジさんが教えている日本語学校へ行き、先生体験をさせてもらった。始めに準備していた折り鶴を生徒一人ずつに渡し折り紙文化を説明した。するとかれらの授業テキストには日本の文化について、折り鶴や貞子さんのイラストが載っていて驚いた。続いて「幸せなら手をたたこう」を生徒達と一緒に歌った。低学年の生徒たちが多く教室でにぎやかな声が響き渡った。私がジェスチャーも交えてへたくそに説明している間も真剣に私の話を聞いてくれる生徒たちの輝いている目が忘れられない。最後に私への質問コーナー。生徒たちは本当によく手を挙げ、英語や、ときに頑張って日本語で質問をしてくれる。彼らの学ぶことへのけなげで懸命な姿勢は私に忘れかけていた多くのものを与えてくれた。ひっきりなしに飛び交う質問時間も時間を迎えてしまいちゃんと一人一人に答えてあげられなかったのは残念だったが、ここに来て本当に良かったと心の底から思う。ホストファミリーの皆さん、短い間でしたがありがとうございました。



8/29 (土) Homestay in Kolkata Day 1 担当:仲村 祐一

今日から二泊のホームステイ！チェンナイでのホームステイは他のメンバーとは異なり、僕は現地の動植物を沢山観たり、簡易的な住居で就寝中にダニや蚊と格闘するなどいろいろな意味でインドを肌で感じる機会に恵まれたので次のホームステイも期待していた。

今日はお昼よりコルカタ総領事館にて遠藤総領事と会食があり、その後身支度をして JISC メンバーはステイ先に散っていった。僕が泊まらせていただいたのは Ayantika という女の子の家庭。彼女は昨年 IJSC (India japan student conference) メンバーとして日本に来ており、今回がこの団体 2 回目の参加とのこと。日本で体験したことを聞きながら家に連れて行ってもらう。その向かう途中でもインドの交通事情に悩まされ、2 時間ほどかかってやっとのことで到着。インドの自動車の交通システムは日本と大きく違っているためとても面白い。

家に着いてお母さんとお父さんに挨拶して、日本の紹介やこれまでのインドでの体験談を話した。インドに来てご飯を食べた（もちろんカレー）後、シャワーを浴びて就寝。明日は午前中にマーケットに連れて行ってもらい、午後はショッピングモールに行って Eco Park という大きな自然公園行くことになっている。楽しみ！！

8/30 (日) 担当：中村允

ホームステイ二日目、遅めの朝食を取りホームステイ先の IJSC メンバーの Piyush と今日の日程を組む。自宅近くからサイクルリクシャーを拾い駅に着いてからは IJSC のメンバーの Shreya、Riddhima と合流し四人での行動となりコルカタのメトロで市街地へ。ところが最初の目的地の Indian Museum がまさかの休館で少々がっかりしたものの、メンバーがしきりに謝ってくれるので気を取り直さないといけない。午後は City Mall でショッピングをして気に入ったジーンズを見つけて買ってしまった。夜は KFC でジャンクフードのディナー。コルカタに来て思うのは、ベジタリアンの人々を見ないことだ。デリーとチェンナイにいた頃は肉は食べないのはもちろん、ベジ向けのメニューがあったとしても肉を取り扱っているレストランですら入らないという人もいて文化の違いを思い知らされる。ショッピングに夢中になって帰りの時間が遅くなってしまい Shreya と Riddhima の両親を心配させてしまったのは申し訳ないと思った。インドでは女性が夜の 9 時に外を歩くのは非常に危険なことだということを認識しないといけない。Piyush が私のために色々と気を回してくれて家に着いた頃にはクタクタな顔をしていた。本当にありがとう。



開会式・閉会式の様子

8/18(火) チェンナイ本会議開会式

20(木) チェンナイ本会議閉会式

27(木) コルカタ本会議開会式

9/3(木) コルカタ本会議閉会式

8月18日 開会式レポート 担当:中村 允

チェンナイ本会議初日の今日は ABK AOTS DOSOKAI にて行われる本会議開会式を控えていた。開会式ではよさこい鳴子踊りを披露する予定だったので会場に向かう前に慣れない着物を準備するメンバーたち。開会式会場となった部屋には大きな大弾幕が貼られていてよいよチェンナイでの本会議がスタートするんだという気持ちになるとともに、チェンナイの皆さんの歓迎ムードを感じた。Vice President のスリラム氏、JISC 創設者の長浜先生と挨拶が続き、かなり緊張の面持ちの委員長の仲村のスピーチ。立派に役目を果たしてくれたと思う。づづいて私たちの挨拶代わりによさこい鳴子踊り。なかなか全員が集まる時間が無かったが渡印前とデリーにて練習を重ねてきた。緊張もあってか、お世辞にも上手といえる動きではなかったが笑顔は絶やさず踊れたと思う。初めて日本の伝統的な踊りを見るのか参加者の方々は携帯を取り出し撮影。センターで踊っていた私はどうだといわんばかりに躍って見せたが他のメンバーはどうだったであろうか・・・

乾杯してからは終始和やかなムードで会は進んだ。インドに来てからというもの、名刺交換が緊張してぎこちなくなってしまう。本当にいい経験だ。会にはチェンナイでの分科会の IITM の学生も来ていて、挨拶を交わし楽しんだ。最後に分科会の打ち合わせを行ったときは真剣な表情で当日の進め方などをコーディネーターの Vehda さんを介し入念にチェック。楽しみと不安でいっぱいだが彼らとの分科会をするためにここに来たので、必ず充実させたものにしたい。



8月25日 閉会式レポート 担当：平川 菜那

チェンナイの自然植物園を出発し、インド側のメンバーと一緒に植物園に行ったシュッティのバイクの後ろに乗って、日本語学校である ABK に送ってもらった。日本人メンバーはみな充実したホームステイ経験ができたようで、閉会式までの時間をお世話になったインド側メンバーとのおしゃべりに費やした。日本人メンバーの阿部がホームステイでお世話になり、また日本人メンバーの充実したチェンナイ滞在のために尽力してくださったスリナムさんが閉会式の部屋に来られた。

机をくっつけて、私たち日本人はチェンナイ生活の感想、そしてチェンナイ側と日本側で今回の学生会議のために行ってきた準備の段階、そしてチェンナイ滞在中においての問題点は何かあったかと聞かれた。

まず、チェンナイでの生活の感想の概観について書きたいと思う。インドの秀才が集まるインド工科大学の学生たちとの有意義なディスカッションや、チェンナイの家庭を体験し、よい友達のできたホームステイ、有名な遺跡であるバターボールやビーチ、ヒンデュー教の寺院などインド側の計画でさまざまな場所に連れて行っていただいた。そのためタイムスケジュールも密度が濃くしっかりと組まれていた。ディスカッションの準備などで一部のプランがなくなったこともあったが、私としてはチェンナイのいろいろな場所に行けたことで、チェンナイの多様な一面を見ることができてとても良かったと思う。ヒンデュー教の寺院においては、女性と男性の扱いの違いを垣間見た。南インドの地方を再現し紹介する遺跡では地方による特徴の違いも学ぶことができた。インド工科大学の学生とのディスカッション、交流においては彼らの多才ぶりに感化されたこともあった。そのような特別な経験に加え、チェンナイの穏やかな民族性や、穏やかな気候、食事のおいしさや、物価の安さ、デリーよりも街が整備されているというような印象を受け、日本人メンバーはみなチェンナイについてとてもよい印象を持ったようだった。

そして、学生会議のために行ってきた準備の段階、そしてチェンナイ滞在中においての問題点についてだが、みなチェンナイ側と日本側の意思疎通が準備段階においてうまく取られておらず、それは準備開始の時期が遅かったことに原因があると考えていた。またチェンナイ滞在中においてはほとんどの移動が貸切バスによるものだったので、貸切バスだけではなく、さまざまな交通手段を使いたかったと考える日本人メンバーもいた。みなが感じていた良かった点、悪かった点をこれからの学生会議に活用していこうと思う。

日本人メンバーの感想発表の後は ABK から今回の学生会議からの修了証を一人一人手渡しでいただき、閉会式は幕を閉じた。

閉会式の後には出席メンバーで ABK の入っているビルから歩いて数分のピザハットで夕ご飯を食べた。とても楽しい時間だった。一部のインド人とは翌日の出発時には会えないということで、彼らとお別れをして帰路についた。今回のチェンナイ滞在中のプランを考え、いつも日本人メンバーと行動を共にしてサポートしてくださったヴェーダさんは翌日の出発には来られないということだった。その理由が、日本人メンバーに別れをいうのが寂しい、

というものだったのが心にしみた。スリラムさん、ヴェーダさんをはじめ、チェンナイでは本当にたくさんの人のサポートを受け有意義な時間を過ごせたことを有り難く思う。



8月27日 コルカタ開会式 担当：神作八起

フォーマルを着用して開会式の会場となる大学(Jadavpur University)へ向かった。大学に到着して暫くの間、インド側メンバーと談笑した。構内を少し散歩して、会場でのリハーサルを始めた。

リハーサルを始めようとした所、持参したダンス楽曲 CD の読み込みに失敗して、どうにも立ち行かなくなってしまった。仕方なくホテルに戻り、USB フラッシュメモリへデータを移行して、何とか読み込みに成功。

宿舎へ戻る時、インド側メンバーであるイーシャン(Ishan Basu)が付いてきてくれた。イーシャンは日本開催の18期にも参加したメンバーだ。開会式の開始時間が迫っていたが、宿舎へ向かうリキシャの中では、18期の時の話に花が咲いた。このように期をまたがって、活動を継続するメンバーがいることに感動するとともに、19期からも20期に繋がりたいと感じた。

リハーサルも問題無く終わり、開場と共に挨拶に回った。在コルカタ日本国総領事館の遠藤和巳 総領事や錚々たるゲストの方々と挨拶し、気が引き締まる。そして、なんと間の悪いことに、開会式で使用していた大学備え付けのラップトップが動作を停止した。

懸命の復旧作業にも関わらず、ラップトップは不調のまま。これに依拠していたダンス・歌の音源を何とか用意して、再生する作業は困難を極めた。楽曲ごとに会場の皆様をお待たせしてしまった。非常に申し訳ない。

最後にコルカタにいらしていた和太鼓奏者の方に、10分ほどの太鼓演奏をして頂いた。素晴らしい演奏だった。

今日出会ったばかりのインド側、日本側メンバーは、舞台裏で予想だにしない修羅場をくぐっていた。しかしその分仲良くなれたかもしれない。

9月3日コルカタ 閉会式 担当：阿部 祐三

コルカタ分科会の閉会式は、ニガム先生のご自宅で行われた。広くて装飾が素敵なリビングで、日印の学生と関係者が集まり、閉会式は表彰状の授与から始まった。一人一人の学生が名前を呼ばれ、表彰状を受け取ったあと、1分間のスピーチを行った。そのスピーチの中で私が感じたことは、日本人メンバーの英語のスピーチの上達である。インド生活の中で常に英語をしようしていたということもあるが、各都市での分科会を経験し、自分の意見をいうことに対して自信がついたのではないだろうか。1分間という短さの中で、内容がしっかりしていて、恥ずかしがらず、ハキハキとしゃべり、同じ日本人メンバーの一員として誇らしかつた。多くのスピーチの中でもニガム先生のお話がとても印象に残っている。先生は日印学生会議の重要性についてお話して下さった。JISCは学生主体の団体であるため、直接社会に影響を与えることは少ない。しかし、将来の日印関係を考えると、学生のうちから両国の文化や社会を理解すること、また友人を持つ事は本当に価値があることだと先生はおっしゃっていた。先生のおっしゃっていることはまさにその通りであり、今後もJISCの活動を続けていきたいと思った。

日印学生のスピーチが終わると、立食をしながらの最後の交流会が始まった。話しをしたり、ダンスをしたりなど、インド最後の夜を最高な形で締めくくった。



《参加証》



The 19th India - Japan Students' Conference 2015

Organised by :
NIHONGO KAIWA KYOOKAI SOCIETY

Supported by :
The Consulate General of Japan in Kolkata

This is to certify that Mr/Ms. *Mitsuru Nakamura*..... who is a Student of *Science & Technology*..... Department, *Nihon*..... University of Japan / India has participated in the 19th India Japan Students' Conference held in Kolkata, India from 27th August to 3rd September, 2015 as..... *Public Information*..... of the Japanese / Indian Students' Team.

Date *3rd September, 2015*

Kolkata, India

M. Morita
MAIKO MORITA

Vice - Consul
Consulate General of Japan in Kolkata

J. Saha

JAYANTA KUMAR SAHA
President
Nibongo Kaiwa Kyookai Society

Kazuko Nigam

KAZUKO NIGAM
Chief Patron
Nibongo Kaiwa Kyookai Society



We are cordially inviting you to the Inauguration Ceremony of



19th INDIA JAPAN STUDENTS' CONFERENCE

Chief Guest: *Professor Dr. Ms. Lipi Ghosh*
Director, Centre for South & South East Asian Studies, University of Calcutta

Guest of Honor: *Mr. Kazumi Endo*
Consul General of Japan in Kolkata

Organized by: NIHONGO KAIWA KYOOKAI SOCIETY
Supported by: CONSULATE GENERAL OF JAPAN IN KOLKATA

On 27th August 2015

At Dr. Triguna Sen Auditorium, Jadavpur University (Gate No.3)

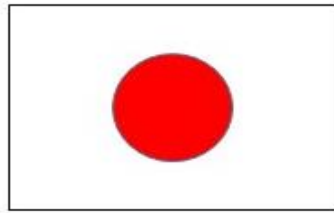
At 6 p.m.



<第四部>

個人語録

《実行委員個人エッセイ》



日本に帰って来てある程度の月日が流れたが、未だにあの埃っぽい道や古い電車で感じた暖かい風、エネルギーあふれるインド人が忘れることができない。同意してくれる人は少ないかも知れないが、インドって「ラーメン二郎」のようなものだと思っている。消化できないほど多くのものを提供し、コンプリートした後はあまりのキツさにもう行きたくないと思ってしまう。だけど少し時間を置くと不思議とまた行ってみたいくなる。インド 25 日間の滞在は少し自分には充分過ぎたので帰国してから 1,2 週間は残り少ない夏休みを使い、色々な体験をした。その間は「日本はやっぱりいいなー」と思っていたが、元の余裕のある生活に戻ってみると刺激が無く虚無感を感じ、その感情と一緒にまたインドに行きたい欲がわき上がって来た。

訪印中はメインの分科会以外にもホームステイや観光、企業訪問などを行った。中でもホームステイではツアーではできないような貴重な体験ができた。今まではインドの実態については本や映画など 2 次情報を通して知ってはいたが、百聞一見にしかず、近くのマーケットで鳥の解体や意図的に不自由にされた物乞いの方を見たときは驚き色々と考えさせられた。その他ホームステイの際には怪しげな果物屋で水道水を使ったフルーツジュースを飲んだことや夜中蚊とダニと格闘して寝られなかったこともいい思い出だ。(その日はダニと蚊に合わせて 60 ヶ所ほど刺された)

最後に。インドは日本と様々な面でギャップがあるため再訪については賛否両論である。水や食事が衛生的ではないとか犯罪や感染症が不安だとか人が多くて疲れるだとか色々ネガティブな意見を言う人も多い。でも日本には無い人間らしい場所でもあるので僕はまた行きたいと思う。今回は 3 都市にしか行っていないが生活慣習が地域によって大きく異なることがわかった。少しインターネットでインドを調べただけで面白そうところが沢山出てくる。まだまだ見るべきところは沢山ありそうだ。インドに対して好意的な考えをもち、また行きたいと思わせてくれたのは今回活動に携わって下さった多くの方のお陰だと思います。本当にありがとうございました。

インドの感想を書こうとしても、なかなか文章に起こしづらい。インドでの経験は、体で感じた体験の方が多いし、インドという国は、1つの国という概念では説明できないからである。私たち日本人メンバーは、約1ヶ月の期間の中で、北のデリー、南のチェンナイ、東のコルカタと3つの都市を巡った。3つの都市、と書いたが、3つの国とも言えるだろう。なぜなら、言語、食文化、肌の色などすべての部分が3つの都市で異なっていたからである。公用語はヒンディー語となっているが、公用語が通用するのは首都であるデリーだけである。この不思議な国、インドで私は多くのことを学んだ。もっとも感じたのは、自分がいかに恵まれた環境で育っていたかということである。南の都市、チェンナイに訪れた時である。分科会が開催され、IIT(インド工科大学)の学生と3日間にわたって討論を重ねた。IITの学生は、インドの中では当然、世界的にみてもエリート学生である。しかし、かといって彼らの暮らしが裕福というわけではなかった。むしろ苦学生という印象を強くうけた。ITのスペシャリストである彼らが使うパソコンは、型の古い分厚いものであったり、家に電気が安定的に供給されないために大学で充電を行ったりなどの状況であった。日本の有名大学に通っている学生は、統計的にみても裕福な家庭が多い。しかし、インドではそのようなことはなく、むしろ貧しい家庭で育った学生の方が多い。どんなに貧しい環境でも、必死に勉強して将来のために大学に入るという意識がとても強く感じられた。

インドは別次元の環境であった。まさに、テレビや雑誌でみたような混沌とした環境である。夜は歩けない、いつでも物乞いに声をかけられる、水は飲めないという日本では想像もできないことだらけである。しかし、日本と共通していることもある。それは人の温かさである。今でも鮮明に記憶に残っているのは、デリーの地下鉄で迷っているときのことである。乗り換えをしなければいけないとき、我々日本人メンバーは迷い、地図を広げていた。すると、声もかけていないのに多くのインド人が我々に話しかけてきて道を示してくれた。困った顔をしていたから、声をかけて助けにきてくれたのである。インド人と日本人が共通していることは、家族、友人、年上に対して尊敬という念をもって行動していることである。

インドから帰国して二ヶ月が経過した。24 日間にわたるインドでの本会議は毎日新しい発見・出会いにあふれ、人生の中でも強烈な一ページになるものだった。JISC19 期のメンバーはみな、海外留学経験者や多くの国を訪れたメンバー揃いだ。そんな中一週間にも満たない小旅行を経験したのみである私にとって、今回の渡印が私にとっては初めての「長期滞在」であった。正直、渡印前は不安だらけの日々を過ごしていたが、帰国した今になって思うことは、過去の海外経験の経験地は関係なく、楽しんだ者勝ちであるということだ。私はメンバーの中でも一番インドを満喫できたのではないかと自称している。

私は日本とインドは近そうで遠い国と捉えている。例えば、テレビ番組や CM、インターネットで真っ先に紹介される海外旅行先はハワイ、韓国、台湾などであり、芸能人やコメディアンがグルメや観光スポットをリポートし行きたい気持ちをそそる。インドはどうか。同じアジア圏の国ではあるが先に述べた国々よりは紹介の頻度は少なく、代わりによく目にするのが海外旅行者の被害、殺人などネガティブなものが多いと感じる。渡印前に両親や友人から言われたのはやはり「危ない」、「気をつけて」といったマイナス発言ばかりだ。多くの方はインドに対してそういったステレオタイプを持ってしまっているのを否定できない。私はそれが少し悔しい。だから今はインドの良さを周りの人たちに伝えている。それは実際にインドに足を運び、肌で感じ、インドが大好きになって帰ってきた私だからこそ出来ることだ。

インド滞在で何が良かったのか。一つは自分を表現できる場がたくさんあった事だと思う。チェンナイでのホームステイ先のホストマザーが日本語の先生をしていて、彼女の 2 人の小学生の子供を含め 20 人ほどの生徒を持っていた。そこで私は彼女に連れられ子供たちの「1 日日本人先生」になったのだ。子供たちの前に立ち、急に「歌ってよ」と言われて、日本だと恥ずかしく断ってしまうだろうが、ここはインドであり日本と違いあまり人前を気にしないでいい。日本語で「幸せなら手をたたこう」をアカペラで歌う。顔を真っ赤にさせながら歌いきって教室中にドッと拍手が起こり子供たちに一緒に歌いたいから教えて教えてとせがまれる。自分を誰かに表現することがこんなに楽しいのかと思った。コルカタでは、宿泊先のラマクリシュナミッションに併設する建物で夜に同じく日本語学校が開かれていた。分科会のコルカタ側の何名かは大学に通いながらこの教室で日本語も学んでいることを知った私は見学させて欲しいとお願いし、メンバーが夜食をとる間、一人で授業にお邪魔させてもらった。生徒は学生から社会人、主婦まで年齢層も職種もバラバラ。コルカタ側のメンバーも含め日本へ一度も行ったことがない彼らにとって私は遠い異国の地から来た外国人である。普段彼らを教えてくれる先生に代わり教壇に立ち日本の紙幣と描かれている人物について紹介した。穴の開いた 50 円玉や透かしてみると様々な模様が見える紙幣、目を輝かせて色々な質問をぶつけてくる。この頃にはどうやら私は「自分というものを知ってほしい欲」が自然と出てきたのではないかと思う。

日本にいた頃は周囲と同調したり何か人と違ったことをすることに無意識にブレーキがかかっていた自分がいたかもしれない。インドではたくさん歌を歌い、ダンスを一緒に踊っ

たりした。インド人の持ち前の明るさと積極性が自分を表現する大切さに気づかせてくれたのである。

「ありの～ままの～♪ 姿見せるのよ～♪」

インドから大事なことを持ち帰ってきた私は、日本で大流行したこの歌詞のままになっている気がする。

初めに、19期の実行委員として活動を振り返りたいと思います。2015年4月に初めて19期のメンバーと顔合わせをし、私の活動は始まりました。ここまでの活動を振り返ると、反省すべき点は多くあります。4月に、18期以前の報告書を見たときの第一印象は、「魅力的な団体だな」と「同じ失敗を繰り返しているな」でした。率直に言って、19期も同じような活動をしてきました。インド滞在中は、刺激的で魅力的な活動を出来ました。でも、準備活動や帰国後の報告活動の内容は、お世辞にも褒められたものではありません。やるべきことをぐずぐず引き延ばしていました。非常に反省しています。反省の結果として、私たちは20期以降に向けた引継ぎ資料を充実させました。記念すべき日本インド学生会議20期の活動が成功しますよう、願って止みません。

次に、1人のJISCメンバーである私個人として、活動を振り返りたいと思います。2015年3月末、中国上海での1か月の滞在から帰ってきた私は、次にやるべきことを探していました。中国での滞在を終え、さらに新興国であるインドを見てみたい。その時に見つけたことが、この団体での活動だったのです。活動を始めるにあたって、漠然とした目標を持っていました。それは「ただの旅行では体験できないインドでの滞在生活を楽しむ」です。いま、インドでの滞在中を振り返ると、この目標を達成して余りあるような、刺激的で魅力的な1か月間だった、と感じています。日本、インドのJISCメンバー、中村上人、八木大使閣下、Ashok K. Chawla氏など様々な人との出会いがありました。ビジネスマンとして、外交官として、教師として、様々な形でインドに関わる日本人たち。通訳として、日本語学習者として、様々な形で日本に関わるインド人たち。そして、学生たち。全ての出会いが刺激的でした。

人との出会いの度に感じていたことがあります。それは、人と人との繋がりのおかげです。なぜなら、JISCの活動は、現地のカウンターパート、協力して頂ける方々、そして何より参加者の学生たち、人と人の繋がりによって初めて達成されるからです。この出会いと、その思い出は、私の一生の財産になると思います。

さいごに、この拙文を読んでいる20期以降の方々に伝えたいことがあります。インドを訪れるのは、JISCでの活動が初めてになるのでしょうか。それが初めてであれ、何回目であれ、この活動は最も刺激的で、学ぶことの多いものとなると思います。準備をしっかりと、滞在中は出来るだけのことを吸収して、この経験を素晴らしいものにして下さい。

不思議な親近感を感じる国との関わり、日印関係へ貢献できることを願って。

中学生の時にヒンディー映画を観て以来、インドの鮮やかで多様な文化に強く惹かれてきました。この活動で渡印するまで、渡印未経験ながら自身でリサーチするなどしてインドとはどのような国なのか？ということを考えていました。しかし、渡印前まではインドはあくまで、未知の国であり、インドに行けば何かすごいことがあって、何かが劇的に変わってしまうのではなかろうか、という期待も多少なりとも持っていました。インドへの視点として多少歪んでいることも自覚していましたが、渡印経験のない私はこのようにインドを未知の国として、想像力をふくらませつつ遠くから眺めることしかできないでいました。しかし、日本インド学生会議に参加し、インドを訪問したことで私とインドとの距離は幾分か近くなったように思います。特に、インド人学生との交流、たとえば分科会で真剣に議論したり、楽しく騒いだり、というような経験により、インドについて考える際の、精神的により近くに寄りそった視点を得ることができたように思います。学生団体に参加せずに、ただの旅行として行っていれば、インド人とのここまで深い交流はできなかつたでしょうし、旅行から帰ってもそのような新しい視点は得ることができなかつたでしょう。

私の知り合いに、何度もインドを旅行した方がいらっしゃいます。私がインドから帰国した後、その方とお話する機会があったのですが、彼は「インド人は信用できないし、ひどい目に沢山遭った。インドも日本と比べると大変なことがたくさんある。」とおっしゃっていました。どのような国にも言えることですが、インドという国、人をどうとらえるか、は人によって様々です。インフラや教育等の発展度の違い、文化的側面によって、インドやインド人のことをネガティブにとらえる方もいるでしょうし、インド旅行においては帰国後、そのような理由での苦労話で盛り上がることも多くの日本人に一種の楽しみごとのようになっているかもしれません。私は、今回の渡印で何かひどく嫌だったことや苦労したことはひとつもありませんでした。インドに暮らす様々な方の協力のもとに、毎日貴重な経験をさせていただいていましたし、かかわっていただいたインド人の方も皆素晴らしい方でした。だからこそ、先に述べたような精神的距離の変化があったのだと思います。JISCで経験し、知ったこと、感じたことはインドのごく一部分でしかありませんが、少なくとも私はこのようにインドで毎日信じられないほど楽しく過ごせたということや帰国後、インドと日本との様々な側面での違いやそこで生きる人たちを手放しで、愛おしく美しいと思えるようになってしまったことをとても幸せに思います。

最後に、日本インド学生会議に関わっていただいたすべての方にこの場を借りて御礼申し上げます。この団体が、これからも皆様のサポートを得ながらより多くの学生に素晴らしい経験を与え続けることを願って。

今期のインド開催で改めて学んだことは、新しい人と出会うことがいかに大切で、楽しく、そして自分にとって宝物となるかということである。私は、留学より日本に帰国した直後の今年7月から、留学で学んだ『新しい人に出会い、話し、視野を広げる楽しさ』を追求し行動に移したいと思い、日本インド学生会議に加わった。その中でもディスカッションとホームステイでは、同年代の学生たちからの生の声を聞くことで、インドのカースト制度、女性に関する事情、教育、結婚観についてとても実りある議論をすることができた点で大変思い出深く、日本のメディアや机上の勉強では得られないインドを知ることができた。ディスカッションでは、わたしの興味があったインドのお見合い結婚についてフランクな意見交換ができたし、ホームステイでは自国のものとは違う文化に触れ、新しい価値観に浸ることで、そこに住む友達が日々どのような世界を見て、どのような考えをしているのかを垣間見ることができ、新鮮で刺激的で濃密であった。こんな考え方もあるのか、こんな習慣もあるのかと、それまで知らなかったことを知ると、自分と異なる背景を持つ人々への敬意が芽生える。そして、自分の持っていない価値観を持つ人々を理解しようとするようになるし、新しく知った物事についてより深く探求することで、視野が広がる楽しさを味わえる。やはり、新しい人と出会うことはこの点で、自分の見識の成長にもつながるのだと再確認した。JISCの活動は、私たちと同年代の学生たちとのディスカッションという時間が多く取られているため、気軽に話しやすく距離もすぐに縮まり、多くの事柄について意見交換ができた。私がインドに行くのはこれが3度目だったが、今回でようやくインドがどのような国なのかを、メディアの情報や偏見・固定観念にとらわれずに学べたように思う。

私の最も好きな都市は、今回初めて訪れたチェンナイである。南インドの人々は、北の人々よりも、食習慣、宗教に対する熱意、結婚観といった伝統を重んじていると感じた。例えば、タミルナードゥ州のタミルブラフマンは、厳しく菜食主義を守っている人が多くいたり、ほとんどの場合食事は手を使い、お見合い結婚が主流であったりといったことである。ヒन्दゥー教寺院も、少なくともデリーよりも有名どころが多いと感じた。私には、これらの点が日本と大きく違い、『インド固有の文化』としてより強調され大変面白く、魅力的に感じられたし、何よりも現地の人々が自分たちの伝統と習慣を大切にしていることが印象的であった。また、チェンナイでは北と比べ人も穏やかで、雰囲気もゆったりとしていたことがとても好きである。私は北インドばかりを回っていたため、今度は南インドについてもよく知りたいと思わせてくれたきっかけであった。

今回のインド開催で学んだことは他にも数え切れないほどあるが、自分自身にとって最も大切にしたいと感じられたことと、思い出深かったものが以上のことである。この場を借りて、19期のインド開催に携わってくださったすべての方々へ、本当にご協力ありがとうございました！

jisc19 期に参加する前と後での、私のなかでの最大の変化を考えてみた。初めてのインド滞在で治安的に不安だったこと、インドの優秀な大学生たちとのディスカッションが不安だったこと、そんな不安なことが多かったなかで私に勇気を与えてくれたのは jisc のメンバーだったことを思い返した。だから私のなかでの最大の変化であり、宝物は jisc のメンバーだ。彼らとインドを回った 3 週間、インドでたくさんのことを経験させてもらった。まずは空港からブッディスト・センターに向かうまでのそれまで想像することさえできなかったほどの渋滞、そしてセンターのユニークな和尚さんとの出会い、デリーの日本語学校の生徒と交流し、ある生徒の目上の人を敬う姿勢を垣間見たこと……。ホームステイもディスカッションもあって全てを書くことはできないが、本当に密度の濃い 3 週間を jisc のメンバーと共に過ごした。私と同じようなカルチャーショックを経験したり、インドで出会った人たちの純粹でまっすぐな姿勢に心惹かれたり、jisc のメンバーもそれぞれ私と同じようにたくさんの素敵な経験をしたと思う。そんな経験、特にインドの人たちとの心からの交流、心のふれあいを今期の jisc のメンバーと共に分かち合うことで深い絆が生まれているような気がして私はとても幸せだ。

私が jisc に参加するのが決まったのは 7 月という本当に出発直前のことで出発前に jisc のメンバーと直接会って話をすることはできず、成田空港で初めてメンバーと会った。その出会いというのも本当に幸運で、初めて言葉を交わした時から、この子たちとなら本当に仲良くなれそうだ、と直感的に思った。インドでは、本当にこの前会ったばかりの人なのかと思うほど、打ち解けあい、今の自分のこと、将来の自分についてさらけ出した。出発前は宝物になるような友人が生まれるなんて考えてもみななかった。インドで出会った同世代の人たちと交流して、やはり日本で生まれ育った私たちの習慣と様子が違うなと思うことが多くあった。その態度の違いへの戸惑いをメンバーと語り合い、一つ一つの問題に対処し、インド側のメンバーに自分の本心をまっすぐに伝えていく、そういった経験の中で日本では絶対に生まれないだろう、強くて、深い絆で結ばれた友人を作れたことが本当に私は嬉しい。

私に、こんな人生を変えたと言える素晴らしい出会いと経験をさせてくれた、すべての援助者の方に心からお礼を言わせていただきたい。そして、今後もこの活動が続き、私と同じような素晴らしい出会いと経験をたくさんの後輩にしてもらいたいと、心から願っている。

「インドに行くだけで人生なんて変わらんやろ」巷にはインド関連の書籍、ブログなどでこれと間逆のフレーズが溢れていたが、それが自分の渡印前の考えであった。しかしインドで本当の格差に触れさまざまな人種、宗教、文化入り混じる環境で過ごした結果、この言葉はひっくりかえることになる。

私たちはこの本会議でデリー、チェンナイ、コルカタを訪れた。各都市はそれぞれまったく異なる雰囲気、食文化を持っておりインドという国の奥深さをもっていた。心に残ったのはデリーでアショク・チャウラ先生に言われた「インドは民族、宗教、食文化、すべてが異なっている地域があつまっている、その中で何がインド人同士を結びつけ、ひとつの国家としているのか考えてみてください」という問いだ。はじめのデリーでこの問いを受けて以来、インド滞在中にずっとそのことを考え、逆にインド人に問うてみたりもした。しかし答えもバラバラでなおさらこのことについて深く考えることとなった。

さらに前述のことに加えインドで体感した、人々のすさまじい経済格差などの要因もさらにこの問いの答えを探すことを難しくさせた。だがこの答えを探そうとする行為が漫然とインド滞在を過ごそうとしていたかもしれない私が、インドの姿、ひいては日本とインドの違いについて考えるよい機会となった。インドの方は言う「インド人にとって日本人は他国の人という意識はあまりないよ」と。ほぼ単一民族国家に生まれ育った私がこのことを理解するのは難しかった、ヒンドゥー教と仏教が近いというものもあるだろうしかしそれだけではないこともわかる。インド滞在中にこのようなことを意識しながらインドの人々に触れているとだんだんインドの人たちが好きになった。日本で手に入る旅行のガイドブックには何十何百ものインドでのトラブルの経験が載っている、実際私も JISC での役職が財務なこともあって身構えていた節もある。しかし自分で観光地に集まってきているインド人以外のインドの人に触れる機会がとてもあったのは JISC ならではであると思う。後悔があるとすれば自分たちの調整ミス、さまざまな遅れのせいで各方面のお世話になった方々に迷惑をかけてしまったことだ。来年度の 20 周年に向けてこのことを繰り返さないようにしたい。本当に JISC の活動を通してあったインドの方は本当にいい人たちばかりで感謝をのべても伝えきれない。今後も日本に懲り固まるインドへのある種の誤解が紐解ければと願う。私の中のチャウラ先生からの質問の答えは私の中でいまだこれだ！というものは見つかっていない、どうしてもさまざまな要因の中でこれは違うとなってしまう。今後もインドへ私は訪れるだろう、そしてその際の命題として私はこの問いの答えを探していくことだろう。

<第五部>

おわりに

《謝辞》

第19期日本インド学生会議の活動において、私たちは非常に多くの方々にご支援、ご協力を賜り、様々な面で助けていただきました。学生会議と申しましても、学生だけではどうしても力の及ばないところや、目の行き届かない点多々あります。そのようなとき、皆様からの助言が、私たちをより実りある方向へと導いてくださいました。

下記の方々をはじめとする、多くの方々にご尽力いただき、第19回目となる日本インド学生会議を無事に開催できましたことを、この場を借りて実行委員一同心より御礼申し上げます。今後、第19期実行委員は、任務を全うした後もOBOGとして日本インド学生会議をサポートし、より良い学生会議づくりに励む所存でございます。これからもより一層のご指導いただけますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

2015年11月

第19期日本インド学生会議実行委員会 実行委員一同

助成： 独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 双日国際交流財団
公益財団法人 三菱UFJ国際財団

後援： 在日本インド大使館
在インド日本国大使館
在チェンナイ日本国総領事館
在コルカタ日本国総領事館
独立行政法人 国際交流基金
公益財団法人 日印協会

協力： 日本語会話協会
独立行政法人 JICA
(株)三井物産
デリー日本語学校 IJES
チェンナイ ABK-AOTS DOSOKAI
(株)日本テクノロジー

独立行政法人 JETRO
インド工科大学マドラス校(IITM)
(株)SRI CITY
Jadavpur University
NGO Destiny Foundation
Mather's House
コルカタ日本人商工会
月間インド通信
鹿子木 謙吉様
ラビンダー・マリク様
近藤 正規先生
長浜 浩子先生
鈴木 祐輔様
エア・インディア

《規約》

日本インド学生会議規約

前 文

日本インド学生会議は、日本とインドの両国の将来のために協議し、共に討議を行うことによってさらなる相互理解を深めることに最大の目的を置く団体である。ここに本学生会議が全ての学生に対してその門戸を平等に開き、本団体の主体を学生とすることを宣言し、この規約を確定する。そもそも本学生会議は学生の自主参加によるもので、会議全体の企画・運営は本会議を構成する学生にその権威を与えるものとし、その決定は構成員全体がこれを享受する。我々日本インド学生会議は、この規約を本学生会議における基本原理とし、これに反する如何なる規則、規定および決定を排除する。

日本インド学生会議は、両国そして国際社会の将来のために、全力を挙げて本団体の目的を達成することを誓う。

第一章 総則

第一条 名称

本団体は正式名称を「日本インド学生会議」とし、英語名を「Japan-India Student Conference」とする。

また、省略名称として「JISC(ジスク)」を使用する。

各代実行委員会に対しては「第○期日本インド学生会議実行委員会」、年一回の本会議に対しては「第○期日本インド学生会議本会議」を正式名称とする。尚、場合により「○○年東京(カルカッタ)大会」などの名称も使用する。(○は英数字とする。)

第二条 活動

(一)本学生会議は、前文で掲げた目的を遂行するために、以下の活動を行うこととする。

1. 本会議の開催
2. 本会議の準備のための定例会および勉強会の開催
3. 会議の議事および諸活動を記録した報告書の作成
4. 会議の成果を社会に還元するための報告会の開催
5. 以上の目的を遂行するために必要と思われるあらゆる活動

(二)本学生会議は、前文の内容に鑑み、特定の政治・宗教・信条から中立である。

(三)本団体公式マークを以下のようにする。



第三条 規約

本団体は、この「日本インド学生会議 規約」以外に、以下の各種規約・文書をそれぞれ設ける。

- 「日本インド学生会議 実行委員会規定」
- 「日本インド学生会議 OB・OG 会会則」
- 「日本インド学生会議 会費規定」
- 「日本インド学生会議 創設趣意書」
- 「日本インド学生会議 基本理念」
- 「日本インド学生会議 各代実行委員会趣意書」
- 「日本インド学生会議 長期計画案」

第二章 構成員および組織

第四条 構成員

日本インド学生会議は、実行委員、OB・OG 会員、発起人、顧問、賛助会員から構成され、これらを総括して構成員とする。

第五条 実行委員

日本インド学生会議実行委員たる要件は、別規定でこれを定める。

第六条 発起人

発起人は、本会議発足を全面的に援助し、創設のために用意された創設事務局経験者(石津達也氏、長浜浩子氏、後藤千枝氏)の3名である。

第七条 顧問

本団体は、一名以上の常任顧問を置く。顧問は本会議の主旨および目的に賛同し、かつ社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員会が委託する。

第八条 会計監査

本団体は一名以上の会計監査を置く。会計監査は社会的地位を有し、極めて相応しいと思われる外部の自然人または法人に、総会の承認を経て実行委員が委託する。

第九条 賛助会員

賛助会員は、創設事務局経験者、顧問経験者、および本会議実行委員会が本会議運営におけ

る協力者と認めたものとする。賛助会員は、本会議の活動報告を随時受ける権利を有する。

第十条 OB・OG 会

OB・OG 会は本学生会議実行委員会経験者によって構成される。OB・OG 会会員たる要件は別規定でこれを定める。

第十一条 総会

日本インド学生会議は、本団体の最高決定機関として総会を設置する。総会は以下の事項を決定する。

一、 役員の選出および罷免

二、 役員の退会

三、 予算および決算

四、 顧問の委託

五、 規約の改正

六、 その他必要と思われる事項

また総会は、現役実行委員長により招集され、全現役実行委員の三分の二以上(但し OB・OG の議決権が有効な事項に関しては、OB・OG 会事務局全員と全世話人の三分の一以上も含める)の出席で成立し、出席者の過半数で議決を採択する事ができる。

主な議案に対する、現役・OB/OG が持つ議決権の一覧は以下の通りである。

<議案>	<現役の議決権>	<OB/OG の議決権>
役員の選出および罷免	○	
役員の退会	○	
予算の承認	○	
決算の承認	○	○
顧問の委託		○
規約の改正	○	○
本会議の解散	○	○
活動方針の変更	○	○
OB/OG 会に関する事項	○	○

第十二条 任期および会計年度

(一) 任期および会計年度

実行委員会は、来期の本会議の六ヶ月前に改組し、その後一年間を任期および会計年度とする。

(二) 業務の延長

前項の任期の終了後も、実行委員会が必要と認めた業務に関しては、前任実行委員はその業務の遂行を求められ、それを拒否することはできない。

第十三条 退会

(一) 実行委員の任期中の退会は、実行委員長および当該者が所属する局長に届け出、承認されることにより認められる。

(二) 実行委員長および局長の退会は、実行委員全員の承認を必要とする。

第十四条 個人情報管理の努力規定

各構成員は、本団体の活動に際して知り得た個人情報(個人に関する情報であつて、個人が識別可能なものをいう。)について、みだりに団体外部および他の構成員に漏洩することのないように努めなければならない。

第三章 処分

第十五条 処分

(一) 長期に渡り実行委員としての義務を果たさず、かつ実行委員長、副実行委員長およびそれぞれの所属する局長に報告をしないもの、または前文に掲げた主旨および目的に著しく背く言動・行動をとり、なおかつ本会議運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員は、規定の有無にかかわらず、実行委員会の承認を経て実行委員会の名において、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(二) 総会は、長期に渡り実行委員としての義務を果たさない者、または前文に掲げた主旨及び目的に著しく背く言動・行動その他日本インド学生会議の運営に極めて支障になると認められる言動・行動をとる構成員に対して、規定の有無にかかわらず、3分の2以上の賛成で、強制退会を含む適切な処分をすることができる。

(三) 前項の処分についての発議しようとする構成員は、まず OB・OG 会事務局および、各期代表世話人に事実の調査の申立をしなければならない。

(四) 前項の申立を受けた OB・OG 会事務局および各期代表世話人は、申立人、被申立人(処分の対象として申立をされた者。以下同じ。)および他の構成員に対し、意見の聴取を含む事実の調査をおこなう。

(五) 総会は、処分についての議決を、OB・OG 会事務局および各期代表世話人の調査にのみ基づいてする。申立人、被申立人、その他関係人・OB・OG 会事務局および各期代表世話人が認めた者は、第 11 条の規定にかかわらず、議決権を有しない。

第四章 附則

第十六条 執行期日

この規約は実行委員長により公布され、実行委員全員の承認を得た時点でこれを執行する。

第十七条 改正

本会則の改正は現役実行委員会により発議され、第十一条の用件を以って、承認される。

第一回改正 平成 11 年 1 月 第二回改正 平成 12 年 4 月 第三回改正 平成 16 年

《編集後記》

本年度の日本インド学生会議 19 期の活動は大成功のうちに幕を閉じました。初めての経験尽くしで苦しくも一から自分たちで本会議を作り上げていくやりがいを感じた本会議前の準備。長かったようで短かった 24 日間のインドでの本会議、充足感と余韻に浸りながらも報告会準備で慌しく過ごした渡印後の日々。こうして報告書を編集しながら振り返ると日本インド学生会議は全てが素晴らしい学びの場でありました。活動を通して得られた貴重な経験は 19 期メンバーにとってかけがえの無い財産となりました。

私たちの活動、この経験がきっと日印の更なる友好、発展に繋がるよう信じて努めて生きたいと思っております。

最後に、19 期の活動を支えてくださった皆様、改めて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。皆様のますますのご活躍をお祈りするとともに、日本インド学生会議の今後の更なる繁栄を願っております。

2015 年 11 月 18 日

第 19 期日本インド学生会議 広報局長 中村 允

第 19 期日本インド学生会議報告書

2015 年 11 月発行

広報局長 中村 允

第 19 期日本インド学生会議実行委員会

代表 仲村 祐一

株式会社 エイト通商

編集

発行

印刷・製本